

ISSN 0386-6270

奈良県立
民俗博物館研究紀要

第 22 号

2006. 3

奈良県立民俗博物館

奈良県立民俗博物館研究紀要

第 22 号

目 次

奈良県内における長床犁の形態的な特徴	岩宮隆司	1
吉野地域の民俗資料におけるコレクション化の意義 —「吉野の山村生産・生活用具」の再編成と地域別コレクションの構築—	森本仙介	19
博物館とデータベース	中上哲也	30
【資料紹介】 民俗資料の中にみられる「茶臼」について —当館の収蔵資料から—	横山浩子	38

奈良県内における長床犁の形態的な特徴

岩宮 隆司

はじめに

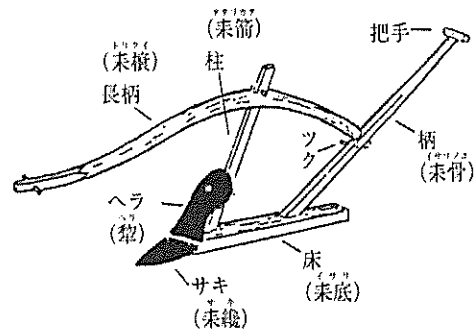
現在、奈良県立民俗博物館（以下、本稿では、「奈民博」と略記する）では、「奈良盆地の農業生産・生活用具」のコレクション化事業を進めている¹。本稿は、そのコレクション化事業の中で整理作業が一通り終了した長床犁について、基礎的なデータを公表すると共に、奈良県内における長床犁の形態的な特徴を明らかにしようとしたものである²。

1 分析視角

現在、奈民博には、昭和46年（1971）から平成17年（2005）12月末までに、奈良県内の各地から収集した60点の長床犁が収蔵されている。これらの長床犁の計測値や写真などを示したものが、後掲の図表④と写真①である³。

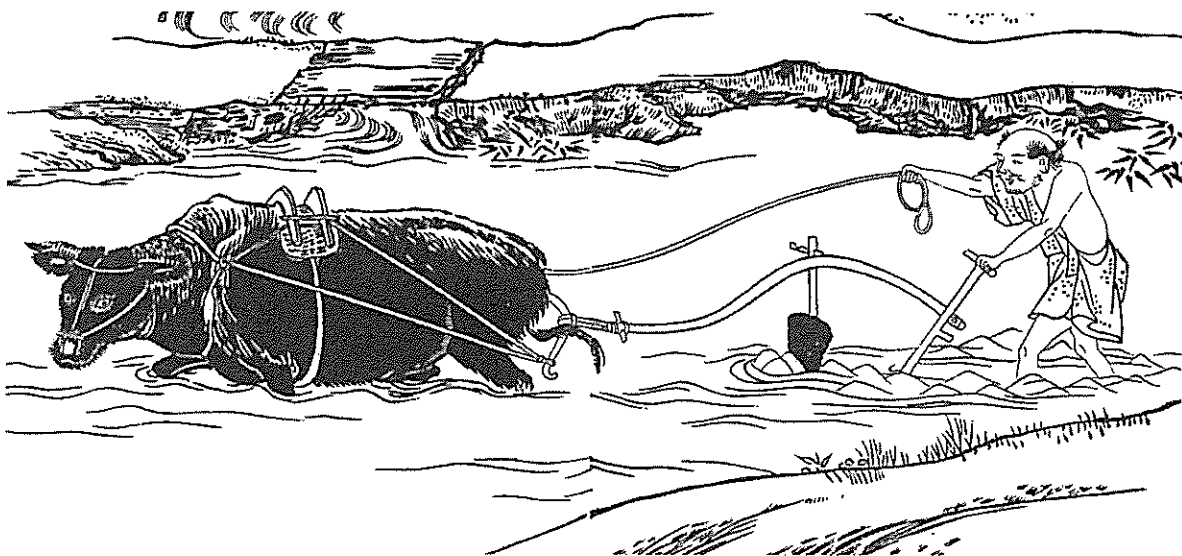
現在、奈民博が収蔵している長床犁の中で、収集地が判明しているのは、53点である。その内訳は、後述の地域区分に基づく、「北西部」33点（収集地判明分の62%、図表④・写真①のNo1～33）、「北東部」16点（30%、No34～49）、「中部」3点（6%、No50～52）、「南部」1点（2%、No53）となっている⁴。

犁とは、図表①で示した様に、田植えや麦まきなどをする前に、固くなった土を掘り起こすための農具である。犁は、「床」と呼ばれる部位の有無によって、「有床犁」と「無床犁」に分けられる。そして、有床



図表② 長床犁の部位名称

河野通明『日本農耕具史の基礎的研究』（和泉書院、1994年2月）の図Ⅷ-9を加筆して引用。（ ）内は『和名類聚抄』に記された名称。



図表① 長床犁を使用した作業風景

『絵本通宝志』（橘守国、享保14年〔1729〕）を一部改変して掲載。同書については、河野通明「橘守国『絵本通宝志』の基礎的研究〔上〕」（『商経論叢』36-1、2000年）を参照。

犁は、床の特徴によって、「長床犁」や「短床犁」などに細分される。

長床犁は、図表②で示した様に、牛馬につながる「長柄」（「犁轅」とも呼ばれる）、長床犁の向きを変える時などに握る「ツク」、牛馬が長床犁を牽引している時に、土を掘り起こす「サキ」、起こした土の塊を反転させて左横に落としていく「ヘラ」、作業中に耕作者が握る「把手」、長柄・把手・床を連結させる「柄」、長柄・ヘラ・床を連結する「柱」、サキ・ヘラ・柱・柄を固定させる「床」の8つの部位で構成されていた（以下、本稿では、各部位の特徴などを述べる時に、長柄がある方を「前側」、ツクがある方を「右側」、それぞれの逆を「後側」「左側」と表記する）。

これまで、奈良県内の長床犁は、主に、河野通明氏によって検討されてきた⁵。河野氏の諸論考は、鎌倉時代の絵画資料に描かれた犁、民具として各博物館に収蔵されている犁、神事用として神社に伝世されてきた犁を、文献史学・考古学・民俗学・民具学・物理学的な方法を用いて多面的に検証し、前近代における耕耘史の通説的見解に再考を促すものであり、その研究史上の成果は、多大なものであった。

しかし、河野氏の諸論考は、近畿を中心として、犁や鍬などの耕耘に関わる農業技術史を再検討することに主眼があり、必ずしも奈良県内の長床犁の特徴を明らかにしたものではなかった。そこで、本稿では、河野氏の研究視角や分析方法を踏まえながら、長床犁の形態差や数値データに基づいて、奈良県内における長床犁の地域的な特徴を明らかにしてみたい。その際に、特に問題となるのは、(A) どの部位の形状や計測値に基づいて分析していくのか、(B) どういう地域区分に基づいて分析していくのか、という点である。

先ず、(A) については、以下の理由から、本稿では、「床」「把手」の形状や計測値に着目して分析していきたい。

長床犁の中で、実際に土を掘り起こす作業を行うサキとヘラが、最も重要な部位であった。しかし、サキとヘラは、楔や紐などを使って床や柱に固定されているに過ぎなかったため、現存しているものが少ない⁶。従って、収蔵資料からサキやヘラの特徴を探るには、床や柱に残された脱着の痕跡を検証するしかない。また、農具を牽引する牛馬と人間の労働力を最大限に引き出して、効率的に作業を行うためには、サキ・ヘラと人間を取り結ぶ床や把手が重要な部位であった。そして、これまでの研究において、床の有無や大きさが注目されてきたことを勘案するならば、長床犁の地理的・歴史的な変遷過程は、特に、床の形状に端的に示されていると考えられる。従って、奈良県内の長床犁の特徴を探るには、床の加工状況を検証することが有効である。

次に、(B) については、以下の理由から、本稿では、「北西部（奈良盆地の平野部・丘陵部）」「北東部（大和高原・宇陀盆地・宇陀山地）」「中部（紀ノ川流域の低地部・溪谷部）」「南部（熊野川流域・北山川流域）」の4区分9地域に着目して分析していきたい。

奈良県は、大和川・淀川・紀ノ川・新宮川の水系によって、北西部・北東部・中部・南部に分かれていた（図表③④参照）。そして、それぞれの地域は、大和川・淀川・紀ノ川・新宮川の本流域と支流に分かれると共に、上・中・下流域で丘陵や平野を形成していた。これらの地域は、それぞれの自然環境や経済環境に既定されながら、独自の生業体系や地域社会を形成していた。

奈良県の「北西部」は、大和川とその支流が作り出した奈良盆地の平野部を中心として、その周辺に丘陵部が広がっていた。そして、平野部は、大和川中流域と、大和川に向かって「南流／北流／西流」する「富雄川・佐保川／曾我川・飛鳥川・寺川／布留川・纏向川」の中・下流域に、丘陵部は、奈良盆地を流れる大和川や諸河川の上流域と、生駒・金剛山脈と「矢田丘陵／西の京丘陵／馬見丘陵」との間を流れる「竜田川流域／富雄川の上流域／葛下川流域」に、細分された（以下、本稿では、奈良盆地を北流して大和川に流れ込む曾我川・飛鳥川・寺川などを総称して「大和川北流諸河川」と表記する）。「北東部」は、木津川（淀川の支流）に流れ込む宇陀川を中心に宇陀盆地があり、その北側と南側に大和高原と宇陀山地が広がっていた。そして、大和高原は、木津川に流れ込む白砂川・布目川流域と名張川（木津川の支流）に流れ込む遅瀬川・笠間川流域に、宇陀山地は、名張川に流れ込む背蓮寺川流域と名張川の上流域に、細分された。「中部」は、紀ノ川が西流している中流域には河谷低地が、それ以外の地域には紀ノ川の支流による溪谷が広がっていた。そして、溪谷部は、丹生川・津風呂川・高見川流域と紀ノ川の上流域に、細分された。「南部」は、吉野山地の西から東側に向かって、伯母山地・大峰山地・大台ヶ原山地が南北方向に連なり、その間を新宮川の支流である熊野川と北山川が南流していた。

以上より、本稿では、奈良博が収蔵している長床犁の形状・計測値や地形・水系に基づく4区分9地域との関係から、奈良県内における長床犁の形態的な特徴を探ってみたい。

2 分析結果

(1) 床

【サキの固定】

当館が収蔵している長床犁には、サキを床に固定させるために、特別な加工がされているものと、されていないものがある。そして、加工されている長床犁の中には、床の側面に溝が彫られたり、床の上面や側面に板材が付けられたり、溝と板材の両方が付けられたりしたものがある。そこで、以下、本稿や図表④では、加工されていないものを「未加工」型、溝が彫られているものを「加工（溝）」型、木材が上面や側面に付けられているものを「加工（木／上）」型・「加工（木／側）」型⁷、溝と木材などの加工が混合されているものを「加工（混）」と表記する。そして、当館が収蔵している長床犁60点の内、「未加工」型は38点（63%）、「加工（木／上）」型は14点（23%）、「加工（木／側）」型は2点（3%）、「加工（溝）」型は5点（8%）、「加工（混）」型は1点（2%）である。

この中で、収集地が判明しているのは、「未加工」型33点、「加工（木／上）」型12点、「加工（木／側）」型2点、「加工（溝）」型5点、「加工（混）」型1点である。その内訳は、「未加工」型の場合、北東部の全16点（48%）、北西部の葛下川の流域6点（18%）、大和川北流諸河川の中流域5点（15%）、富雄川の下流域と纏向川の流域各1点（3%）、中部の全3点（9%）、南部の全1点（3%）であり、「加工（木／上）」型の場合、北西部の竜田川の流域7点（58%）、佐保川の中流域の奈良市大安寺周辺3点（25%）、大和川北流諸河川の上・下流域各1点（8%）であり、「加工（木／側）」型の場合、全て富雄川の上流域にある生駒市高山町であり、「加工（溝）」型の場合、全て富雄川と佐保川の中流域にある大和郡山市と生駒郡安堵町であり、「加工（混）」型の場合、全て佐保川の中流域にある大和郡山市である。

以上より、奈良県内におけるサキの固定方法には、「未加工」型と「加工（溝）（木／上・側）（混）」型の2種類5種類があり、それぞれに地域差があったことが分かる。「加工（溝）（木／上・側）（混）」型の長床犁は、主に、北西部の大和川以北で使われ、それに隣接した奈良盆地の中心部や南辺でも散在的に使われていた。さらに、その中でも、「加工（木／上）」型は竜田川の流域や奈良市大安寺の周辺、「加工（木／側）」型は生駒市高山町、「加工（溝・混）」型を含めて溝が彫られた長床犁は大和郡山市・生駒郡安堵町、といった地域差があった。その一方で、それ以外の地域では、床を加工されていない「未加工」型の長床犁が使われていた。

【ヘラの固定】

当館が収蔵している長床犁には、ヘラを床の上面に固定させるのに、溝が彫られたものと、留め具が付けられたものがある。そして、これらの長床犁の中には、直線もしくは曲線状に溝が彫られたり、金属製もしくは木製の留め具が付けられたりしたものがある。また、金属製の留め具には、直接床に打ち付けられたものや、床の上面を少し彫り込んで付けられたものがある。そこで、以下、本稿や図表④では、直線もしくは曲線で溝が彫られているものを「溝（直）」型・「溝（曲）」型、金属製や木製の留め具が直接もしくは彫り込んで付けられているものを「留具（金／直）」型・「留具（金／彫）」型・「留具（木／直）」型・「留具（木／彫）」型と表記する。そして、当館が収蔵している長床犁60点の内、「留具（金／直）」型は29点（48%）、「留具（金／彫）」型は16点（27%）、「溝（直）」型は10点（17%）、「溝（曲）」型は4点（7%）、「留具（木／直）」型は1点（2%）、「留具（木／彫）」型は0点（0%）となっている。

この中で、収集地が判明しているのは、「留具（金／直）」型23点、「留具（金／彫）」型17点、「溝（直）」型9点、「溝

「曲」型3点、「留具(木/直)・(木/彫)」型0点である。その内訳は、「留具(金/直)」型の場合、北東部の宇陀川の流域7点(30%)、青蓮寺川と布目川の流域各2点(9%)、遅瀬川の流域1点(4%)、北西部の富雄川と佐保川の下流域各3点(13%)、富雄川の上流域・竜田川と纏向川の流域・大和川北流諸河川の下流域各1点(4%)、中部の紀ノ川の西流域・丹生川の流域各1点(4%)、南部の全1点(4%)であり、「留具(金/彫)」型の場合、北西部の葛下川の流域6点(35%)、大和川北流諸河川の中流域5点(29%)、同上流域1点(6%)、北東部の宇陀川の流域4点(24%)、中部の紀ノ川の西流域1点(6%)であり、「溝(直)」型の場合、北西部の竜田川の流域6点(67%)、富雄川の上流域2点(22%)、同中流域1点(11%)であり、「溝(曲)」型の場合、北西部の佐保川の中流域のみである。

以上より、奈良県内におけるヘラの固定方法には、「溝(直・曲)」型と「留具(金/直・彫)(木/直)」型の2類型5種類があり、それぞれに地域差があったことが分かる。「溝(直・曲)」型の長床犁は、主に、北西部の大和川以北で使われていた。そして、その中でも、「溝(直)」型は、竜田川の流域と富雄川の上・中流域、「溝(曲)」型は、佐保川の中流域にある奈良市大安寺付近、といった地域差があった。その一方で、それ以外の地域では、留め具でヘラを固定する「留具(金/直・彫)」型の長床犁が使われていた⁸。そして、その中でも、「留具(金/彫)」型は、東北部の宇陀盆地と中部の紀ノ川低地部で収集された5点を除くと、北西部の大和川以南に集中していた⁹。また、「留具(木/直)」型の長床犁(No54)は、収集地は不明だが、当館で唯一の事例として注目される。

【側面の加工】

当館が収蔵している長床犁には、床の側面が直線的に削られたものと、柱が付けられる部分が細く削り込まれたものがある。そこで、以下、本稿や図表④では、前者を「直線」型、後者を「削込」型と表記する。そして、当館が収蔵している長床犁60点の内、「直線」型は39点(65%)、「削込」型は21点(35%)となっている。

この中で、収集地が判明しているのは、「直線」型34点、「削込」型19点である。その内訳は、「直線」型の場合、北西部の竜田川の流域7点(21%)、富雄川・佐保川・葛下川の流域各6点(18%)、大和川北流諸河川の中流域2点(6%)、同下流域1点(3%)、纏向川の流域1点(3%)、北東部の布目川の流域2点(6%)、遅瀬川の流域1点(3%)、中部の丹生川の流域と南部は各1点(3%)であり、「削込」型の場合、北東部の宇陀川の流域11点(58%)、青蓮寺川の流域2点(11%)、北西部の大和川北流諸河川の中流域3点(16%)、同上流域1点(5%)、中部の紀ノ川の西流域2点(11%)である。

以上より、奈良県内における床の側面には、「直線」型と「掘込」型の2類型があり、それぞれに地域差があったことが分かる。「直線」型の長床犁は、主に、南側の丘陵部分を除いた北西部と北東部の大和高原で使われていた。そして、事例が少なく、どこまで一般化できるか不明であるが、「直線」型は、中部や南部の溪谷部でも使われていた。その一方で、「削込」型の長床犁は、主に、北東部の宇陀盆地・宇陀山地や中部の紀ノ川低地部で使われ、それに隣接した北西部南側の丘陵でも使われていた。

【裏面の加工】

当館が収蔵している長床犁には、床の裏面に、木製や金属製の板で補強されているものと、補強されていないものがある。そして、補強されている長床犁の中には、木や鉄などの同一素材で補強が繰り返されたり、木材で補強された後に鉄材が付けられたり、その逆順で補強されたりしたものがある。そこで、以下、本稿や図表④では、補強されていないものを「未補強」型、木や金属などの同一素材で補強されているものを「補強(木)」型・「補強(金)」型、木と金属が混合して補強されているものを「補強(混)」型と表記する。そして、当館が収蔵している長床犁60点の内、「未補強」型は39点(65%)、「補強(木)」型は13点(22%)、「補強(金)」型は5点(8%)、「補強(混)」型は3点(5%)である。

この中で収集地が判明しているのは、「未補強」型34点、「補強(木)」型12点、「補強(金)」型5点、「補強(混)」型2点である。その内訳は、「補強(木)」型の場合、北西部の佐保川の流域5点(42%)、富雄川の上流域2点(17%)、同中流域1点(8%)、竜田川の流域にある生駒市北新町・生駒郡平群町2点(17%)、北東部の布目川の流

域2点(17%)であり、「補強(金)」型の場合、北西部の竜田川の流域にある生駒市東菜畑・一分町4点(80%)、佐保川の中流域1点(20%)であり、「補強(混)」型の場合、北西部の竜田川の流域にある生駒市一分町と佐保川の中流域各1点(50%)であり、「未補強」型の場合、北西部の大和川北流諸河川7点(21%)、葛下川の流域6点(18%)、富雄川の中・下流域各1点(3%)、纏向川の流域1点(3%)、北東部の宇陀川の流域11点(32%)、青蓮寺川の流域2点(6%)、中部の全3点(9%)、南部の全1点(3%)である。

以上より、奈良県内における床裏には、「未補強」型と「補強(木・金・混)」型の2類型4種類があり、それぞれに地域差があったことが分かる。「補強(木・金・混)」型の長床犁は、主に、北西部の大和川以北と北東部の布目川の流域で使われていた。そして、その中でも、竜田川の中流域にある生駒市東菜畑・一分町では、金属で床裏を補強する事例が多かった。その一方で、それ以外の地域では、床裏を補強しない「未補強」型の長床犁が使われていた。

【高さ】

当館が収蔵している長床犁60点の床の高さは、21～114mmの間であり、その平均値は、63mmである¹⁰。床の高さに関する特徴としては、(a)全体の73%(44点)が、40～80mmに集中していること、(b)40～80mmの中でも、34%(15点)が、40～49mmに集中していること、(c)50mm以降は、床が高くなるに連れて微減傾向にあること、(d)70～80mmと100～110mmの所では、一時的に点数が増加することである。これらの特徴は、上記で述べた、床の側面や裏面の加工状況(「直線」・「削込」型／「未補強」・「補強」型)と関係していた。

そこで、まず、床の形態や補強材との関係に注目しながら検討したい。

前述の通り、「直線」型と「削込」型の長床犁は、それぞれ39点と21点収集されている。「削込」型の床の高さは、30～62mmであり、その平均値は、47mmである。そして、その中でも、9点(43%)が40～46mmに、5点(24%)が48～54mmに集中している。一方、「直線」型の床の高さは、21～114mmであり、その平均値は、71.5mmである。そして、その中でも、11点(28%)が70～80mmに、8点(18%)が100～110mmに集中している。また、「未補強」型と「補強」型の長床犁は、それぞれ39点と21点収集されている。「未補強」型の床の高さは、21～80mmであり、その平均値は、50mmである。そして、その中でも、15点(38%)が40～49mmに、10点(27%)が51～60mmに集中している。一方、「補強」型の床の高さは、56～114mmであり、その平均値は、87mmである。そして、その中でも、18点(86%)が、71mm以上に集中している。

以上より、「直線」型と「補強」型の床は厚くて、「削込」型と「未補強」型の床は薄いことが分かる。そして、当館が収蔵している「補強」型の長床犁が、全て「直線」型であったことを勘案すると、「直線」型と「補強」型は、密接な関係にあったと考えられる¹¹。

次に、収集地に注目しながら検討したい。

当館が収蔵している長床犁60点の内、収集地が判明しているのは、「直線」型34点、「削込」型19点である。その内訳と床の高さの平均値は、「直線」型の場合、北西部の龍田川の流域は7点で95mm(補強材を含めると106mm)、富雄川・佐保川・葛下川の流域は各6点で82・90・37mm(補強材を含めると112・114・—mm)、大和川北流諸河川の中流域は2点で54mm、大和川北流諸河川の下流域と纏向川の流域は各1点で47・21mm、北東部の布目川の流域は2点で65mm(補強材を含めると89mm)、遅瀬川の流域は1点で66mm、中部の丹生川の流域は1点で58mm、南部は1点で65mmであり、「削込」型の場合、北西部の大和川北流諸河川の上流域は1点で44mm・同中流域は3点で56mm、北東部の宇陀川の流域は11点で47mm・青蓮寺川の流域は2点で50mm、中部の紀ノ川の西流域は2点で35mmである。

以上より、「直線」型の長床犁の床は、北西部の大和川以北で厚く、葛下川・纏向川の流域で薄くなっており、北東部でもやや厚くなっていった。そして、大和川以北の竜田・富雄・佐保川の流域においても、上流域の方が、下流域より、厚くなる傾向があった。その一方で、「削込」型の長床犁の床は、明瞭な特徴を見いだせない。しかし、北西部の大和川北流諸河川の特定地域(No28・29)では、床の厚い長床犁が、中部の紀ノ川流域の低地部では、床の薄い長床犁が使われていた。

(2) 把手

【形状】

把手には、把手と柄が2つの用材で作られて分離しているものと、1つの用材で作られて一体化しているものがある。そして、把手と柄が分離している長床犁の中には、進行方向に対して、把手が垂直方向と水平方向に取り付けられたものがある。そこで、以下、本稿や図表④では、前者を「分離(直)」型、後者を「分離(平)」型、把手と柄が一体化しているものを「一体」型と表記する。そして、当館が収蔵している長床犁60点の内、「分離(直)」型は51点(85%)、「分離(平)」型は8点(13%)、「一体」型は1点(2%)である。

この中で、収集地が判明しているのは、「分離(直)」型45点、「分離(平)」型7点、「一体」型1点である。その内訳は、「分離(直)」型の場合、北西部の32点(71%)、北東部の13点(29%)であり、「分離(平)」型の場合、中部の全3点(43%)、北東部の青蓮寺川の流域2点(29%)、北西部の富雄川の上流域と南部は各1点(14%)であり、「一体」型の場合、北東部の宇陀川の流域1点(100%)である。

以上より、奈良県内における把手の形状には、「分離(直・平)」型と「一体」型の2類型3種類があり、それぞれに地域差があったことが分かる。「分離(平)」型の長床犁は、主に、中・南部の吉野山地や北東部の宇陀山地で使われていた。その一方で、「分離(直)」型の長床犁は、主に、それ以外の北西部や北東部の大和高原・宇陀盆地で使われていた。この様に、使用地域が明確に分かれている中で、「一体」型のNo45と「分離(平)」型のNo8は、特例的に使われた事例として注目される。

おわりに

本稿は、奈良県内における長床犁の特徴を「床」「把手」の形状や計測値に基づいて、明らかにしようとしたものである。最後に、論点を整理してみたい。

北東部の長床犁は、特別な加工をしないでサキを固定する点、金属製の留め具でヘラを固定する点、が共通していた。しかし、(a)大和高原の長床犁が、床裏を補強し、床の側面を直線的に削っていたのに対して、宇陀盆地と宇陀山地の長床犁は、床裏の補強をしないで、柱が付けられる部分の側面を細く削っていた点、(b)大和高原と宇陀盆地の長床犁が、把手を進行方向に対して垂直に付けたのに対して、宇陀山地の長床犁は、把手を水平に付けていた点、は異なっていた。また、ヘラの固定方法については、宇陀盆地で例外もあったが、留め具を直接床に打ちつけるのが一般的であった。

中・南部の長床犁は、事例が少なく、どこまで一般化できるか不明だが、特別な加工をしないでサキを固定する点、金属製の留め具でヘラを固定する点、床裏を補強しない点、把手を進行方向に対して平行に付けた点、が共通していた。しかし、丹生川や熊野川流域の溪谷部の長床犁が、床の側面を直線的に削っていたのに対して、紀ノ川西流域の低地部の長床犁は、柱が付けられる部分の側面を細く削り込んでいた点は、異なっていた。また、ヘラの固定方法については、紀ノ川西流域の低地部で例外もあったが、留め具を直接床に打ちつけるのが一般的であった。

この様に、今回検討した部位について、北東部と中・南部の長床犁では、それぞれの地域で共通性があった。しかし、北西部の長床犁には、地域全体に共通する要素がなかった。但し、把手の付け方や床の側面の加工については、富雄川上流域や大和川北流諸河川の上流域で例外もあったが、進行方向に対して把手を垂直に付け、側面を直線的に削るのが一般的であった。

それに対して、大和川以北の長床犁が、床裏を補強し、サキを固定する加工を施し、ヘラを固定する溝を彫るのが、一般的であったのに対して、それ以外の地域の長床犁は、床裏の補強やサキを固定する特別な加工をしないで、ヘラを固定する留め具を使うのが、一般的であった点は、異なっていた。また、その中でも、サキやヘラを床に固定する方法、床裏の補強材や補強方法、床の高さなどについては、竜田・富雄・佐保川流域などで、細かい地域差があった。

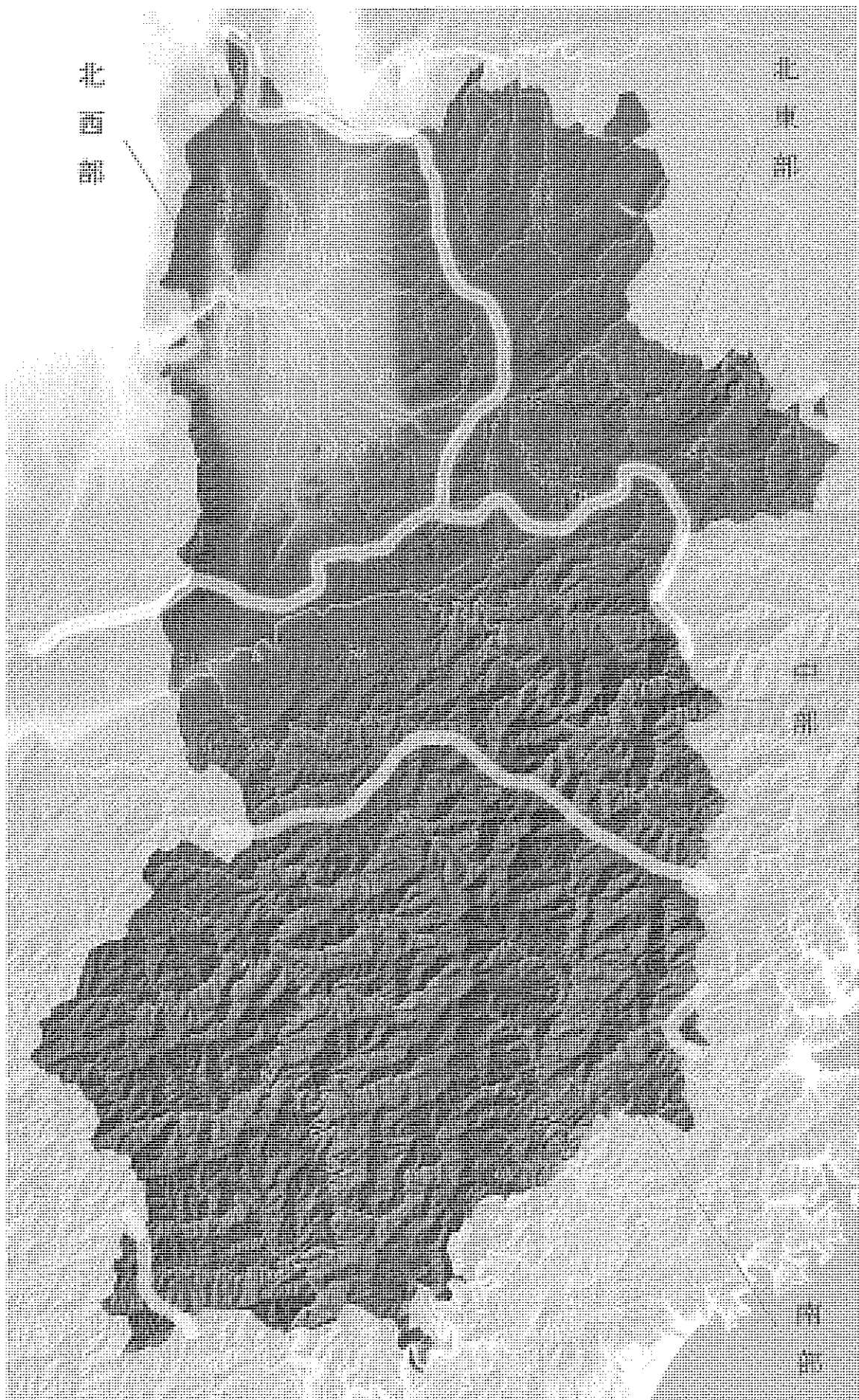
以上より、奈良県の「北西部（奈良盆地の平野部・丘陵部）」「北東部（大和高原・宇陀盆地・宇陀山地）」「中部（紀ノ川流域の低地部・溪谷部）」「南部（熊野川流域・北山川流域）」の長床犁には、それぞれ形態的な特徴があったことが分かる。

そして、この地域的な形態差の中で、特に注目されるのが、以下の3点である。(a)北西部の大和川以北におけるサキ・ヘラの固定方法、床裏の補強、床の厚さ、(b)北東部の宇陀盆地・宇陀山地と中部の紀ノ川低地部における床側面の加工、(c)中・南部の吉野山地や北東部の宇陀山地における把手の形状である。

そこで、今後は、本稿の分析結果で得られた奈良県内の長床犁の形態的な特徴が、どの要因に基づいて形成されてきたのかを考察し、奈良県内における長床犁と人々との関わりを明らかにしていきたい。

註

- 1 「奈良盆地の農業生産・生活用具」コレクション化事業の概要については、拙稿「奈良盆地の農業生産・生活用具－コレクション化に向けて－」(『民俗博物館だより』94〔奈民博、2004年〕)を参照。なお、本稿では、2004年4月1日当時の市町村名を使用している。
- 2 拙稿「奈良県内における馬鍬の形態的な特徴」(『奈良県立民俗博物館研究紀要』21、2005年)は、本稿と同じ主旨で執筆したものである。
- 3 奈民博が収蔵している長床犁の概略については、以前に、拙稿「奈良県内の牛耕用具」(特別展図録『民具が語る暮らしの変遷－資料収集30年の軌跡－』〔奈民博、2004年〕、以下、本稿では、「前稿」と称する)で述べたことがある。本稿は、その後の調査成果に基づいて記したものである。もし前稿と本稿でデータや表記などが異なっていた場合には、本稿の内容を現段階における正式報告とする。
- 4 さらに地域ごとの収集点数を細かく見ていくと、北西部では、奈良盆地の「平野部」17点(収集地判明分の32%)・「丘陵部」16点(30%)、北東部では、「大和高原」3点(6%)・「宇陀盆地」11点(21%)・「宇陀山地」2点(4%)、中部では、紀ノ川流域の「低地部」2点(4%)・「溪谷部」1点(2%)、南部では、「熊野川流域」1点(2%)・「北山川流域」0点(0%)となっている。
- 5 河野通明「鎌倉絵画にみる犁」・「御田植神事の模型犁」・「長床犁の形と性能についての基礎的考察」(前の2つの論文は、1985・89年に初出、後に同氏「日本農耕具史の基礎的研究」〔和泉書院、1994年〕に改稿して所収したもの。最後の論文は、上掲書の刊行時に執筆したもの)。また、これまでの犁に関する研究史とその問題点については、これらの論文を参照。
- 6 実際に、サキとヘラの両方、もしくは、ヘラのみが装着された状態で収蔵されている長床犁は、それぞれ2・1点(No48・54/33)しかない。また、No15は、装着されていた可能性のあるヘラが収蔵されている。そして、現在では、脱漏してしまい、どの長床犁に装着されているのか不明となったサキとヘラは、それぞれ8・6点収蔵されている。
- 7 「加工(木/上)」型の長床犁は、床の上面が幅約30mm・深さ約15mm削られ、そこに床の幅よりも長い約200mmの板材が1枚埋め込まれている(但し、龍田川流域だけは、2枚の板材が左右から埋め込まれている)。また、「加工(木/側)」型は、床の側面にほぞ穴が作られ、そこに板材が埋め込まれている。
- 8 留め具の長さの平均値は、「留具(金/彫)」型が105mm、「留具(金/直)」型が93mmとなっている。但し、北東部や南部で散見される、留め具の床に固定する部分が二つに分かれた長床犁(No34・36・37・53)の平均値は、141mmとなっている。
- 9 宇陀盆地から収集された「留具(金/彫)」型の内訳は、菟田野町3点(No40～42)、大宇陀町1点(No47)となっている。大宇陀町の長床犁が、他地域の「留具(金/彫)」型と同じ様な加工がされているのに対して、菟田野町の長床犁は、異なっている。そして、菟田野町の中でも、No40・42とNo41は、異なった加工がされている。
- 10 床の高さは、床の後側の断面部分における最高地点を計測した。
- 11 床の高さが、平均値の63mm以上である「直線」型は21点あるが、その中で、18点(86%)が、床裏を補強されている。それに対して、床裏を補強されていない「直線」型(18点)は、床の高さの平均値が53mmであり、その中で、16点(89%)が、71mm以下に集中している。



図表③ 長床犁の収集地

国土地理院「数値地図 50m メッシュ」・「数値地図 50000」（2000・1年）を基に加筆して作成。

図表④ 長床犁の収集一覧

《凡例》

項目名		内 容		表 記				
収 集 地	旧村名	明治21年(1889)当時の収集地の郡・村名		—				
	地 域 区 分	大和川水系	奈良盆地の平野部		北西部	平野部		
			奈良盆地の丘陵部			丘陵部		
		淀川水系	大和高原		北東部	大和高原		
			宇陀盆地			宇陀盆地		
			宇陀山地			宇陀山地		
		紀ノ川水系	紀ノ川流域の低地部		中部	低地部		
			紀ノ川流域の溪谷部			溪谷部		
		新宮川水系	熊野川流域		南部	熊野川		
			北山川流域			北山川		
全 体		長	把手の先から長柄の先までの測定値		(単位はmm)			
		幅	床の左側からツク(欠損時は把手)の右側までの測定値					
		高	床の底面から把手の上面までの測定値					
床	側面	床の側面が直線的に削られたもの		直線				
		柱が付けられる床の側面が削り込まれたもの		削込				
	サキ	固定方法	サキを床に固定する加工がないもの		未加工			
			サキを床に固定する加工があるもの	床の側面に溝が彫られているもの		加工	溝	
				床の上面に木材が付けられているもの			木	上
				床の側面に "				側
				溝と木材の加工が混在しているもの			混	
	ヘラ	固定方法	ヘラを床に固定する溝があるもの	床の上面に直線状の溝が彫られているもの		溝	直	
				" 曲線状の "			曲	
		ヘラを床に固定する留具があるもの	" 金属製の留具が直接付けられているもの		留具	金	直	
			" 金属製の留具が彫り込んで付けられているもの				彫	
			" 木製の留具が直接付けられているもの			木	直	
		留具	床の上面に付けられた留具の長さ(*は留具欠損のため数値不明のこと)		(単位はmm)			
		彫込	留具を付けるために彫り込まれた部分の長さ					
		裏 面	補強方法	床の裏面に補強がないもの		未補強		
床の裏面に補強があるもの	木片で補強されているもの			補強	木			
	金属片で "				金			
木片と金属片の補強が混在しているもの		混						
把 手	形状	把手と柄が分離しているもの	進行方向に対して、把手が垂直に付けられているもの		分離	直		
			" 平行に "			平		
	把手と柄が一体化しているもの		一体					
登録番号	奈民博の収蔵番号		—					

※長床犁全体の「長・幅・高」、床の「長・幅・高」、床にヘラを固定するための「留具・彫込」、床の裏面補強材の「厚」の中で、()を付けた数字は、資料の一部が欠損しているため、現存部分のみを計測した値である。

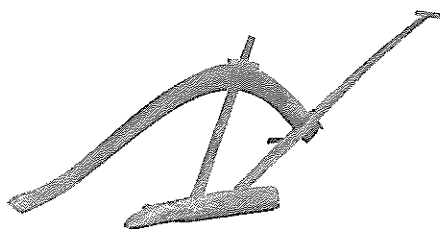
No	収集地			全体				床					把手		備考	登録番号																
	現住所	郡名	旧村名 村名	地域区分	長	幅	高	長	幅	高	側面	サキ 固定方法	ヘラ 固定方法	彫込 留具			補強方法	裏面 補強方法	形状													
1	生駒市	平群郡	北生駒村	丘陵部	2230	220	910	810	120	80	直線	加工	溝	直	-	木	29	直	-	900102												
2					1900	230	860	593	130	103						金	2				直	-	9916485									
3					1720	240	850	605	153	100						混	25							直	-	9917764						
4					1790	260	960	700	110	114						金	1										直	-	900070			
5					2275	245	1020	815	123	100						留具	90													直	-	9917762
6					2260	220	920	814	135	105						溝	-															
7	2370	210	850	818	100	65	側	18	直	-	1300064																					
8	2550	175	1110	770	115	95	未加工	木				61	直	-	900053																	
9	2310	250	990	780	125	101		留具				35				直	-	9917763														
10	2135	245	865	905	105	71		加工				未補強							-	直	-	9917402										
11	2760	210	940	834	109	72						溝							16				直	-	9909405							
12	2730	190	1010	825	116	79						留具							14							直	-	9907684				
13	2800	245	1030	850	130	75			留具	50	直	-							1600257													
14	2750	225	945	815	136	103	加工		木	20			直	-	9903898																	
15	2700	285	940	815	137	109			上カ	7						直	-	9909406														
16	2650	240	965	838	138	90		木	30	直										-	9917533											
17	2830	220	980	860	135	75		上	29													直	-	9900485								
18	2910	215	850	835	75	80		溝	10																直	-	9916232					
19	2840	895	815	80	80	留具		13	直		-	9916233																				
							混	15					直	-	9916233																	
							留具	20								直	-	9916233														
							直	88		直									-	9916233												
							直カ	*													直	-	9916233									
							直	118																直	-	9916233						
							直	118	直		-	9916233																				

No	取集地			全体				床						把手	備考	登録番号			
	現住所	旧村名		地域区分	長	幅	高	長	幅	高	側面	サキ 固定方法	ヘラ				裏面 補強方法	厚	
		郡名	村名										固定方法						留具 形込
20	桜井市	笠中	式上郡	平野部	2235	270	955	850	85	21	直線	未加工	直	115	-	-	9904997		
21	當麻町 南今市	當麻村	葛下郡	丘陵部	2360	240	840	1010	70	30	直線	未加工	膨み	*	30	-	2900039		
22	當麻町 加守	當麻村	葛下郡	丘陵部	2950	220	785	1058	130	60	直線	未加工		97	10	-	2900055		
23	北葛城郡	上牧町 上牧	葛下郡	丘陵部	2810	235	830	1065	110	57	直線	未加工		88	5	-	3100118		
24	北葛城郡	河合町 葉井	広瀬郡	北西部	2540	210	880	1050	105	40	直線	未加工		95	20	-	3100100		
25	高市郡	河合町 葉井	高市郡	北西部	2680		835 (960)		51		直線	未加工		90		-	3400009		
26	高市郡	王寺町 本町	葛下郡	北西部	2530	250	860	1035	110	40	直線	加工 木上	膨	73	15	-	3200057		
27	高市郡	高取町 清水谷	高市郡	平野部	2430	275	745	1004	140	44	削込	未加工		138	38	-	2600008		
28	高市郡	明日香村 小山	高市郡	平野部	2420	210	810	955	138	60	削込	未加工		125	60	-	2700013		
29	橿原市	田中町	橿原市	平野部	2220	180	890	918	130	62	削込	未加工		120	70	-	500057		
30	北葛城郡	広陵町 大塚	広瀬郡	平野部	3020	215	780	1038	100	48	直線	未加工		70	18	-	3300022		

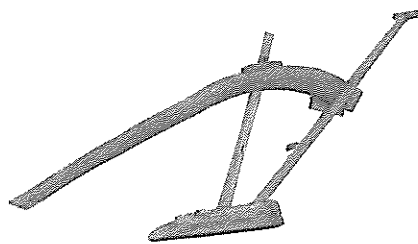
No	収集地			全体				床						把手		備考	登録番号	
	現住所	旧村名 郡名 村名	地域区分	長	幅	高	長	幅	高	側面	サキ 固定方法	ヘラ		裏面				形状
											固定方法	留具	彫込	補強方法	厚			
31	北葛城郡 広陵町 三吉	廣瀬郡 馬見村	平野部	2460	280	820	1000	130	60	直線	未加工	彫	108	10	未補強	10	-	3300010
32	磯城郡 田原本町 薬王寺	十市郡 平野村	北西部	2420	235	770	895	160	45	削込	加工 木上	直	38	38	未補強	38	1900002	
33	磯城郡 三宅町 屏風	式下郡 三宅村	大和高原	2700	310	895	930	120	47	直線	未加工	直	75	75	未補強	75	1800044	
34	山辺郡 山添村 切幡	山辺郡 豊原村	大和高原	2560	260	980	965	70	70	直線	未加工	直	140	140	未補強	140	1200336	
35	山辺郡 郡祁村 下深川	山辺郡 針ヶ部所村	大和高原	2320	190	970	915	164	74	直線	加工 木上	直	105	105	未補強	105	1100371	
36	山辺郡 山添村 峰寺	添上郡 東山村	大和高原	2360	200	1100	833	120	56	直線	未加工	直	123	123	未補強	123	1200001	
37	宇陀郡 榛原町 諸木野	宇陀郡 内牧村	宇陀盆地	2330	250	870	940	190	47	削込	未加工	直カ	*	143	未補強	143	2200035	
38	宇陀郡 榛原町 檜敷	宇陀郡 伊那佐村	宇陀盆地	2060	240	855	814	190	58	削込	未加工	直	117	117	未補強	117	2200052	
39	宇陀郡 榛原町 三宮寺	宇陀郡 伊那佐村	宇陀盆地	2570	235	830	872	135	45	削込	未加工	直	120	120	未補強	120	2200119	
40	宇陀郡 菟田野町	宇陀郡 宇賀志村	宇陀盆地	2460	270	925	994	190	38	削込	未加工	彫	(45)	(45)	未補強	(45)	2100510	
41	宇陀郡 宇賀志	宇賀志	宇陀盆地	2550	280	760	940	190	44	削込	未加工	彫カ	*	*	未補強	*	9917761	
42	宇陀郡 菟田野町 下芝野	宇賀志 宇賀志村	宇陀盆地	2280	250	790	1010	159	43	削込	未加工	彫	105	105	未補強	105	2100226	
43	宇陀郡 菟田野町 入谷	宇賀志 宇賀志村	宇陀盆地	2580	260	810	938	200	53	削込	未加工	直	110	110	未補強	110	2100306	
44	宇陀郡 菟田野町 東郷	宇賀志 宇賀志村	宇陀盆地	2390	225	840	850	185	50	削込	未加工	直	125	125	未補強	125	2100591	
45	宇陀郡 菟田野町 別所	宇賀志 宇賀志村	宇陀盆地	2280	260	810	853	151	41	削込	未加工	直	92	92	未補強	92	2100129	
46	宇陀郡 大字院町	宇賀志 宇賀志村	宇陀盆地	2240	205	820	827	183	46	削込	未加工	直	92	92	未補強	92	2000001	

No	収集地				全体				床										登録番号	
	現住所	旧村名		地域区分	長	幅	高	長	幅	高	側面	サキ		ヘラ		裏面		形状		備考
		郡名	村名									固定方法	加工	固定方法	留具	固定方法	影込			
47	大宇陀町 口今井	宇陀郡	神戸村	宇陀盆地	2360	260	820	855	170	50	削込	加工	金	影カ	25	木	未補強	直	9906130	
48	宇陀郡 曾爾村 山船	宇陀郡	室生村	北東部	1920	300	780	830	130	48	削込	未加工	直カ	直	155	未加工	未補強	サキ・ヘラ：現存	2400116	
49	宇陀郡 曾爾村 伊賀見	宇陀郡	曾爾村	山地	2190	210	825	843	140	51	削込	未加工	直カ	直	147	未加工	未補強	平	2400058	
50	五條市 大深町	智郡	阪合部村	漢谷部	2580	200	905	997	170	58	直線	未加工	直カ	*	*	未加工	未補強	700016		
51	相谷町	智郡	阪合部村	低地部	2470	210	750	980	120	30	削込	未加工	直カ	影	78	未加工	未補強	700024		
52	吉野郡 下市町 付島	吉野郡	秋野村	中部	2350	235	870	1035	122	40	削込	未加工	直カ	直	157	未加工	未補強	3700019		
53	天川村 北小原	吉野郡	天川村	熊野川	2090	225	970	865	120	65	直線	未加工	直カ	直	180	未加工	未補強	4000016		
54					1985	300	780	905	70	26	削込	加工	金	影カ	*	35	未加工	サキ・ヘラ：現存 登録番号：2400016 可能性あるが台帳なし	9918380	
55					2340	195	860	1023	35	40	削込	加工	金	影カ	*	35	未加工	直	9917336	
56					2660	200	945	800	117	99	直線	加工	木	曲	-	37	補強	サキ：固定する木板の溝のみ現存 ヘラ：固定溝に木と釘	9917401	
57					2790	210	930	888	126	58	直線	加工	木	直カ	*	-	未補強	直	9917519	
58					2860	215	920	868	58	58	直線	未加工	金	直	100	補強	補強	床裏：木板で2回、金属板で1回補強	9917520	
59					2220	270	840	808	145	80	削込	未加工	金	影カ	*	64	未補強	直	9917765	
60					2700	225	950	920	155	62	削込	未加工	金	影	55	未補強	未補強	直	9917766	

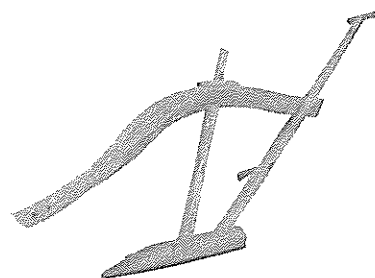
写真① 長床犁の一覧(1~12)



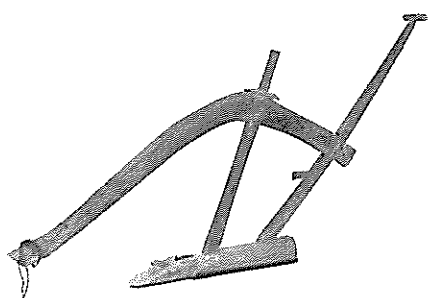
1



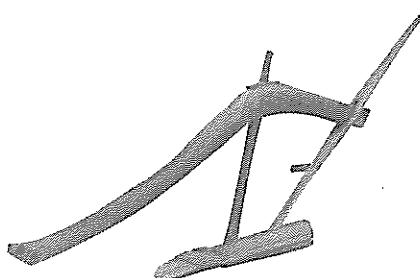
2



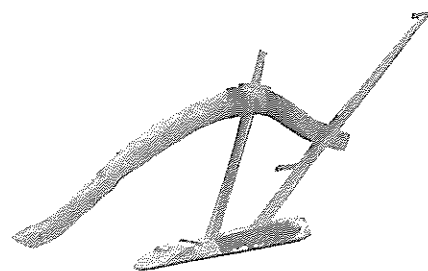
3



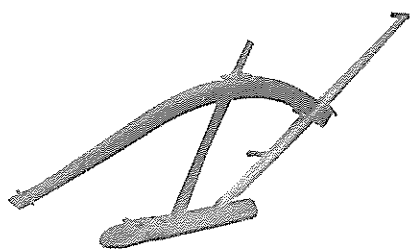
4



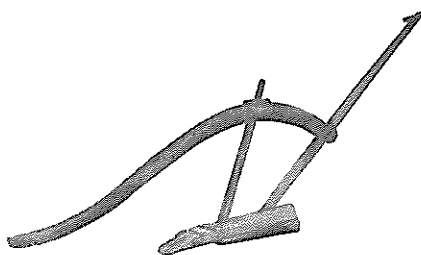
5



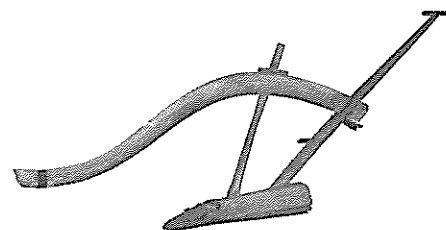
6



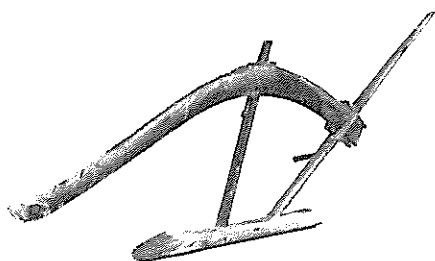
7



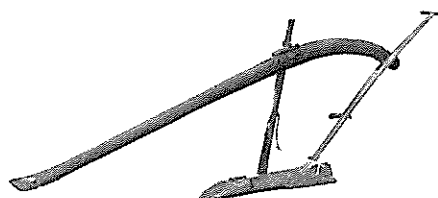
8



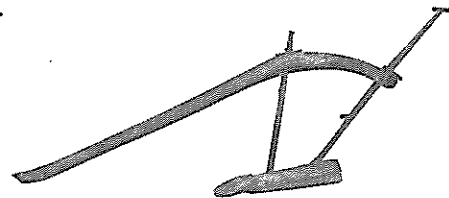
9



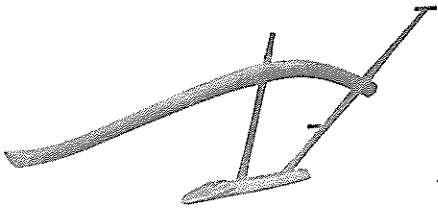
10



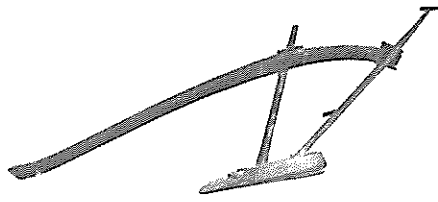
11



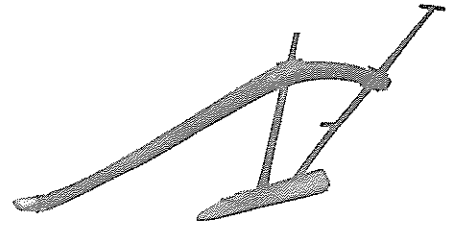
12



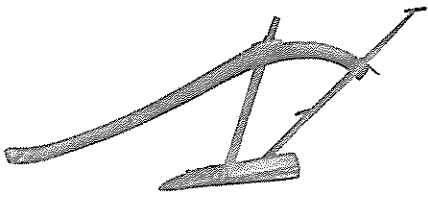
13



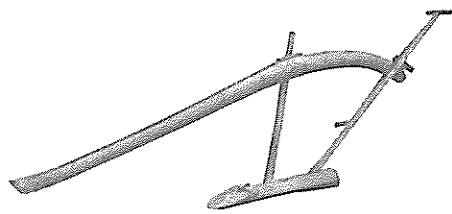
14



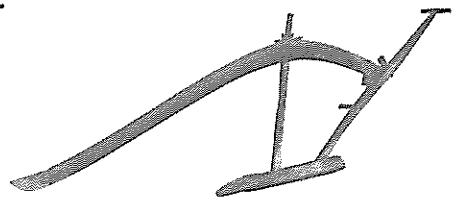
15



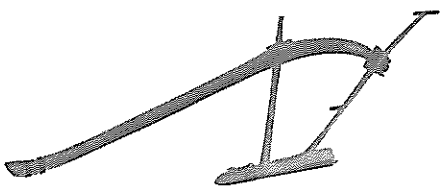
16



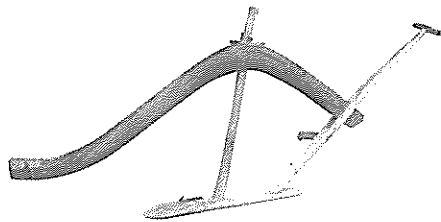
17



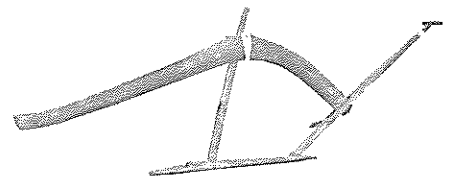
18



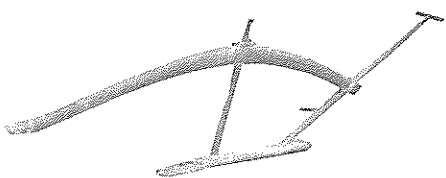
19



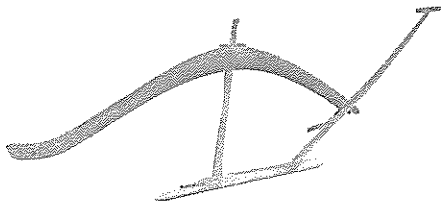
20



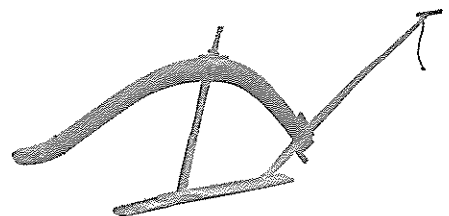
21



22

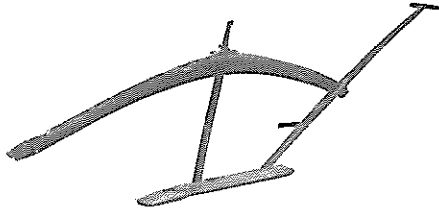


23

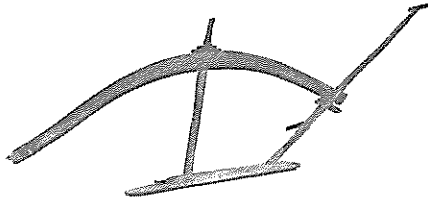


24

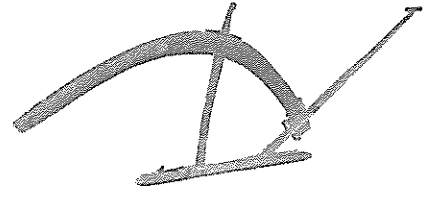
写真① 長床犁の一覧(25～36)



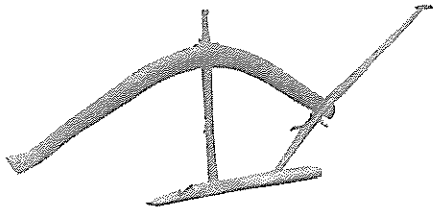
25



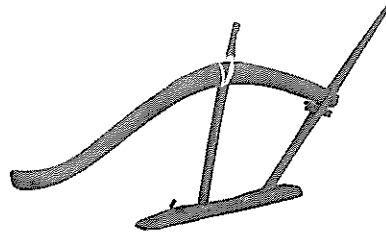
26



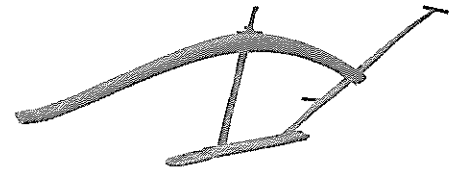
27



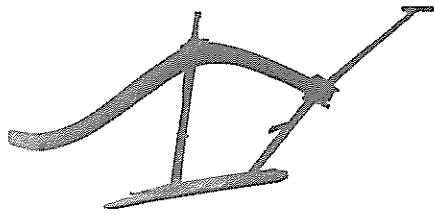
28



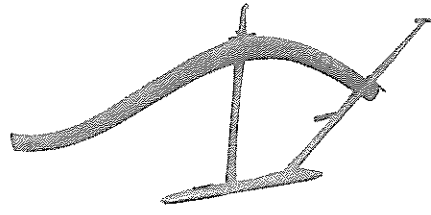
29



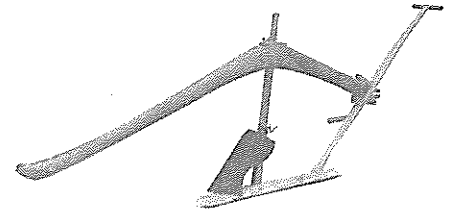
30



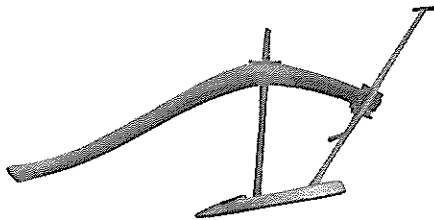
31



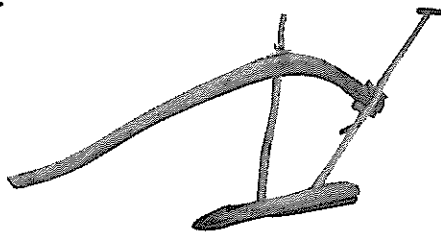
32



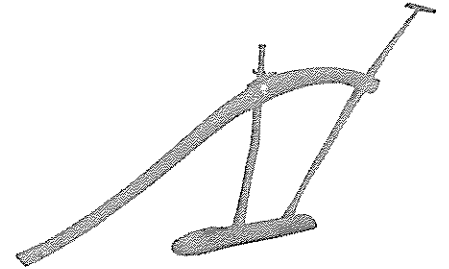
33



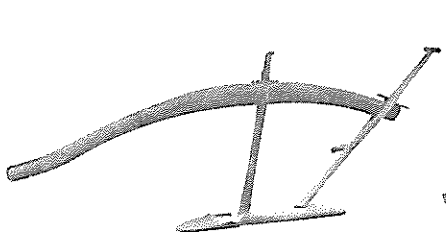
34



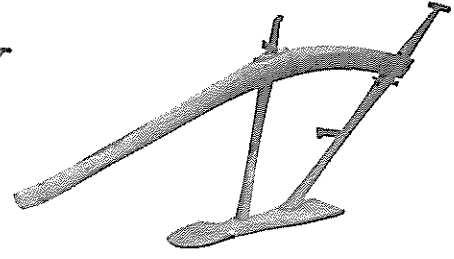
35



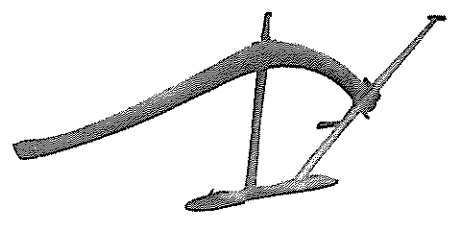
36



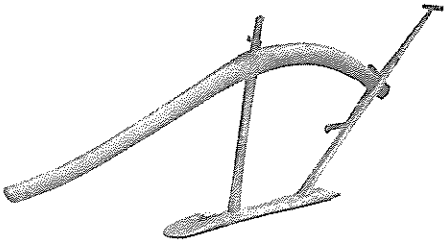
37



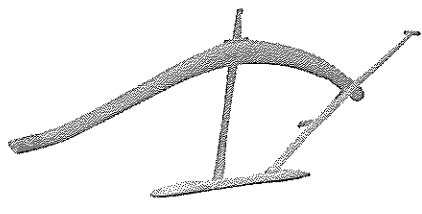
38



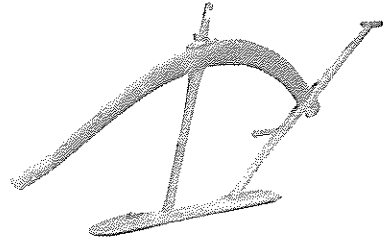
39



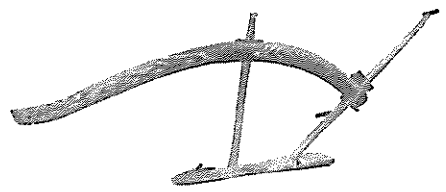
40



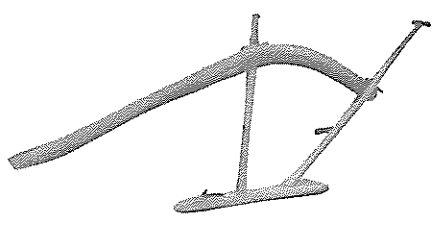
41



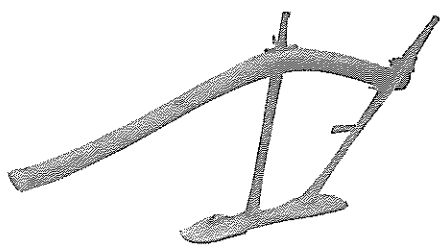
42



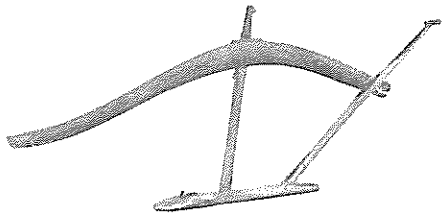
43



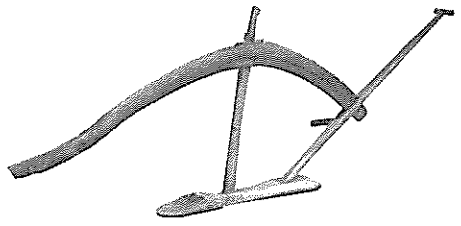
44



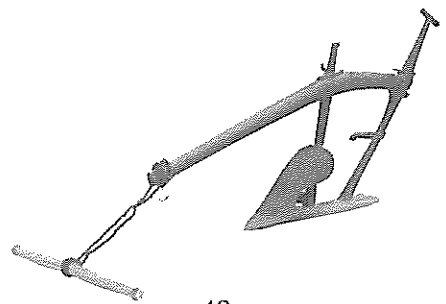
45



46

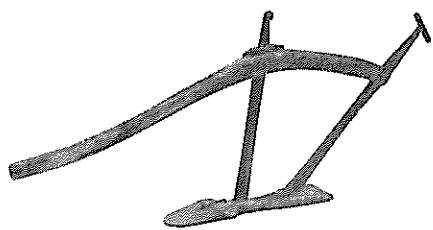


47

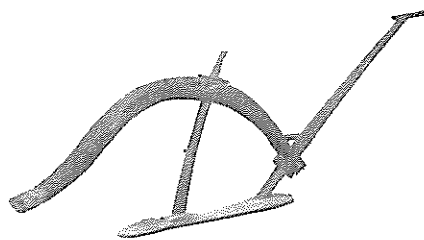


48

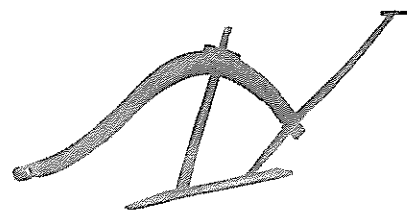
写真① 長床犁の一覧(49〜60)



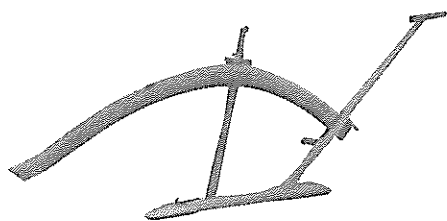
49



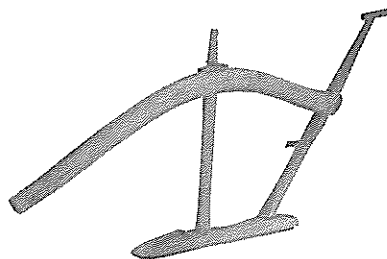
50



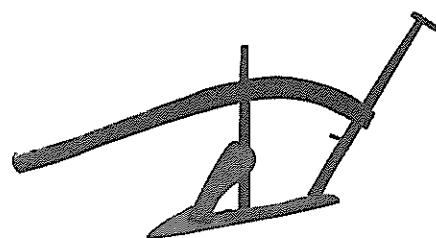
51



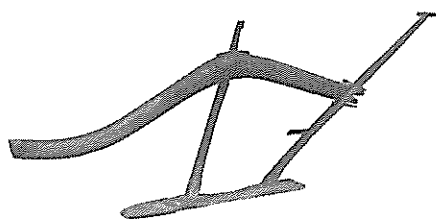
52



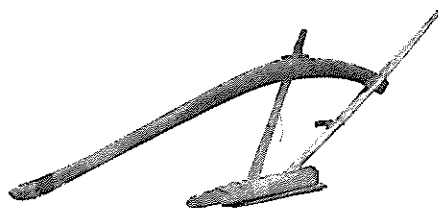
53



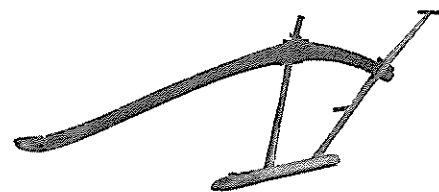
54



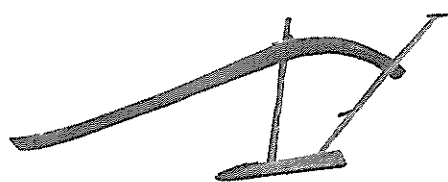
55



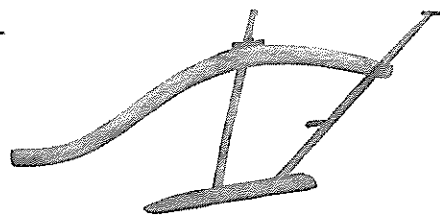
56



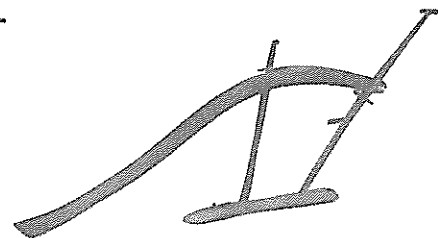
57



58



59



60

吉野地域の民具資料におけるコレクション化の意義

—「吉野の山村生産・生活用具」の再編成と地域別コレクションの構築—

森本仙介

はじめに

当館も全国の多くの博物館、資料館と同じく、当初より明確な体系のもとに、民具が集められてきたわけではない。人々の生活のもっとも身近に存在し、それゆえありふれた民具＝民俗資料は、不要になればかたんに廃棄されてしまう運命にある。

当館（奈良県立民俗博物館）は1974年に「郷土の風俗慣習及びこれに伴う生活用具等で生活の推移の理解に欠くことのできない資料の保存と活用を図」るために設置され、「民俗資料に関する調査研究を行」い、これを「収集し、保存し、及び展示する」ことを館の事業とすることが条例で定められている¹。この条例に基づき、民俗資料の収集、保存に最大限努めてきたといえる。

その結果、開館時に7,566点であった民具資料も、30年あまりの間に登録点数だけでも約4倍の3万点近くを収集することができた（未登録の民具を含めると約6倍の4万点以上）。しかし、近年は整理人員の不足に加え、展示や普及活動などの日常業務に追われ、増加する寄贈依頼民具の収集量に整理作業が追いつかない状態であったことも事実である。

転居や新築にともなう家屋の解体や改築のなかで、大量の民具を一括して受け入れる場面も増えてきており、なかには大型ゴミとして捨てられるべきものも多く含まれている。このような状況の中、日々増加する収集民具によって空間が占有され、整理作業を行うスペースの確保も困難な状態が続いていた。このことが、整理・登録作業の遅れや、資料の出納における混乱を招いていることは明白である。

このような状態を改善すべく、平成15年度からは、寄贈依頼のあった民具については下見を経た上で、選択的に寄贈を受けている。スペースを占有する大型の民具で、同一地域での重複の著しい資料については検討の結果、最終的には収集を断念する可能性もある。

平成14年度より始まった館蔵資料のコレクション化も、このような状態を改善する一策として考え出された経緯がある。

コレクション化とは、この30年間に収集された膨大な館蔵資料の再整理をはじめ、民俗調査を通して新たな資料を収集し、既存の館蔵資料とあわせて体系的な民具コレクションの形成を目指すものである。このことは博物館業務が大量収集の段階から調査・整理の段階へと大きく力点をシフトしたことをものがたっている。つまり、すべてを受け入れる未選別な収集から、一定の基準に基づいた選択的な収集への転換であり、換言すれば、「受動的な収集」から「積極的な収集」への方針転換である。この選択の1つの基準となるのが、コレクション化という考えである。

1. 「吉野の山村生産・生活用具」とコレクション化事業について

コレクション化とは、開館当初より採用する文化庁方式に基づく分類細目によって「いったん仕分けられた民具をあるテーマのもとに統合して、当館の収集意図を明確化」し、「一定のテーマのもとに、ストーリー性をもった資料群に組み立て直す作業」であり、「平成14年度より、核となる資料がある程度蓄積できたと判断し得たものから、順次内容の整理を行うとともに補足調査・収集を集中的に進め、資料群としての充実を図る方向へシフトしてゆくこととな」ったとされる²。

昭和46～48年に全県下の市町村の専門調査員に委嘱された第1次収集（第1次、第2次所在調査）、昭和54

年（1979）に製造・信仰用具等を中心に市町村に寄贈を呼びかけた第2次収集以来、当館は悉皆的な民具収集を行っていない。また、これらの収集は、量的な面では大きな成果をあげたものの、地域の民俗を当館の学芸員が現地調査によって理解しながら、必要な資料を収集するという体系的な収集とは異なっていたため、地域の中における民具資料の位置付け、民具に関する聞き取りデータの蓄積には大きな課題が残されたままであった³。

このような中、平成14年度、「吉野の山村生産・生活用具」を対象にしたコレクション化がはじまった。これは、昭和58年（1983）3月に奈良県の有形民俗文化財として指定を受けた「吉野の山村生産用具」1,226点を核として館蔵民具を再整理し、新たな民具コレクションに組み直すことを検討するものであった。県指定は主として当館における収集民具から「生産用具」に相当する資料のリストアップ作業によって構成された資料群であったが、コレクション化ではその範囲を「生活用具」にまで拡大している。

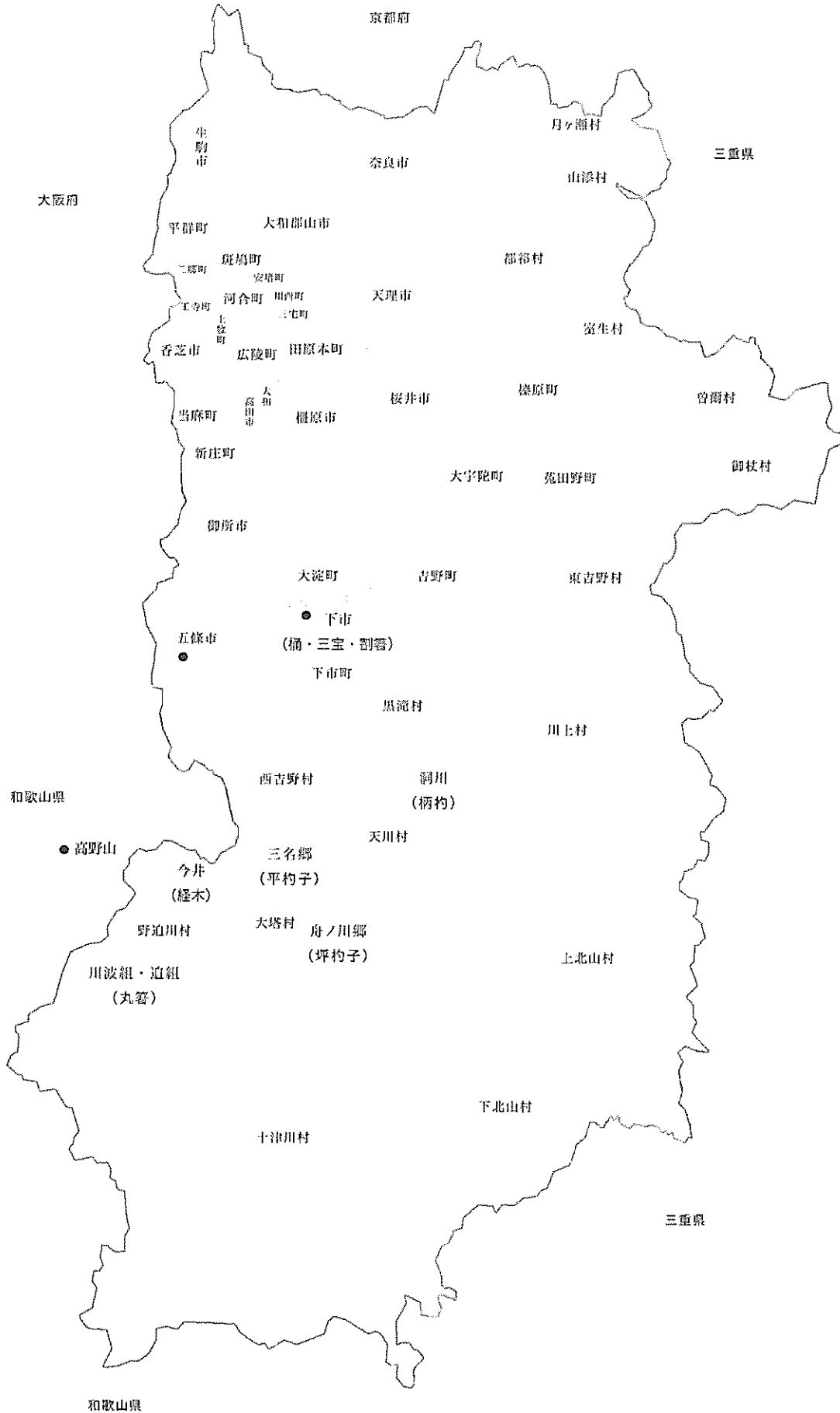
平成14～16年度には、「吉野の山村生産・生活用具」として⁴、実測図と写真が揃えられ、平成15年度からは民具の補足調査・収集を行っている⁵。しかし、吉野という県面積の約6割を占める、広大な山地の生産と生活のすべてを短期間で体系的にカバーすることは困難であるとの判断から、作業の過程で複数の個別コレクションを順次積み上げていく方式を採用した。

そこで、第一弾として「吉野の山村生産・生活用具」より吉野地域における木材、林産加工物といった生産用具に焦点を絞ったコレクションとして「吉野林業と林産加工用具」（仮）を平成18年度を期限として完成させることとなった⁶。

この「吉野林業と林産加工用具」コレクションでは、館蔵民具を一定の分類基準（たとえば「川上村における林業用具」「野迫川村における丸箸製造用具」）のもとで再整理しながら、分類ごとに調査・収集を行うことで、不足しているものについては積極的に収集することを目指した。具体的な作業としては、一連の工程を文献や現地調査によって詳細に洗い出し、対応する個々の民具を特定し、不足している民具を補足収集することに努めた。館蔵民具には資料情報の不足したものも多いため、現地での聞き取りによってデータを補足していくことも重要である。これには民具のリストや写真、時には実物を現地に持って行って聞き取り調査を行うなどの方法をとることも多い⁷。また、古写真や記録映像、文書なども積極的に収集・複製し、データベース化することでコレクション化の一環として活用できるように考えている。

分類表

(1)	林業用具	(A)	植林用具	吉野全域
		(B)	伐採用具	
		(C)	木挽用具	
		(D)	搬出用具	
		(E)	その他	
(2)	林産加工用具	(A)	樽丸製造用具	黒滝村・川上村・天川村など
		(B)	桶製造用具	下市町
		(C)	三宝製造用具	下市町
		(D)	割箸製造用具	下市町
		(E)	丸箸製造用具	野迫川村
		(F)	経木塔婆製造用具	野迫川村
		(G)	柄杓製造用具	天川村
		(H)	平杓子製造用具	天川村
		(I)	坪杓子製造用具	大塔村
		(J)	挽物製造用具	吉野町・黒滝村・大塔村・西吉野村

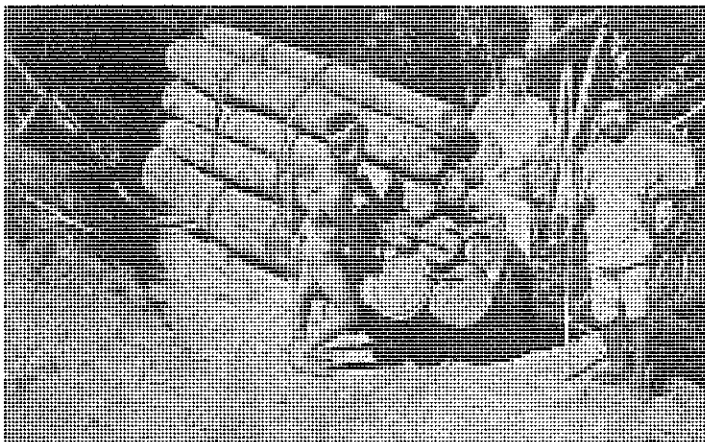


2. 「吉野林業と林産加工用具」(仮) コレクションについて

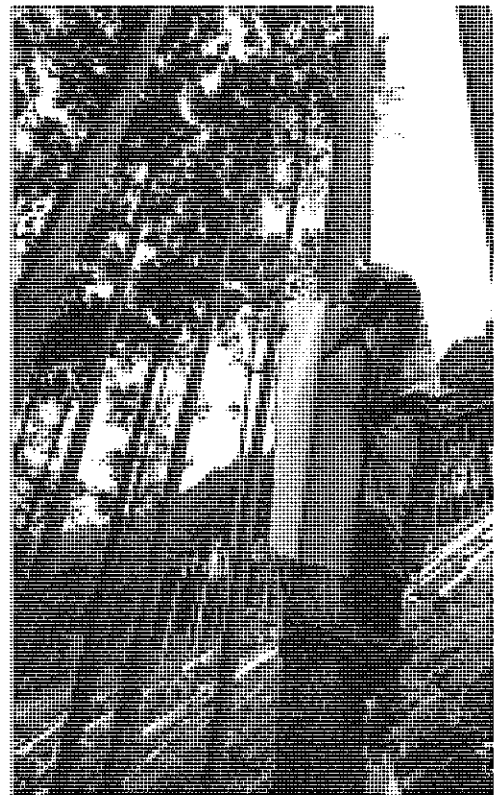
分類表(仮)を参照していただければわかるように、コレクションは、(1)林業用具と(2)林産加工用具とに大きくわかれる。

資料は明治以降から昭和30年代にかけて使用されていたものが中心であり、先進的な育成林業を完成させた吉野林業及び各種林産加工の用具を通し、「近代」における吉野地方の山林利用の諸相を明らかにすることがこのコレクションの目標である。それは吉野林業の技術体系を民具によって表現すると同時に、伝統的な天然林の利用が歴史的・地理的にどのように継続、変化したのかを見定めることでもある。

以下、分類ごとに簡単な説明を加えたい。



キンマ(木馬)
キンマという様に材木を載せて山から搬出した。



吉野川(吉野郡)

(1) 林業用具

植林・伐採から木挽、搬出に至るまでの林業用具が、吉野郡から広く収集されている。なかでも「吉野林業」の中心地として知られる吉野川上流域の川上村がその中心であり⁸、これらの地域は従来の天然林の利用から、スギ、ヒノキを植林して育て、伐採した材木を筏に組んで吉野川へ流す育成林業に早くから移行した地域である。最大の木材消費地である大阪市場に近く、吉野川の水運によって和歌山、大阪への輸送が発達したことが、木材、林産物の商品化を進展させ、植林を主とする育成林業の発展を促した要因であった。

樹種や適地の選定からはじまり、計画的に下刈・密植・紐打ち・除伐・枝打・間伐を行うことで節が無く真っ直ぐで、年輪の細かく素直に通ったスギの大径木を育て、伐倒・渋抜を経て商品価値の高い優良材を生産する技術が完成されたのである。



樽丸製作用具

(2) 林産加工用具

林産加工用具は、吉野東部を中心とした(A)～(D)、吉野西部を中心とした(E)～(I)、吉野南部・西部から徐々に北部・西部に産地の移動した(J)から構成されている。

(A)樽丸製作用具は黒滝村や川上村、天川村を中心に収集されている。樽丸とは酒樽の板材であるクレを運搬のために東ねたものである。

江戸時代、灘や伊丹方面の清酒関係良材の需要が激増することで、スギの植林が大きな比重を占めるようになり、その生産過程で生まれる小・



桶のシアゲ
ウチマルガンナで桶の内側を仕上げ削りする。

中径木も有効的に利用するという集約的な（採算性の高い）林業が吉野で発達した。樽丸への利用目標のために、樹種や適地の選定からはじまり、計画的に下刈・密植・紐打ち・除伐・枝打・間伐を行うことで節が無く真っ直ぐで、年輪の細かく素直に通ったスギの大径木を育て、伐倒・渋抜を経て商品価値の高い優良材を生産する技術が完成されたのである。

黒滝村は吉野における樽丸生産の発祥地であり、享保年中に和泉国堺の商人が芸州から職人を黒滝村烏住に連れて来て製造を始めたと伝えられる。後に烏住から川上村の高原にその技術が伝えられ、次第に吉野全郡に拡がっていったという⁹。吉野の樽丸師は紀伊半島だけに限らず、遠くは四国や北陸、中国地方にまで出稼ぎに出かけたという。

吉野産の林産物の集散地である下市町からは (B) 桶製作用具、(C) 三宝製作用具、(D) 割箸製作用具が収集されている。中世後期には町場として成立していたといわれる下市は、吉野山地の産物

が集荷され、取引地としての機能を果たすとともにこれらの関連加工業も盛んであった。

樽丸や桶はシン（心）の部分の薄いアカ（赤身）を使用するが、櫃や割箸は吉野スギの外側のシロ（白身）であるコワ（木皮）で作られる。割箸は現在でも日本随一の産地である。

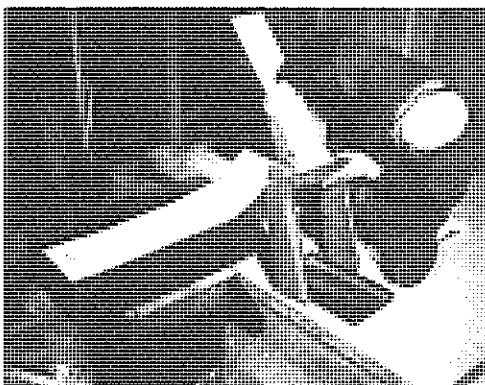
また、三宝は「三方」とも書き、神仏または貴人に供物を奉ったり、儀式で物をのせる神具の台で、方形の折敷をヒノキのシロで造り、前・左・右の「三方」に刳形のある台を取り付けた。下市には近世から続く、漆塗りされた膳（折敷）を中心とした漆器産業が隆盛を誇っていた。

(A)、(D)の川上村、黒滝村、下市町など吉野東部を中心に生産される林産加工品がいずれも吉野林業によって生みだされるスギ、ヒノキを原料としているのに対し、(E)～(J)はスギ、ヒノキ以外にも多様な雑木を原料としているところに特徴がある。

吉野川の水運に恵まれ、早くから育成林業が発達し、スギ、ヒノキの商品化が進んだ川上村・東吉野村を中心

とする吉野川上流域の吉野東部に対し、吉野西部は、十津川流域の深い谷に遮られたために大規模な出材が難しく、原材料を持ち運べる形に加工してから出材せざるを得ない場合も多い。そのため、ここでは東部とは異なり、木材の商品化が遅れ、人工林だけでなくスギ、ヒノキを含めた天然林の多様な山林利用が遅くまで見られ、山仕事のない冬の主な収入源になっていた。

高野山麓の野迫川村の迫組、川並組からは、江戸時代より「高野箸」として知られた (E) 丸箸製作用具が収集されている。これらの村々では冬には一家総出で箸作りをし、山仕事のない時の主な収入源になっていた。これもスギ、ヒノキの針葉樹だけでなく、ミズキ（時にはタカノツメ）のようなシロキが用いられた。



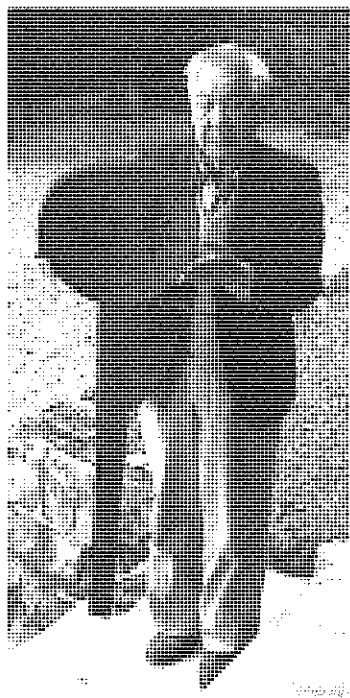
柄杓のマゲ



丸箸のアラケズリ
オシガンナの柄の先に布を置いて支点にし、上下に動かす。



榎木塔婆の乾燥



池神社（下北山村池峰）の大杓子
 天川村広瀬の源藏が安政2年（1856）に奉納したもの。広瀬は弘化3年（1846）、慶応3年（1867）の「氏子狩帳」に塩野、流尾とともに記載があることから、この頃には村人に杓子職人が多かったことがうかがえる。おそらく源藏も広瀬から下北山村池峰付近の山へ泊まりがけして、杓子を製造していたのであろう。なお、この大杓子は掘りの浅い平杓子（味噌杓子）であるが、型としては坪杓子に類似している（当館にも同型のものが数点ある）。三名郷の広瀬や塩野、流尾において昭和30年代まで作られていた平杓子はすべて撥型（柄尻が撥状になっている現在でも一般的によく見られるもの）の飯杓子であった。三名郷では幕末に安芸の宮島から杓子作りを習ったと伝えられているが（シロキ製の特別な撥杓子を三名郷ではミヤジマという）、おそらく、これは杓子の起源ではなく、撥杓子の起源を指しているものと思われる。宮島とは製造方法も道具もまったく異なっており、むしろ大塔村舟川郷の篠原、惣谷で作られていた坪杓子と系統的には同じである。現在、天川村、大塔村で写真のような形の平杓子は見られないことから、これは宮島発祥の撥型の平杓子が吉野に導入される幕末以前の形態であると推測される。三名郷では、撥型でない柄をスゴキ（直木）といい、尺以上の大杓子や撥製の撥杓子に用いられる。



このほか、野迫川村今井からは(F) 経木塔婆製作用具が収集されている。これは木材を紙のように薄く削った経木でできた板塔婆（上部を塔形にした細長い木の板）の一種で、死者の追善供養のため墓に立て、梵字や経文、戒名などを記す。今井は原料であるゴヨウマツやアカマツ、モミなどの天然の針葉樹が周囲に多く、江戸時代より続く経木塔婆の生産地であった。

大峰山麓、天川村東部の洞川からは、(G) 柄杓製作用具が収集されている。柄杓とは曲物の容器に柄を付けた、水や肥料などの液体を汲む道具¹⁰。ヒノキを木目に沿って剥ぎ割り、これを円く曲げて作る。洞川では山仕事のない冬期の主な収入源であり、奥山の共有林で泊まりがけし、天然のヒノキの巨木を伐採して材料としたという。容器としての曲げ物の歴史は桶よりも古く、すでに古代から盛んに作られている。

大塔村東部からは(H) 坪杓子製作用具、天川村西部からは(I) 平杓子製作用具が収集されている。明治以降も杓子を作り続けた定住型の木地屋（杓子屋）集落として、大塔村旧舟川郷の篠原、惣谷、あるいは天川村旧三名郷-塩野を中心とした西部の塩谷、滝尾、広瀬など一が知られている。これらの集落は舟

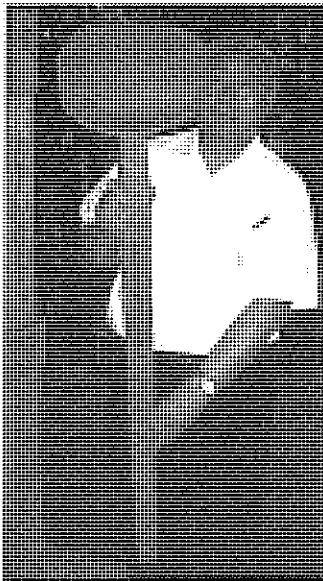
ノ川、天ノ川がつくる深い谷の急斜面に家がはり付くようにして集落が形成されており、焼畑や山の産物によって生活が成り立ってきた村々である。江戸末期の「氏子狩帳」にも記されるこれらの村々は、篠原、惣谷が粥や汁物をすくう坪杓子（粥杓子）、三名郷は御飯をよそう平杓子（飯杓子）を専門にしており、明治から大正にかけて、日本最大の杓子生産地となった吉野における拠点と



平杓子のシアゲ



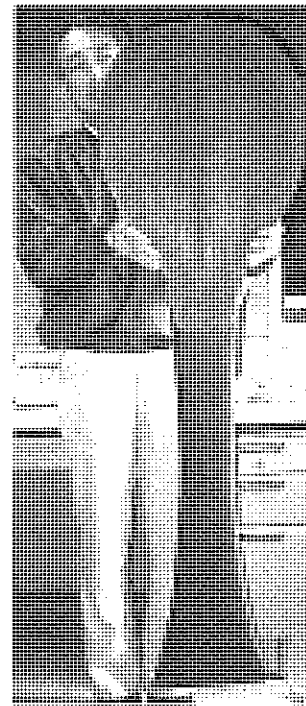
坪杓子のナカウチ



地蔵堂（黒滝村烏住）の大杓子
明治36年に天川村中谷の中西余吉・留吉の兄弟が作った坪杓子。この地蔵峠で地蔵の靈験によって一命を救われたため奉納したと伝える。中西兄弟は親の代に大塔村篠原からクリの木を求めて、中谷の草庵谷へ小屋がけし、そのまま定住したという。



西利商店の着板用の大杓子（高野山）



加藤商店（加藤庄蔵商店）の着板用の大杓子（下市）

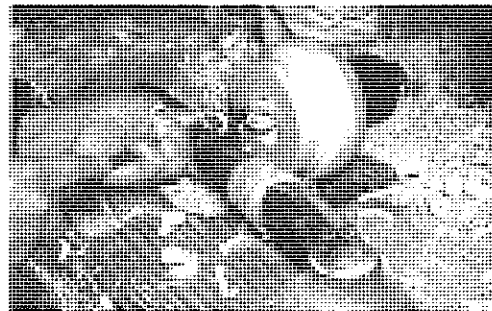


福田商店（福田音吉商店）の店頭に残る着板用の大杓子（大淀町）

なっていた。明治の全盛期には篠原や惣谷、塩野ではほとんどの家が杓子を製造していた。前者がクリを中心に時にはブナやナラ、サワグルミなどの広葉樹を原料としたのに対し、後者はモミヤヒノキなどの針葉樹をはじめ、サワグルミ、ヤマナラシ、タムシバ、ホオ、ミズキ、タカノツメ、ハリギリなどのシロキ（白木）、ブナ、ナラ、ミズメ、ヤマザクラ、クリなどのカナギ（堅木）といった広葉樹を原料にしていた。

以上、野迫川村の丸箸は高野山、経木塔婆は高野山や五條、天川村洞川の柄杓や大塔村篠原、惣谷の坪杓子は下市、天川村三名郷の平杓子は古くは高野山、索道の開通した大正期以降はほとんどが五條（惣谷でも五條への出荷が多くなる）へと運ばれ、ここから大阪を中心に畿内一円に販売ルートが確立していた。

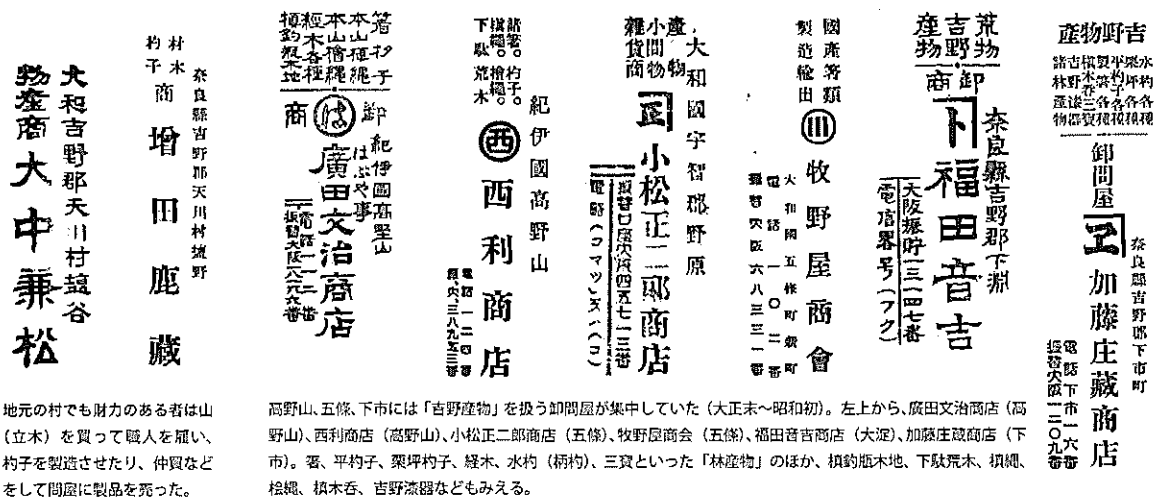
このように、野迫川村や天川村、大塔村の各集落において局所的に林産物の産地化が進展した背景には、吉野山地の豊富な天然林の利用による明治以前からの木工技術の伝統が存在したと同時に、吉野地方のなかでも高野山や下市、五條のような都市への中継地に比較的近かったという地理的な要因が考えられるであろう。さらに明治以降は索道や車道などの大量輸送の手段が発達、高野山や下市、五條の間屋からの外部資本も入ることでおそらく専業化にも拍車がかかったと考えられる。ただし、小屋がけしながらの長期の泊まりこみをとまなう一時的な移動もあるが、村人は定住し、農作業や山仕事にも従事しながら、主に農閑期の仕事としてこれを続けてきたのである。



椋木地のカンナマエ

以上の(E)～(I)に対し、(J) 挽物製造用具は、吉野町、黒滝村、大塔村、西吉野村など、吉野地方各地から収集されている。挽物とは椀や盆のような円形の木製容器のことで、轆轤を回転させてこれを挽く職人を木地屋（轆轤師）というが、彼らは原料となる木を求めて山中を転々と移動したため長らく定住地を持たなかった。

収集資料の多くは大正から昭和にかけて使用されたもので、ほとんどは和歌山県の美里町からの出稼ぎ職人であったり、その子孫や移動先の村の弟子の使用したものである。明治期には十津川村や野迫川村などの山々（吉野西部）で移動を繰り返していた彼らも、大正から昭和にかけて徐々に吉野川流域の口吉野周辺（吉野東部）を中心に活動拠点を移動させている。それと同時に、広葉樹のミズメヤトチといった深山の天然木から、口吉野周



地元の村でも財力のある者は山（立木）を買って職人を雇い、杓子を製造させたり、仲買などをして問屋に製品を売った。

高野山、五條、下市には「吉野産物」を扱う卸問屋が集中していた（大正末～昭和初）。左上から、廣田文治商店（高野山）、西利商店（高野山）、小松正二郎商店（五條）、牧野屋商会（五條）、福田音吉商店（大淀）、加藤庄蔵商店（下市）。番、平杓子、栗坪杓子、榎木、水杓（柄杓）、三寶といった「林産物」のほか、榎杓瓶木地、下駄荒木、榎縄、榎縄、榎木舌、吉野漆器などもみえる。

辺でも豊富に入手できるヒノキ材（間伐材）を原料として用いるようになった¹¹。

3. 課題と展望

これまで見てきたように、「吉野林業と林産加工用具」（仮）とは、「吉野の山村生産・生活用具」より十津川村の全資料を除外し、「生産用具」の中から林業用具と林産加工用具に焦点を絞って選び出されたコレクションである¹²。つまり、あくまで吉野山地の森林資源である木材とそこから生みだされる「吉野産物」（商品生産物）に対象を限定したものであり、その意味では流通—消費側の視点から吉野地域の生産活動をとらえたものであると言うこともできる。

もちろん、育林や林産加工の技術体系を民具を通して表現し、吉野の山林利用の豊かさ、多様性を概観することの意義は大きい。今回のコレクション化にあたっては、民具の素材や製作法、使用法といった技術的側面だけでなく、背景にある村の生活の移り変わり、家や個人の歴史など、聞き取りから得られたデータもできるだけ記録することに努めている。

しかしながら、吉野という広大な地域で暮らす人々の生活、生業の多様なありかたを、局地化された山林からの商品生産だけを選び出して描き出すことには限界がある。林業や林産加工が他の諸生業と取り結ぶ関係は、吉野といえども地域や時代により大きく異なっている。また、地域によっては専門化が進行したとはいえ、村人は生活のための生産活動である自然採取や農作業にも従事しながら仕事を続けてきたのである。商品生産のような量的な尺度でのみコレクション化を続ける限り、生きた民俗の総合性を取り逃してしまうことは明白である。そもそも「吉野の山村生産・生活用具」のコレクション化を念頭においた、当館の平成3年度特別展「吉野の山村と伝承文化—杉を育てた人々の住む村—」（浦西勉・徳田陽子担当）では、林業と林産加工でなく、漆器、自然採集、畑作、祭礼や信仰といった「山村文化」が総合的な視点から構想されていたのである。さらに、吉野というようなあいまいで広大な範囲にわたって今後もコレクション化を進める限り、個別地域における諸生業の関係性を視野に入れた聞き取り調査、民具収集・整理は難しい¹³。

以上のことを踏まえて、平成19年度以降は、今回の「吉野林業と林産加工用具」から、意図的に除外した山村生活の部分、つまり山村の民俗誌＝生活誌を描き出せるような資料を中心にして、コレクション化を推進する必要がある。

今後の方針としては吉野郡の中から、特定のまとまりのある地域（たとえば流域単位など）を選び出し、換金物＝商品生産としての林業・林産加工だけでなく、その地域の多様な「生産・生業」—山村生活のための生産活動、つまり手細工、稲作や畑作などの農耕、狩猟、漁撈、山菜や根茎、堅果類の採集といった山や川からの自然物採集・利用など—の複合性が表現できるような「地域別コレクション」を進めていきたい¹⁴。これは地域、時代によって変化する生業の多様な関係性をこそ分析すべきだと考えるからである^{15・16}。ある特定の生業（今回のコレクシ

オン化はあえて商品生産に特化＝偏向している）だけを、現実生活における諸生業の有機的結びつきから分断するようなコレクション化はなるべく避けたいと考えている。

具体的には、たとえば、今後10～15年でのつぎのようなコレクション（候補）を形成することが考えられるであろう¹⁷。

十津川流域の林業と山村生産・生業用具（十津川村）
 高野山麓の凍豆腐製造用具と山村生産・生業用具（野迫川村）
 北山川流域の山村生産・生業用具（上北山村・下北山村）
 吉野・丹生の和紙生産用具（東吉野村・吉野町・下市町）
 天ノ川・舟ノ川流域の山村生産・生業用具（天川村・大塔村）
 西吉野の漆掻き用具と山村生産・生業用具（西吉野村）
 高見川流域の山村生産・生業用具（東吉野村）
 黒滝川・丹生川流域の山村生産・生業用具（黒滝村・下市町）
 下市の漆器製造用具（下市町）

つまり、「吉野の山村生産・生活用具」とは吉野地域における山村の生産・生業を中心にした「複数の地域別コレクションの総体」であると定義することができる。

このような複数の「地域別コレクション」を5年／10年の中長期的な展望のもと、予備調査も含めて2～3年のサイクルでブロックごとに積み重ねることによって、多様な吉野の山村の実態を描くことができると考えている。

そして、中長期的に複数の「地域別コレクション」を順次積み上げていくことの見解には、つぎのような波及的な効果への期待が含まれていることにも留意せねばならない¹⁸。

(1) 効率的な博物館業務の推進

コレクション化とは、博物館業務の中心である調査・収集、整理、展示・公開、普及・活用を有機的に結びつけ、一連のサイクルとして、より効率的、効果的に遂行するための基本となるべき理念である。そのためにも今後は数年先を視野に入れた、中長期的な博物館業務の具体的な運営プランを計画する必要がある。

たとえば、新規のコレクションを毎年、企画展（年3回）の1つとして速報的に公開したり、複数のコレクションを軸に数年ごとに特別展（年1回）を組み立てることも今後は考えられる。コレクション化は予算としては計上されていないため、むしろ展示と関連した形でのみコレクション化の成果を発表できる（「展示のためのコレクション化」）。

図録、博物館だよりや紀要の発行、映像収録・編集も同じくコレクション化における調査報告、研究成果として位置付けることができるのである。

(2) 民具所在データベースの共有化とネットワークの形成

地域別のコレクション化を順次完成させていくことのメリットの1つは、補足収集を含めた館蔵民具の整理、再編とならんで、同じ地域の民具の所在調査をもあわせて実施できることである¹⁹。

市町村の教育委員会をはじめとして、地域の団体や個人が保有する民具の所在調査を行い、整理、目録化することで、当館の資料目録とあわせれば地域全部の民具の所在目録が完成できる。

民具の現地保存という原則に立てば、コレクション化と同時に、教育委員会など、地域が所蔵する民具の整理、保存に担当の学芸員がかかわり、目録と写真によるデジタルデータを県と各市町村が共有することは広域行政的にも大きな意味がある。また、現実に当館の収蔵スペースが限界にきており、当面は施設の増設も困難な状況を考慮すれば、現場の個別事情に柔軟に対応した現地施設（たとえば廃校舎などの利用）での適切、現実的な整理、保存を推進するのが当館としての公的な役割であろう。

さらに、専門員（学芸員）の常駐する展示施設のようなハコモノの建設を市町村に望めない現状では、将来的にはインターネットでの資料公開も積極的に検討すべきである。データの公開を通じ、民具＝民俗文化財の価値を地域に認識してもらい、収蔵環境の若干の改善も計ることが可能である（市町村合併による民具資料の廃棄という今後起こりうる事態への予防線の意味もある）²⁰。

民具のデータベースが広域的にネットワーク化されることで、当館における民具展示でも市町村からの借用も活性化し（当館以上に良質な資料を有している場合も少なくない）、民具の公的な活用とともに地元における民俗文化財への認識の向上にも寄与できるかもしれない。また、地元との連携によりコレクション化においても効率的な調査が可能となるだろう。展示企画やコレクション化における調査協力を通じて行政や個人だけでなく、教育現場、郷土研究会などとの人的なネットワークも築くことができる²¹。

おわりに

今回の「吉野林業と林産加工用具」のコレクション化にあたっては、あえて意識的に‘生活臭’を抜き、脱色化する方向を選択した²²。逆に今後は、分類された民具をもう一度、もとの生活の場へと戻してみることが重要ではないかと考えている。

つまり、地域の自然・地理環境、歴史的・政治的・経済的な社会状況とそこで暮らす人々とのかかわりをフィールドでの調査を通して理解し、生業相互の有機的な結びつき、時間的変化のなかに民具を位置付けることが必要であると思われる。

以上のためには、安直にステレオタイプなイメージで最初から「吉野」全体を構想すべきではなく、あるまじった文化圏に地域を設定して順次調査を行い、着実に資料の整理・収集を進めていくことが求められる²³。そのことで、地域の実態を反映した分類に基づく特色あるコレクションが今後は順次形成されるものとする。

そして、「奈良盆地」（国中）や「大和高原・宇陀山地」（東山中）をはじめとして生駒、葛城、矢田等々においても同様に、フィールドワークにもとづいた複数の「地域別コレクション」が形成されれば、将来的には民具を通じた奈良県のあらたな民俗地図が描けるものと思われる。

註

- 1 「奈良県立民俗博物館条例」『奈良県立民俗博物館条例規則』（奈良県立民俗博物館）。
- 2 横山浩子「当館のコレクション化事業と染織及びその関連用具の調査・研究」『奈良県立民俗博物館研究紀要』20（奈良県立民俗博物館、2004年）。
- 3 もっとも、これらの収集品のなかからは、昭和58年（1983）3月に1,226点が、「吉野の山村生産用具」として奈良県の有形民俗文化財として指定を受けている。浦西勉「吉野の山村生産用具」の県指定によせて『奈良県立民俗博物館だより』34（奈良県立民俗博物館、1983年）を参照。
- 4 これは当館の主任学芸員（当時）であった浦西勉氏（平成15年度より奈良県文化財保存課）が原案を計画したものである。
- 5 緊急雇用対策費により（財）元興寺文化財研究所へ委託。
- 6 ただし、諸事情により十津川村の民具は今回の「吉野林業と林産加工用具」からは除外されている。
- 7 もちろん、旧所蔵者（寄贈者）への追跡調査ができれば理想的ではある。しかし、収集時より20、30年も経っている資料がほとんどであるため、当時の寄贈者、使用者が存命である確率はきわめて低い。時間的な制約もあり、家族や同業者からの間接的な聞き取り（この場合、情報の批判的な検討は不可欠である）を行わざるを得ない場合も多かった。
- 8 そもそも吉野地方における林業は、①吉野川（紀ノ川の上流）流域、②北上川（熊野川の上流）流域、③十津川（熊野川の上流）流域に区別される。今日、広義には「吉野林業」とは①～③のすべてを含む吉野郡一帯の林業を指すこともある。しかし、元来は狭義に①の吉野川流域における先進的民有林業を指す。後者は吉野川上流域の川上村がその中心であり、これらの地域は従来の天然林の利用から、スギ、ヒノキを植林して育て、伐採した材木を筏に組んで吉野川へ流す育成林業に早くから移行した地域である。
- 9 明治14年の『大和町村誌集』によれば、吉野における樽丸生産量は天川村和田が最大、ついで川上村高原の順であった。

- 10 今回のコレクションからは除外したが、十津川村武蔵からは藁籠製作用具が収集されており、これはケヤキの樹皮を曲げて容器にしたものである。これも「大野ワッパに武蔵ヤロウ」といわれるように、曲げ物製作はこの地域における特産品だったのである。
- 11 森本仙介「本地屋の系譜と漂泊ー近世・近代における吉野の轆轤師と杓子屋ー」『奈良県立民俗博物館研究紀要』21（奈良県立民俗博物館、2005年）。
- 12 実際には県指定文化財「吉野の山村生産用具」の補足収集、再整理によって形成されたコレクションであり、カテゴリーにおいてその範囲を大きく超えるものではない。
- 13 そもそも県立博物館という性格上、地域に密着した活動が難しく、資料も県下全域から、広く、浅く集められる傾向にある。加えて博物館の位置する大和郡山市は、奈良盆地北部に偏った県の中心地域の一角であり、近年は寄贈依頼による収集の多くも県北部に偏りがちであった。
- 14 『民俗文化財の手引き』（文化庁内民俗文化財研究会、1979年）によれば、生産・生業には「自然物採集、農耕、山樵、採鉱・冶金、漁撈、製塩、狩猟、養蚕、畜産、染・織、手細工、諸職」があげられている。
- 15 複合生業論については、安室知「存在感なき生業研究のこれからー方法としての複合生業論ー」『日本民俗学』190（日本民俗学会、1992年）等を参照。なお、無形の芸能、信仰、社会組織等を無視するものではないが、当面は「生産・生業」を中心に地域の資料群を調査・収集し、館蔵資料を補強、体系化するものである。
- 16 現在、吉野郡川上村ではガムの地滑りによる白屋地区の集落の移転に関連して民具の収集と整理が村の教育委員会により（財）元興寺文化財研究所への委託として進められている。
- 17 博物館における資料群のコレクション形成にかかわる先駆的な実践の報告として、加藤幸治「地域博物館における既存資料の再編成と新規資料群の形成」『民具研究』132（日本民具学会、2005年）、同「紀伊風土記の丘 民俗資料の再整理方針」『平成16年度 紀伊風土記の丘年報』32（和歌山県立紀伊風土記の丘、2006年）を参照。吉野地域のコレクション化もこのような先駆的な試みに学びながら進めていきたい。
- 18 コレクション化を実際に進める際のプロセスから生まれる以下のような実践的な効果こそが今後の当館にとっては重要であるとさえ思える。
- 19 平成15年度7月より、吉野地域のコレクション化を担当することになった際、筆者が最初に行ったことは吉野地域の市町村（教育委員会）における民具保存の現状調査であった。天川村、黒滝村、東吉野村、十津川村など、吉野地域の資料館には1980年代以降、浦西勉氏が展示にかかわったものが多い。これらの展示民具も含め、所蔵民具の再整理とデータベース化が今後は必要であろう。平成19年度からは、中上哲也氏の協力を得て十津川村教育委員会が所蔵する民具資料のデータベース化を推進する予定である。
- 20 松田憲州「廃校舎を利用した歴史民俗資料館ーブッシュコーンによるデジタルアーカイブー」『民具マンスリー』38-5（神奈川大学日本常民文化研究所、2005年）参照。インターネット上での公開だけでなく、双方向的な知識の共有化による情報収集の可能性については、当紀要（本書）に掲載の中上哲也「博物館とデータベース」を参照。文字や音声、写真、映像等をデジタルデータとして一元化して記録、統合することで、調査記録と資料カードの情報（調査情報と民具情報）がつながりを保ったままでの保存、管理、利用が可能となる。これは調査・収集、整理、展示・公開、普及・活用等の一連のサイクルを効率的に遂行するためのコレクション化の理念にも対応している。今回のコレクション化は、中上氏によるリレイショナルデータベースの構築作業と並行して進められてきた経緯があり、中上氏による基礎作業、協力なしでは進展しなかったであろう。大宮守人・中上哲也「奈良県立民俗博物館のデータベースの構築について」『奈良県立民俗博物館研究紀要』21（奈良県立民俗博物館、2005年）も上記とあわせて参照されたい。
- 21 なお、このようなコレクション化の方法以外にも、吉野と熊野という紀伊半島をともにフィールドとしていることもあり、和歌山県立紀伊風土記の丘学芸員の加藤幸治氏からは、多大な助言、情報をいただきました。この場をかりて御礼申し上げます。
- 22 あらかじめ設定された主題と期限内で吉野地域全体の民具を扱うに際し、この選択に一定の意義のあったことは確かである。
- 23 吉野は戦前の宮本常一をはじめ、岸田日出男、岸田定雄、林宏、保仙純剛など地元の研究者による民俗誌や研究業績の比較的豊富な地域である。コレクション化では、これらの先行研究や市町村史、調査報告書なども参考にしながら調査を進めていきたい。

博物館とデータベース

中上 哲也

公共のアーカイブ

調査、研究などのデータは博物館にとって重要な資産であり、これを民具などの一次資料とあわせて次代に引き継いでいくことは館にとっての使命といえる。しかし、実際には調査・研究データの管理は個々の学芸員に任されていた面も多く、該当の研究者が館を離れるとともにそのデータを利用することが難しくなることもよくあることかと思われる。

研究者本人以外にとってデータの利用が難しくなる要因として、

- ① 研究者が館を離れる時にデータも持っていってしまう。
- ② アナログの資料すべてに索引をつけることは難しいため、欲しいデータにつきあたるまで一から資料を探し回る羽目になる。
- ③ 映像・音声・文字などデータの種類によって個別に管理していたため、自らがかわっていない過去の調査に関連して集められたデータを再構築しようとしても、どこにどんなデータがあるのか見当がつかない。

これらは、アナログ時代では解決の難しい問題であったが現在では、パソコン上で作業し、そこに全てのデータを保存していくという形をとれば技術的にはほぼ解決する問題となった。①～③の問題点を順にみると、

- ① アナログでは複製をつくることに大変な手間がかかるため、データを自分用と館用の二つ用意できないことが根本にあったが、デジタルデータは簡単に複製することができるので、データの所有権が館か研究者かどちらに帰属するかという問題を除けば解決する。
- ② デスクトップ検索ツールが簡単に利用できるようになり、Word、Excelなどのテキストデータは全文検索が可能になったため、管理しなくても簡単に目的の物を探すことができるようになった。
- ③ ほとんどのメディアはパソコンで管理することができ、適切なメタデータをつければ、容易に検索することが可能である。

このように、データを公共のものとして管理していくことが、パソコンで作業し保存するというあたりまえのことだけで実現する。さらに、パソコンをネットワークにつなげば、これらのデータの共有も簡単にできるようになった。博物館のデータを公共のものとなすならば、ネットワーク上の誰もが利用できることが望ましいといえる。集合知や共有知といった概念と博物館の在り方との親和性の高さをかんがみると、現在の情報化社会の流れに身をまかせることが自然な選択であろう。

リレーショナルデータベースの意義

パソコン上でのデータの検索・共有は標準的な機能となってきており、iTunesのように特にデータベースと意識しなくとも簡単に利用できるようになった。デスクトップ検索、バーチャルフォルダ、メタデータ、XML、インデックスの共有、画像・音声の認識技術などを利用すればほとんどのアーカイブの管理が半自動的に行われる。しかし、さすがに資料を一点一点、厳密に管理するためのデータベースは、リレーショナルデータベースを用いなければ作成できないだろう。つまり、前段で述べていたアナログでは管理が難しく無秩序に陥りやすかったデータは、とりあえず検索で探し出せるようになればそれでほぼ目的が達せられるが、もともと台帳などできっちり管理していたデータは、デジタルになっても、意識的に管理する必要性に変わりはないということである。

では、アナログ時でも他の雑多なデータと違い、台帳としてきっちり管理されていたものをデータベース化する意義とはなんだろうか。単純な理由としては、作業の手間が大きく減ることにある。ある人から100点の民具を寄贈されたとして、これを資料カードにするときには、同じ住所と氏名、調査者、話者などを100回書かな

ければならなかった。また、当館では受け入れ順の台帳と、これを分類ごとにまとめた台帳の2部つくるのが規定されていたため、先ほどの例でいうと100点寄贈されると200回同じことを書く必要があることを意味した。リレーショナルデータベース化すると、こうした重複データは1度、入力するだけで良く、また、そのデータを参照することで、データの整合性が保たれる。例えば、住所・氏名は住所録テーブルに一度入力すれば、資料台帳でもそのデータを参照するので別に入力する必要はなく、分類ごとの台帳、寄贈者ごとの台帳といったものも新たにデータを入力し直さなくともソートなどをするだけで簡単に作ることができる。このような作業の省力化が、データの利用率の向上につながればさいわいである。

ところで、データを参照して表示するためには、互いのテーブルを正確に関連づけなければならない。このためには、データベースの構造を定め、関連させるキーとなるデータを正確に作成されなければならない、面倒な点も多い。しかしデータ間のつながりは作成者以外にとっては不鮮明なものであるため、これを明示して保存することは義務であろう。ただ、最初にも述べたようにこの点に関する当館のこれまでの状況は決してかんばしいものとはいえなかった。

例えば、調査時の記録と資料カードとは密接な関係にあるはずだが、資料カードにはその民具に関することしか書かれておらず、調査全体のデータとのつながりが失われていることが多かった。また、民具の研究・展示を行っても資料カードにはその情報が反映されることは少ない。結局、それぞれの成果はばらばらでその関連性は担当者以外には分かりづらいものとなった。このように、館の価値を決める大きな要素である収蔵資料でさえ、十分な情報面の保存がなされていないかった。

こうしたつながりを保存するための構造物としてリレーショナルデータベースは有用である。よくできたデータベースは、実際の業務を投影したものであるとされている。これまでの紙の資料台帳は、実際の業務のうち、主に登録業務に特化したデータベースであった。しかし、資料台帳に書き込むまでには、調査、収集があり、さらに登録後には研究、展示へと学芸員の仕事は続いている。こうした一連の業務をデータベース上に再現し、データを適切に位置付けることでつながりの保たれた情報の保存が可能となる。

データベースの活用

作成したデータベースは公共物としてできるだけ活用されなければならない。インターネット上での公開はそのための義務といえる。ところで、現在、インターネットの情報量が爆発的に増えているのは、ブログなどで個人が簡単に情報を発信できるようになったことが大きい。当館においてもデータベースを公開するだけでなく、それを元に一般の人からも情報を収集したいと考えている。

その方法として、①基本的な目標である資料台帳の情報の充実のために、民具を寄贈した人、またはその関係者には、該当分のデータベースの情報を全て公開し、足りないところはどんどん情報を提供してもらおう。②もう少し幅広い対象として、老人に回想法の一環として活用してもらい、その思い出を書き込んでもらう。などがあるが、対象とする人の年齢が大抵は60才以上であることから、パソコンを使用してこれを行うことは実際には難しいだろう。そのため、情報提供者とは別に、書き込む人が必要となる。この場合、小、中学生も一つの候補である。当館の場合の問題点でもあったが、日々の研究（学校では授業・課題）の成果を集積し、それを活用できるようにする仕組みが足りなかった。たとえ小学生のものでも、こうした成果を集積する場を持つことは有用なことであろう。

データベースの活用法としても一つ、来館者に対する情報提供がある。ICタグと組み合わせれば、収蔵展示においても簡単に1点1点の民具に解説をつけることができる。現在の展示解説の残念なところに文字数などの都合で提供できる情報量がごく限られている点がある。こうした制限から民具の一般的な解説のみで、資料台帳に書かれたその民具に固有の情報が提示されていないことも多い。できるだけ、民具とともに、その時に撮った調査地の風景や、寄贈者のことばも一緒に提示することは、その民具にどんな思い入れもない年代の人が理解するために必要なことである。知識を他者と共有し、ともに作業するための場として、データベースとネットワークを活用することは博物館において今後も重要な研究課題である。

FileMaker を使用した登録作業

調査から登録までの流れ

①氏名・住所の登録

「住所録」を開いて、調査対象の氏名・住所などを入力する。

②調査日・調査者の登録

ポータル（調査ノート）に調査年月日、調査者、話者を入れる。

住所録

① 氏名・住所の登録

名前 花谷 清美 生年 1923 没年
 都道府県 市町村 字 番地
 住所 奈良県 吉野郡 天川村 広瀬
 調査年 2004 調査年度 H16
 調査時の年齢 81
 現在の年齢 83

② 調査日・調査者の登録

話者	生年	市町村	字	調査年月日	調査者	内容
花谷 清美	1923	天川村	広瀬	2004.07.01	森本 仙介	
花谷 清美	1923	天川村	広瀬	2005.09.28	森本 仙介	

③調査の詳細を入力

定義した調査の詳細を入力するために「調査ノート」レイアウトに移動し、調査内容を入力する。(Word などのワープロで報告書を作成済みであればテキストをここに貼りつける)

他に写真などのマルチメディアファイルがあれば、「写真帳」を呼び出してインポートする。

調査ノート

③ 調査の詳細を入力

氏名 花谷 清美
 市町村 天川村
 調査年月日 2005.09.28
 調査者 森本 仙介
 話者 花谷 清美
 話者市町村 天川村

内容
 広瀬は隣の垣野とは違い、シャクシよりタルマルをやっている家の方が多かった。花谷氏は、シャクシ、タルマルのクレと両方したという。タルマルは、昭和15、6年(戦前の3、4年)から40年代(戦後20年近く)までしていた。師匠は広瀬の吉村清馬氏(吉村勇氏の父)で、戦前は2、3年弟子入りしたものである。立星の熊神さん(野追川村)や藤原(大塔村)、クロコダニ(大塔村)、佐吉の向い(川上村)などへ出張ぎに行った。職人は、蒲団をヨコマキにしてオゾンで良い、その上に道具を入れたヤナギゴリを集めて出かけた。山小屋などはオヤカタが用意してくれた。クレシ、マルマキの他、クレセ干す人(在地の村人を雇う)、マルマキ用の竹(オオダケ)を割る人なども専門の人がやった。また、庵住に岡下園治というクレの名人(祖父である)がいて、福井県などへもこのあたりの職人を連れて行った。
 シャクシは 昭和23、4年から30年代 仕屋の会間に家の中であった。我々の家へは 戦後 広瀬村17、8軒の家が来り、そのうち14、5軒で

写真の取込

イメージ

*ポータル

Access というサブデータシート。関連テーブルのデータを複数行表示させることができる。

④受入民具の登録

「住所録」に戻り、受入年月日を定義したあと、ポータル（資料カード）に、収集した民具名を入力していく。

住所録

検索に際す

名前	花谷 清美	生年	1923	歳年	
住所	奈良県 西野郡 天川村 広瀬	調査年	2004	調査年度	H16
調査時の年齢	81	現在の年齢	83		

備考
 広瀬は隣の畑野とは違い、シャクシよりタルマルをやってる家の方が多かった。先祖氏は、シャクシ、タルマルのクレスシと別方したという。
 クルマルは、昭和15、6年（戦前の3、4年）から40年代（戦後20年近く）までしていた。師匠は広瀬の広村清美氏（吉村勇氏の父）で、最初は2、3年勤学入りしたものである。立里の寛勝さん（野田川村）や藤原（大畑村）、クロコヅニ（大畑村）、佐志の樹（山上村）などへ出張ぎに行った。職人は、集団をヨコ立にしてオノノで良い。その上に道具を入れたヤナギゴオリを巻せて出かけた。由小根などはオノノカクが用器してくれた。クレスシ、マルマキの他、クレスシを干す人（在地の村人を雇う）、マルマキを削る（オオクツ）を削る人なども専門の人があった。また、庵住に岡下園治といラクシの名人（養父である）がいて、蒲生原などへもてつあつたりの職人を連れて行った。
 シャクシは、昭和23、4年から30年代、仕事の合間に家の中でできるでした。授業であった。戦後、広瀬には1丁、8軒の家があり、そのうち14、5軒でシャクシをしていた。ほとんどが家にヒノキ材を持って帰り、冬に雪などが積もって外の仕事のない時になまにした程度で、専門にシャクシをしていたのは、5軒だけだった。製品は畑野、五條、羽川へトラックで運んだ。羽川へは流石に運送持ったり、作習して行った。

品名	分類	資料名	点数	受入年月日	2005.09.28
K 17895	マエアテ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17896	チンチョ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17897	トチカン		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17898	ビンガネ(オオクツ)		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17899	オオクツ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17899	コウリツ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17891	ヘギ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17892	ソセ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17893	ウチゼン		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17894	カガミ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17895	カンテラ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>
K 17896	ヤナギゴオリ		1	2005.09.28	<input type="button" value="▶"/>

話者	生年	市町村	字	調査年月日	調査者	内容
▶ 花谷 清美	1923	天川村	広瀬	2004.07.01	森本 仙介	
▶ 花谷 清美	1923	天川村	広瀬	2005.09.28	森本 仙介	広瀬は隣の畑野とは違い、シャ

複数ある調査内容を一つにまとめたものを入力することを想定したフィールド（一回しか調査に行っていない場合は、調査ノートの内容と同じ）。

③で取り込んだマルチメディアファイルのサムネイルリスト

⑤資料カードへのデータ入力

ここまでの作業で、調査・収集・受入までのデータ入力完了したとみなし、次に資料カードへの記述に移る。ポータル（資料カード）の右端の[▶]ボタンを押して「資料カード」に移動する。

資料カードは、民具名、寄贈者氏名、住所、調査日時など、ここまで入力したデータがすでに入った状態になっている。このように、あるカードで入力したデータを関連したテーブルでも参照表示することで、データの入力量を減らすことができる。

資料カード

資料番号: K-17894 | 調査年: 2005.09.28 | 寄贈者氏名: 森本 仙介

資料名: カガミ

住所: 奈良県 西野郡 天川村 広瀬

生年: 1923

調査年月日: 2004.07.01

調査者: 森本 仙介

内容: 広瀬は隣の畑野とは違い、シャクシよりタルマルをやってる家の方が多かった。先祖氏は、シャクシ、タルマルのクレスシと別方したという。クルマルは、昭和15、6年（戦前の3、4年）から40年代（戦後20年近く）までしていた。師匠は広瀬の広村清美氏（吉村勇氏の父）で、最初は2、3年勤学入りしたものである。立里の寛勝さん（野田川村）や藤原（大畑村）、クロコヅニ（大畑村）、佐志の樹（山上村）などへ出張ぎに行った。職人は、集団をヨコ立にしてオノノで良い。その上に道具を入れたヤナギゴオリを巻せて出かけた。由小根などはオノノカクが用器してくれた。クレスシ、マルマキの他、クレスシを干す人（在地の村人を雇う）、マルマキを削る（オオクツ）を削る人なども専門の人があった。また、庵住に岡下園治といラクシの名人（養父である）がいて、蒲生原などへもてつあつたりの職人を連れて行った。シャクシは、昭和23、4年から30年代、仕事の合間に家の中でできるでした。授業であった。戦後、広瀬には1丁、8軒の家があり、そのうち14、5軒でシャクシをしていた。ほとんどが家にヒノキ材を持って帰り、冬に雪などが積もって外の仕事のない時になまにした程度で、専門にシャクシをしていたのは、5軒だけだった。製品は畑野、五條、羽川へトラックで運んだ。羽川へは流石に運送持ったり、作習して行った。

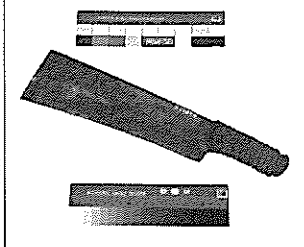
資料カードからも関連した調査ノートの内容を参照することができる。

⑤完成した資料カードの例

大きく分けて、登録番号や寸法などの民具固有のデータ、所有者の職業などの調査対象に共通するデータ、カードの資料と同じ民具に共通するデータの3種類の情報が下のカードに表示されている。これらの情報を統合して見ることでその民具の全体像を把握しやすくなるだろう。

紙の原簿では、同じ民具でもデータを共有することは不可能であり、例えばカードにその民具の参考文献を書き込んでも、同じ民具の別のカードでは参照できなかった。しかし、データベースでは他のカードとデータの共有ができるので、一枚のカードに入力したことがそれと共通する部分をもつ全てのカードにも反映される。

資料カード

<p>登録番号 K-17B94 寄附者氏名 寄附について 寄附 受入年月日 2004.07.01</p> <p>場所 一般名(任意) 資料名 カガミワリ 持丸製造用具</p> <p>分類番号 KB9 分類表から入力</p> <p>大分類 中分類 小分類</p> <p>手工・製造 細工・製造用具 木細工</p> <p>製造地 奈良県 大和郡 天川村 広野</p> <p>名前 職名 生年 年代</p> <p>製作 藤田(号「菊治」) 匠治郎 1923 天川村中戸(小字)</p> <p>使用 花谷 清美 1923</p> <p>所有 花谷 清美 1923 入手経路 購入</p> <p>備考</p> <p>項目 1.基本 タグ 内容</p> <p>使用目的 クルマルのフタ(蓋)を閉める包丁であるが、これでソコも閉ったという。</p> <p>使用方法 利合側に持ったツツで、一方の手に持ったフタワリボウチョコの背を叩く。</p> <p>形態 厚さはソコワリボウチョコ(片刃)やオウワリボウチョコ(両刃)より薄い。柄には高嶺を感している。</p> <p>銘 刃に「吉 改」の刻印あり。</p>	<p>写真番号 9917894</p> <p>計測場所 単位(cm)(g)</p> <p>長さ 358.0</p> <p>高さ 26.0</p> <p>幅 86.0</p>  <p>調査 広野は隣の鳥野とは違い、シヤクシより少しずんずんやういふ方が多かった。匠治郎は、シヤクシ、クルマルの柄と周知したという。</p> <p>(寄附者) クルマルは、昭和15、6年(明治の3、4年)から40年(昭和20年)頃まで使っていた。母は広野の吉村源兵衛(吉村源兵衛の父)で、昭和2、3年御子入りしたものである。吉原の屋敷吉(吉原山田村吉原(大塚1)、クロコジニ(大塚村)、佐吉の角(山田村)などへ出張に行った。母は、調子こぼしてオウワリで、その上に道具を入れたオウワリを背で出かけた。山小屋などはオウワリで閉めた。クルマル、オウワリ、の柄、クルマルを主人(匠の村人を調子)、クルマルの柄(オウワリ)を閉める人なども調子の人であった。また、後述に同じ調子でクルマルの五人(四人)で、匠治郎など、このあたりで職人を閉めた。</p> <p>シヤクシは、昭和23、4年から30年代、佐原の倉敷に閉めて使っていた。昭和27、28年、佐原には17、8年、佐原が、そのうち14、5年でシヤクシをして、何となく閉めにオウワリを持って、多に閉めたりして、佐原の佐原の閉めたりした。佐原で、閉めにシヤクシをして、多に閉めたりして、佐原の佐原の閉めたりした。佐原で、閉めにシヤクシをして、多に閉めたりして、佐原の佐原の閉めたりした。</p> <p>この辺りはシヤクシ、クルマルで山から水を出すことが多い。花谷もクルマルで山から水を出すことが多い。</p> <p>経路</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>経路</th> <th>生年</th> <th>職業</th> <th>譲渡年月日</th> <th>譲渡内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>花谷 清美</td> <td>1923</td> <td>自営 船介</td> <td>2004.07.01</td> <td>寄附</td> </tr> <tr> <td>花谷 清美</td> <td>1923</td> <td>自営 船介</td> <td>2005.09.28</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	経路	生年	職業	譲渡年月日	譲渡内容	花谷 清美	1923	自営 船介	2004.07.01	寄附	花谷 清美	1923	自営 船介	2005.09.28		<p>作成日 2006.1.15</p> <p>登録番号</p> <p>5734 99</p>
経路	生年	職業	譲渡年月日	譲渡内容													
花谷 清美	1923	自営 船介	2004.07.01	寄附													
花谷 清美	1923	自営 船介	2005.09.28														

同一の資料名のものに共通するデータ

共通名 フタワリボウチョコ

備考

フタワリボウチョコ	蓋閉包丁
フタワリ	
カガミワリ	

説明 フタ(蓋)を閉めるのに使用した。利合側に持ったツツで、一方の手に持ったフタワリボウチョコの背を叩く。厚さはソコワリボウチョコ(片刃)やオウワリボウチョコ(両刃)より薄い。

同一の資料名の一覧から分類と共通名を設定する

KB9	手工・製造	細工・製造用具	木細工	フタワリボウチョコ	蓋閉包丁
KB9	手工・製造	細工・製造用具	木細工	クルマル製造用具	持丸製造用具

◇備考の仕様について

- 備考の各項目(使用目的・使用方法・材質など)は、それぞれフィールドとして作成せず、備考テーブルに項目名とその内容を入力するという形にした。
- 項目名は基本的には値一覧によって表示される値から選択する(右の図は値一覧を表示し「銘」を選択した状態)が、任意の値を入力することもできる。
- 表示される値一覧は、初期設定では右図の1~11の項目名のセットである「基本」になっている。ここで「文書」を選ぶと、表示される値一覧が「表題・編著者・出版年…」に変更される。

◇備考テーブルの理由

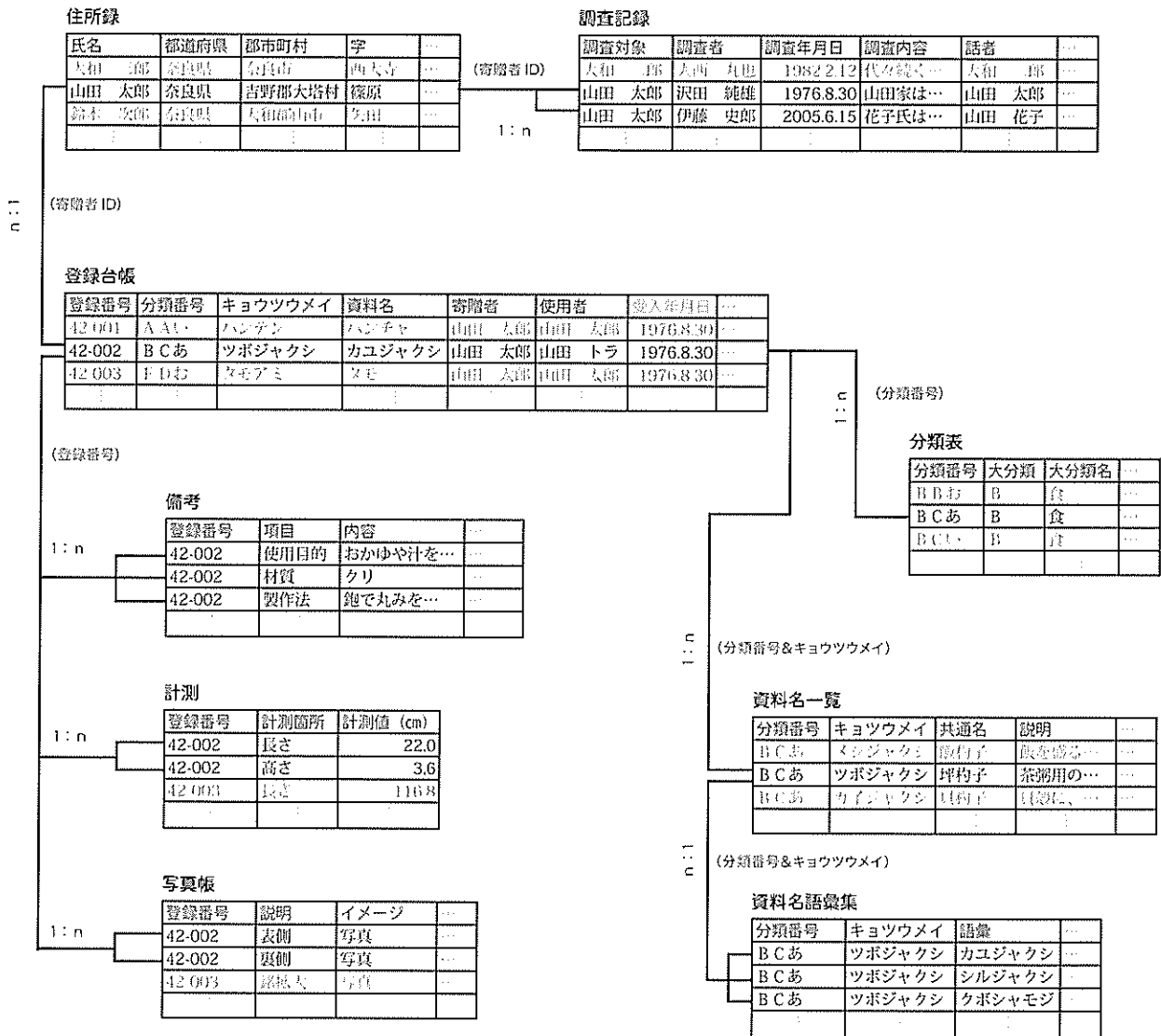
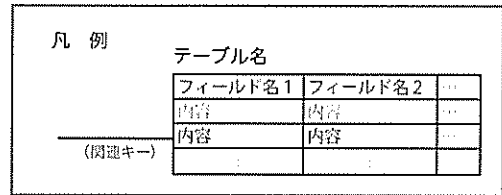
- 原簿に登録された資料の中には、鍬などの民具とともに古文書も含まれている。原簿に最初から設けられていた項目は基本セットの値一覧とほぼ同一であるが、この中には文書の場合に入力すべき編著者といった項目は含まれていないため、備考フィールドに文書独特の内容をまとめて入力していた。
- 元来、文書と鍬というかなり属性の異なる資料を一つの原簿に登録することが混乱の元であるが、とりえず文書のような資料も扱えるデータベースとするために、文書独特の入力項目を作成することとした。
- この文書用に作成する項目を数えてみると11個となった。つまり、これだけの数のフィールドを新規に作成する必要があることになる。

銘	刃に「吉 改」
形態 1	
形態 2	
使用目的 3	
使用方法 4	
材質 5	
製法 6	
産地 7	
状態 8	ものに共通するデータ
来歴 9	ボウチョコ
図柄 10	
備考 11	ボウチョコ 蓋閉包丁

- ・文書以外にも、民具を染織、信仰といった分野ごとに整理していくなかで、研究者がその時々で必要とする項目がでてくるであろうが、そのたびごとに新規フィールドを作成していけば收拾がつかなくなるおそれがある。
- ・データを項目ごとに分けて保存する理由は、文章を意図ごとに分ける作業はPCでは難しいこと、細かく分けられていた方がテキスト計算などのデータ処理時に便利なことなどである。
- ・フィールドを新規作成せずに、データを分割する項目を追加できるように、別のテーブルに項目名とその内容を分けて保存することとし、さらに項目名が一定になるように値一覧のセットから入力値を選択することとした。

資料カードに表示される主なテーブル

複数のテーブルから構成されるデータ（下の表では濃い字のデータ）が一枚の資料カードとして表示される。



◇ 1 : n

- ・ テーブル「登録台帳」の1レコードに対して「計測」は複数レコードが関連するとき、1 : nである（上の表では登録台帳の1行に関連する計測は2行）。
- ・ データベースを作成するとき、1 : nまたはn : nという関係になる要素は、テーブルを別につくる必要があると判断できる。

◇ 「計測」を別のテーブルに分ける理由

- ・ 「登録台帳」に「計測値」というフィールドをつくり、そのなかに「長さ= 358センチ・高さ= 52センチ…」というふうに文章として入力すると、検索はできて、数字としてソートや計算を行うことができない。
- ・ 「登録台帳」に「長さ」「高さ」「はば」というフィールドをつくり、そこに「358」「52」と入力する形では、検索・ソート・計算を行うことはできる。しかし、この方法だと、計測箇所がこの3箇所限定されてしまう。例えば、鋸では歯道も計測するといったように民具によって計測すべき箇所は様々であるし、椀のように身と蓋に分かれる場合も3箇所以上必要であるが、そのたびに新規フィールドをつくるのは現実的ではない。

◇ 資料名一覧・語彙集について

- ・ この二つのテーブルは、資料名称の整理が目的である。
- ・ 資料名一覧は、民具の標準的な資料名の一覧であり、民具を同形態のものごとに分類するための分類表でもある。
- ・ 語彙集は、資料名一覧で分類された資料に、どのような資料名の方言があるかのリストとなる。
- ・ 原簿に資料を登録する手順、
 - ①聞き取った資料名とともに同形態の資料ごとに分類するためのキーとして共通名を入力する。
 - ②共通名を入力すると、その民具に含まれる民具名の語彙一覧が表示されるので、そこに聞き取った資料名が含まれない場合は追加する。
 - ③資料を調査した内容のうち、その資料一般に通用するもの（参考文献や辞書的な解説）は、資料名一覧テーブルの資料説明に入力する。
- ・ 具体的な利用方法としては、登録台帳で「粥杓子」という資料を検索するとき、そのまま台帳の資料名フィールドで検索すると資料名が「粥杓子」という資料しかひっかからないが、語彙一覧で「粥杓子」を検索するとツボジャクシと定義された資料の一覧が表示される。つまり資料の方言しか分からなくとも該当する資料の一覧を検索できることになる。
- ・ 他には、その資料の参考文献などを書き込んでおくことで、調べたことを他の人と共有することが簡単となる。

「吉野林業と林産加工用具」(仮) 台帳について

* 「吉野林業と林産加工用具」(仮) については、当紀要に掲載の森本仙介「吉野地域の民具資料におけるコレクション化の意義」を参照のこと。

メイン画面は、作業者が効率的にデータを入力できるようにすることを目的として作った。そのため、関連するデータをできるだけ多く表示するようにしている。(吉野林業と林産加工用具の民具台帳テーブルを主として、工程テーブル・図面テーブルなど14個のテーブルから関連するデータを表示している。)

吉野林業と林産加工用具 メイン画面

ファミリー一覧
表
検索

修正日 2006.6.29
分類表
工程表
住所図
原簿
図面表
図面表
図面表
図面表
図面表
図面表
図面表
図面表

図面表
十津川川原集
字
地図

◎ 1-済 ○ 2-仮 ○ 3-未 ○ 4-限 ○ 5-禁 ○ 6-限 ○ 7-新 状態
◎ 完 ○ 欠
帳簿 9917891
レコードID 7153

分類 2A. a 5	林産加工	樽丸	小割	
資料名: ハギ	ヘギボウチョウ	ヘギボウチョウ	割包丁	原簿名: ハギ
ラベル用番号(原簿): ハギ	形態分類: 包丁	採集年月日: 2004.07.01	点数: 1	
性別: 男	住所・場所: 天川村	生年: 1923	年代: 昭和	職業: 樽丸・林業
所有: 花谷 漢美	性別: 男	住所・場所: 天川村	生年: 1923	年代: 昭和
使用: 製作 漢美 元治(母名: 貞治文)	性別: 男	住所・場所: 天川村	生年: 1923	年代: 昭和

製作方法 刃に「一」の刻印。「天川村元治」の切刻印あり。柄に希。蓋縁を控く。漢美元治氏(1899~1993)は2代目の蔵治氏。父の文蔵氏は吉野町職員の出身で、明治20年前後、下市町蔵治の蔵治屋である加島氏に弟子入りした。加島氏は刃物を得意とし、その製法は「フジヤガマ」(フジヤゼン)と呼ばれた。

使用方法 ハギをコクリツチで打ち入れ、ミカンワリした材をクレの厚さに削る。先ず外周のコウ(蓋や底板、割箸、桶などの材料になる)を外し、ニマイコ(コウツキを入れてクレ2枚分)にする。さらにこれをニマイコにする。また、アカ(アカス)でニマイコ(或いは田マイコ)をとり、さらに(田マイコをニマイコ)ニマイコをニマイコにする。

来歴 祖父である天川村蔵治の同下図法より習得されたもの。

備考 広瀬は隣の塩野とは違い、シャクシよりクルマルをやっている家の方が多かった。花谷氏は、シャクシ、クルマルのクレと両方したという。クルマルは昭和15、6年(戦前の3、4年)から40年代(戦後20年近く)までしていた。師匠は広瀬の吉村清馬氏(吉村清氏の父)で、戦前は2、3年弟子入りしたものである。立皇の荒神さん(野道川村)や藤原(大塚村)、クロコダニ(大塚村)、佐古の向い(川上村)などへ出張に行った。蔵住に同下図法というクレの名人(蔵父である)がいて、福井県などへこのあたりの職人を連れて行った。

住所図 広瀬は隣の塩野とは違い、シャクシよりクルマルをやっている家の方が多かった。花谷氏は、シャクシ、クルマルのクレと両方したという。クルマルは昭和15、6年(戦前の3、4年)から40年代(戦後20年近く)までしていた。師匠は広瀬の吉村清馬氏(吉村清氏の父)で、戦前は2、3年弟子入りしたものである。立皇の荒神さん(野道川村)や藤原(大塚村)、クロコダニ(大塚村)、佐古の向い(川上村)などへ出張に行った。蔵住に同下図法というクレの名人(蔵父である)がいて、福井県などへこのあたりの職人を連れて行った。

原簿備考

姓名	性別	住所	生年	調査年月日	調査員
花谷 漢美	男	天川村 蔵治	1923	2004.07.01	森本仙介

寸法

寸法	mm	尺
長さ	366.5	1.2
高さ	30.5	0.1
幅	04.5	0.3
柄-長さ	264.5	0.9
柄-高さ	38.0	0.1
柄-幅	32.5	0.1

重さ(g) 951.1 **図指定**

実測年月日 2004.10.22 **実測者** 五嶋由美子

図面 9917891

工程説明

ミカンワリした材をクレの厚さ(1.5分)に削る作業である。

①ニマイコ(コウツキを入れてクレ2枚分)にする。

②コウをはずし、ニマイコにする。

③ニマイコをニマイコ(クレ1枚分)にする。この時、田マイコ(田マイコ)をニマイコにする。

共通名 ハギボウチョウ

図鑑

- ヘギボウチョウ
- クレワリボウチョウ
- ハギ
- ヒキボウチョウ
- ワリボウチョウ
- ハニ

活字並進説明

ハギをコクリツチで打ち入れ、ミカンワリした材をクレの厚さに削る。先ず外周のコウ(蓋や底板、割箸、桶などの材料になる)を外し、ニマイコ(コウツキを入れてクレ2枚分)にする。さらにこれを削ってニマイコにする。また、アカ(アカス)でニマイコ(或いは田マイコ)をとり、さらに(田マイコをニマイコ)ニマイコをニマイコにする。

写真

写真が撮られた経緯

林業十津川川原集

参考文献

- 『土佐打刀物誌本』(高知県土佐刀物産協会同組合、1984年)
- 北村又左衛門『吉野林産製法』改訂版(非売品、1954年)
- 『天川村民俗資料緊急調査報告書』(奈良県教育委員会、1975年) [平山敏治郎・福田泰治郎報告]
- 『特別調査記録 山村のくらし』(京都府立山城郷土資料館、1988年)
- 浦西勉『黒滝村赤滝の民俗』(奈良県立民俗博物館より)63 (奈良県立民俗博物館、1993年)
- 日浦彌文『黒滝民俗考』『広報くろたぎ』(黒滝村役場、1997年)

メイン画面上の「分類表」「工程表」などのボタンを押すとそれぞれの関連テーブルのレイアウトに移動する。

分類表

- 1A 苗作
- 1B 橋林・伐採
- 1C 製材
- 1D 搬出・運搬
- 1E その他
- 1F 文章
- 1G 模型
- ◎ 2A 樽丸
- 2B 桶
- 2C 三方
- 2D 割箸
- 2E 丸箸
- 2F 榎木
- 2G 蓋縁
- 2H 橋杓
- 2I 平杓子
- 2J 坪杓子
- 2K 扱物
- 2L 漆桶

- 1 間切
- 2 寄せ
- 3 橋段
- 4 大割
- 5 小割
- 6 削り
- 7 駄打
- 8 柳干
- 9 コウ出
- 10 丸巻
- 11 蓋割
- 12 成割
- 13 その他

解説

吉野地方における樽丸生産の発祥地である黒滝村や川上村、天川村を中心に収集。樽丸とは、酒造りで樽(酒樽)の材を選別のために来たものである。この樽丸の材料となるのが、樽(クレ)と呼ばれるスギ材のれをせる丸(マルシ)と呼んだ。江戸時代、瀬や伊丹方面の酒造業の隆盛にもない、樽丸の需要は吉野ではその原材料として、産が無く置くと、年輪の細かく炭化に達したスギの大径木を生産する技術の生産過程で生まれる小・中径木も有効的に利用するという集約的な(採真性の高い)林業が発達したので;

参考文献

- 『土佐打刀物誌本』(高知県土佐刀物産協会同組合、1984年)
- 北村又左衛門『吉野林産製法』改訂版(非売品、1954年)
- 『天川村民俗資料緊急調査報告書』(奈良県教育委員会、1975年) [平山敏治郎・福田泰治郎報告]
- 『特別調査記録 山村のくらし』(京都府立山城郷土資料館、1988年)
- 浦西勉『黒滝村赤滝の民俗』(奈良県立民俗博物館より)63 (奈良県立民俗博物館、1993年)
- 日浦彌文『黒滝民俗考』『広報くろたぎ』(黒滝村役場、1997年)

分類表画面右側の「解説」と「参考文献」は、樽丸・桶・三宝といった大きな分類ごとのものである。ある分野を調べた時に使用した参考文献を、メモしておく場所を設けることで、民具に連動して表示できるようにしている。

【資料紹介】

民俗資料の中にみられる「茶臼」について—当館の収蔵資料から—

横山 浩子

はじめに

現在は、吉野郡の一部でしか行われなくなった自家製茶であるが、茶は、大和の暮らしに欠くことのできないものであったから、昭和30年代頃まで、農村では、家の垣や裏山など家の周辺、田畑の境界などに茶を植える、いわゆる畦畔茶園が広く一般にみられ、自家用の茶を製していた。

民家でクドサン（籠）が日常的に使われていた頃、そこには必ずといっていいほどカンス（茶釜）が据えられ、いつでも茶を供することができるよう、終日湯気をあげていた。チャンブクロ（茶袋）に自家製の番茶を入れ、煮出し、この茶を使って茶粥も炊く。茶粥は、大和の特色ある食文化として必ず挙げられるものの一つであり、実際、当地方では単にオカイ（お粥）サンといえば、それはまず茶粥を指した。朝夕、またケンズイやオチャなどと称される間食にも、と平素の食生活の柱となっていた。

当館には、こうした庶民生活と茶の深い結びつきの確かな証として、製茶用具、喫茶用具、茶粥に関わる炊飯用具など様々な民具が収蔵されるが、その一隅を複数の「茶臼」が占めている。

茶臼といえば、ふつう茶の湯に関わる道具として認識されている。一般にみられる穀粒等を粉砕する粉ひき臼のように庶民生活に欠くべからざる用具ではなく、どちらかといえば一部の限られた人々の間で行われる特別な趣味や遊興、あるいは社交に関わるものであり、外観も、一段洗練されている印象である。しかし、当館に収蔵する茶臼を実際にみてみると、後に述べるとおりその材質や各部の形状、そこから想像される機能などの点で、今日私達が思う茶臼とは、やや異なるものも混在している。

本稿では、当館収蔵民具の茶臼について紹介することから、失われた庶民の喫茶習俗の一端にふれてみたい。

なお、茶臼の概要やその歴史については、既にこれまで大西市造氏、三輪茂雄氏らによりくわしい論考がなされている¹。また近年、各地で中・近世遺跡の発掘調査が進捗する中、茶臼についても相当の資料の報告が蓄積されつつあり、桐山秀穂氏は考古学の立場からその形状や出土状況などから整理・分析を試みている²。本稿は、以下、特にことわらない場合も全体を通してこれら先学の成果に拠るところが多い。

茶臼とは

まず、これまで、茶臼の特色として形態の上からは、次のような点が挙げられている（各部名称は図1）。

(1) 上臼の中心位置に孔が貫通していること。この孔が材料を入れる供給口であると同時に、下臼の芯木の軸受を兼ねている。一般の粉ひき臼では、上臼の供給口は、中心からはずれた脇にあり、軸受けの孔とは別となっており、また供給口の裏面（臼目のある側）に「ものくばり」が設けられているが、茶臼にはない（写真1）。

(2) 概して一般の粉ひき臼に比して小ぶり、下臼には必ず作りつけの受皿がつく（受皿がつくことによって下臼を安定させるのに必要な重さを保つ役割も果たしている）³。

(3) 上臼側面には臼を回転させるためのひき手（ひき木）を打ち込み取り付けの孔が対

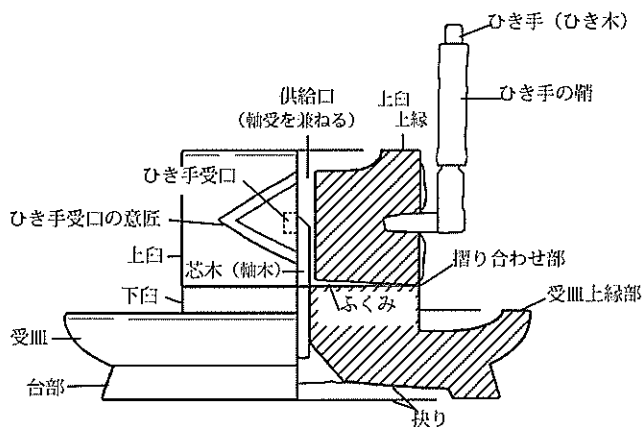


図1 茶臼の各部位名称(註2第1図から註1中の名称を参考に一部改変)

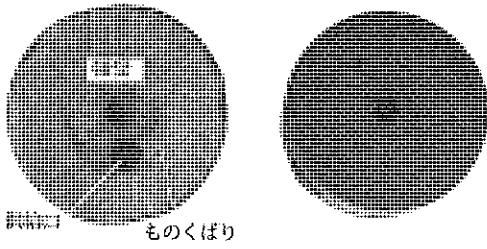


写真1 一般の粉ひき臼(左)と茶臼(右)の上白裏面

臼とみることもできる。

大西、三輪両氏は工学の立場から、抹茶製造に使用される代表的な手動臼である宇治石(現京都府の宇治朝日山産の石)の茶臼のように高精度の茶臼について、その構造と微粉碎の原理をくわしく解説されている。

既述のとおり茶臼は、芯木を供給口に直接嵌する構造となっていて、ここでまず、供給口(軸受)から入った原料は、直接上下臼面間隙に達する前に芯木と孔壁の間で荒粉碎される仕組みとなっている。また、このとき芯木の太さが供給口より少し細くあそびをもつことによって、上臼を回転させると、上臼は完全な回転ではなく、摺動を伴った複雑な動きをし、微粉碎効果を増すという。芯木の素材は榿木、石臼本体より硬く上臼供給口の磨耗・変形をきたしたり、加熱・磁性など茶の成分に影響を及ぼす金属は避けられる。木質がよいのは、その長さや径、先端の形が材料の落下量や製品の粒度に影響を及ぼすため、必要に応じてその調整、交換を行わなければならないからでもある。先端は「三つ目錐」様の独特の形に加工されている。

次に荒粉碎された材料は、芯木によって落下する量の規制をうけつつ、最大0.5mm程度という狭小精妙に調整された上下臼の間隙(ふくみとよぶ)に適宜送りこまれるが、ふくみは周縁部へいくにつれて狭まっており、周縁の接面(摺り合わせ)で仕上げの粉碎が行われる。臼目のパターンは明確な分角を有し、臼目も細かい。ふつう8分画、10~15の副溝がある。また、条線の断面は鋭いV字形をしており幅約1mm前後。さらに、これは後発的な加工というが⁶、周縁部5mmほどを控えて目を切らず平滑な摺り合わせとすることがみられるのは、よりきめ細かな粉末とするための工夫で、茶臼の特色の一つとなっている。

特に抹茶の場合、その品質は、味覚、視覚(色)、触覚(舌触り)、嗅覚(香り)の総合したものであり、それらは臼面の微妙な調整により変化するため、非常に高い技術が求められるという。材質は、当然粉碎中に石粉が削落するようなことのない硬質緻密な石が適しており、抹茶臼に最良といわれる宇治石は輝緑岩、現在の電動臼では、茨城県真壁産の糠目石など、花崗岩の中でも茶臼に適したものを吟味し使用されているという。

当館の茶臼について

当館が、民具として所蔵または寄託を受け保管する「茶臼」は、合わせて15点ある(表1)。尤も、茶臼といっても①先に述べた茶臼の形態的特徴に一応合致しているもの、以外に②呼称・用途は茶臼であるが、形態的には粉ひき臼とみるべきもの、③形態的には、茶臼と呼ぶべきものの範疇にあるが、別の用途に使用されていたもの(名称も用途も本来の臼の機能から全く離れてしまっているものの、形態から元来茶臼であったと推定されるもの)、を含んでいる(表2)。

形状・材質(表1)

まず、NO.1~5は、その形態上、「宇治臼タイプ」とも称することができる、抹茶臼と見なしてもまず差し支えないものである。このグループは、下臼受け皿の縁上面の加工やひき手受け口の意匠彫刻などの細部加工に若干の違いがみられるが、全体として定型的である。材質は硬質で緻密な肌火成岩、上臼、下臼とも8分画に目を切り、副溝も10本前後、周縁5mm程は臼目を刻まない。臼を回すためのひき手は打ち込み式、受ける口は2箇所対面にあり「子持菱(菱を二つ重ねた模様)」の意匠を配す(写真5~9、図7.8)。榿木の芯木の先端は何れも三つ目錐状に加工されている。天理市、平群郡、北葛城郡、吉野町から各1点収集されているほか、NO.1は西大寺豊心丹の製造用具(西大寺蔵、寄託品)の中にも含まれているものである。

後のNO.6～14の9点（うち2点は上臼のみ、2点は下臼のみ）は、石材が砂岩系のものである（写真10～18、図9～12）。上記の5点に比し、それぞれが個性的である。

NO.6は、当館の砂岩系の茶臼の中では最も作のよいものである。比較的硬質緻密な石質のもので、かなり使い込まれたものとみられ、芯木はすり減り、抜け落ちないように使用者自身で補修したものか、下臼の軸孔の裏に蠟状のものが固着している。臼面も減っていて、摩耗によるものか臼目は全く認められない。周縁の摺り合わせは平滑になっているが、もともとこの部分まで臼目が達していなかったかどうかは俄には判断しづらい。

NO.7は、「ひざ臼」「居茶臼」⁷とまでいえるかどうかかわからないが、当館の茶臼の中では、目立って小ぶりなものである。石材の質は比較的よいが、全体のバランスやひき手受け口の意匠彫刻、受け皿の縁に切られている口の作りなど、加工は全般的に素朴な印象である。芯木は下臼面近くで失われてしまっている。臼目の線刻は比較的是っきりしているが、線に乱れがあるなどやや雑である。

これ以外の7点は、前二者とはまた、かなり異なる印象のものである。地域的には、中・奥吉野地域（天川村、大塔村、下北山村）に集中している。石のきめは脆粗で、NO. 9、10、12は風化・摩滅が著しく、臼面は荒れており、臼目の溝が確認できない。NO. 8、11、14の線刻は周縁にまで及んでいる。NO. 8は比較的目は細かく、NO. 11、14の溝は、太く粗い。本数や切り方はまちまちである。NO. 13は、ひき手受け口に子持ち菱の意匠が確認できることから、茶臼の上臼と判断し得るが、後述のように別の用途に転用するためか、上縁は掻き取られ、天地の区別がつかないほど両面とも摩滅している。

ひき手の受け口を飾る意匠は、子持菱と方形の2種である。

下臼の軸受けの穿孔の形は円形と方形がある。NO. 11には一般の粉ひき臼によくみられるような鉄芯が取り付けられている。

下臼底面の加工（抉り）は、鑿跡も整い深く丹念に穿ったもの（8、10）と、薄く粗く掻き取ったもの（11、12、14）がある（表1ならびに補註の表1凡例5を参照）。

最後にあげたNO.15（写真19）は、曾爾村から収集されたもので、下臼に口のついた受け皿がつくが、先に写真で例にあげたように、形態的には全く一般的な粉ひき臼である。また、上臼と下臼では、石材に違いがみられ、本来別々の臼であったものを組み合わせている可能性が高い。

資料についての伝承等（表2）

所蔵品の茶臼は、全て1970年代前半の博物館準備室時代に、県内各市町村及び同教育委員会等の協力を得て、地元の調査員によって収集された。本稿を執筆するにあたり補足調査を行ったが、30年以上も前に遡ることなので、大半は、当事者（寄贈者本人、調査員）に直接お話を伺うことは難しかった。収集時、調査員が記入した調査票の記述に、可能なものについて若干追加、訂正を加えたものが表2である。

NO.2～5の4点は、何れも旧家からの寄贈であるが、予測に反して茶の湯と直接関連づけるような内容は聴取できなかった。ただし、NO.4の芯木には抹茶椀の付着物が確認できた。

既述の西大寺所蔵のもの以外にもう一点、製薬に関わるもの（NO.2）がある。茶臼の使用法として、製薬の工程で薬研や乳鉢のほか、石臼（茶臼、粉ひき臼）が用いられる例のあることは、特に本県のように製薬が盛んな地域では、注意しなければならないだろう⁸。

NO.7は、寄贈者によると、実際に使用するのを見たことはないが、先祖に、平野屋宗（惣）右衛門という十三峠を越えて大坂との間を往来して商売をし、成功した人がいて、郡山藩にも出入りを許され、現在の名字を賜った。茶臼はその頃の拝領の品といわれる。残念ながら、宗（惣）右衛門がいつ頃の人なのかはわからないという。

実際に茶をひいたという伝承をもつのは、NO.6、8、11、15の4点である。

ただし、15については、収集時の調査票では茶をひいた臼とされているが、今回改めてお話をうかがったところ、使用者にあたる女性（寄贈者の母、妻）は亡くなっており、ご主人は、台所周りのことについては立ち入ったことがなく全くわからないと断られた上で、茶を臼でひいていたのをみた記憶はないとのことであった。また、同地区に在住する女性にもお話を伺ったがその範囲では、茶粥などの際、茶を煮出すにはチャンブクロを専ら用いたが、臼で茶を粉にすることは知らないという。



写真2 No.13の使用風景（上北山村西原）

NO.10は、下白が藤織りのイトクリ（糸繰り）の台に、またNO.13は、上白部分がカシコ（檉粉）を作るとき、カシの実の殻を割るときの台に（写真2）、と全く本来の臼の機能を離れた用途に転用されていたものである。

番茶を粉にひくこと

吉野地域の砂岩系の茶臼NO.8と11は、伝承の範囲では、いつ頃から使われ始めたものかについては不明であり、大正期以後は使用されなくなっていたようである。材質や臼目の刻み方など、抹茶をひく道具としては不適と思われるが、形態上、茶臼の範疇にあり、また、用途として「番茶を粉にする」(8)「茶粥用の粉茶にするために碾いた」(11)、と伝えられる

(写真12, 図11、写真13, 図12)⁹。

ところで、茶粥に「粉茶」を用いるというのは今でもよく聞かれる。奈良町などで、茶粥用として市販されていたのも「粉茶」であった。自家製茶の場合、できた茶（番茶）をトオシ（篩）で葉と粉に分け、粉茶を茶粥用にするという。

こうした粉（番）茶のことを「クダケチャ（砕け茶）」あるいは「ドロコ（泥粉）」とも称する。茶袋で煮出すと、水を含んで泥のようになるからだろう。粉茶といっても抹茶のような微粉碎ではなく篩を通る程度の粗粉碎の状態で、砕け茶という呼び方のほうが実物の感じをよく表しているかもしれない。

粉（番）茶を用いる理由については、経済性から説明されることが多い¹⁰。茶粥はチャンブクロ（茶袋）に入れて茶を煮出すのだから、茶殻が混入して口中に残るといった支障もなく、少量でもよく色がでる。屑茶も無駄なく利用できる。

また、「揉まないで作られた自家用番茶なので（茶葉を）チャンブクロに入れて揉んで粉にすることによってしっかりと煮出せる」というように¹¹、それは同時に製茶法にも関わっている。

この場合の製茶法は、茶を枝茎ごと刈り、蒸すかまたは湯につけるなどした後、天日乾燥し、ヨコヅチヤカラサオなどで叩き砕いたもので、「ニッカバン（チャ）」また「タタキバン（チャ）」などとよばれた¹²。筆者も、当博物館付近の大和郡山市内の矢田山や小泉で近年まで複数のお年寄りから伺うことができた、自家製茶の終末期までみられた製法である。このお茶は、急須にお湯を注ぐ、現在私達が普通行いういわゆる「淹茶」のような入れ方はしなかった。カンスで終日煮出し、用いるもので、場合によってこれを飲用時、改めて薬籠や急須に入れ直し、供したという。

大正初期に記録された資料であるが、いま『奈良県風俗誌』¹³の「飲食並関連事項」の項から拾ってみると、こうした番茶の製法は、当時県下に広くみられたことがわかる¹⁴。

- 一番茶摘採後、二番芽をして一様に出さんが為鎌或は鋏にて茶園の先端を刈り其の刈りたるものを蒸して日光に乾かし槌にて細く打くだき此れを茶袋に入れて用ゆ。（田原村）
- 一番茶を摘採したる後茶樹の剪定をなすにあたり均等の部分を刈取り之を蒸し2,3日間堆積発酵せしめ、之を日光にて乾し、枝と葉を分離せしめて、細かくして自家用に供し、余分は販売する。（豊原村）
- 番茶と称して二番芽、三番芽を刈り来りて釜に入れて蒸し、日に燥かして製す。（矢田村）
- 遅芽を刈取て釜にて蒸し日に乾す。（龍田町、法隆寺村、富郷村）
- 茶の芽を刈り取り蒸籠にて蒸し席に広げ日干す。（耳成村、大福村、香具山村）
- 番茶は其年の硬き葉を刈り取りそれを洗ひ蒸して乾かす。之を揉みて細かくしたるものなり。之を使用する程づつほうらくにてほうじて用ふ。（三輪村、織田村、纏向村、柳本村）
- 番茶は茶の木を刈り来り之を蒸し或は日に干して乾しながらたたいて細少となす。（田原本町、多村、平野村）

○番茶は茶を甌にて蒸し之を筵にのばして日に干す。(高取町、阪合村、越智岡村、船倉村)

○茶を枝のまま取り来り、コシキにて蒸し上げ、日光によく乾かして貯え、これを煎りて用ふ。また、尚これを細く搗き碎きて茶袋に入れて用ふもあり。(百済村・瀬南村、馬見村、箸尾村、河合村)

○一番茶のたけたるものを摘み取りて蒸す。而して後日に乾して碎き焙りて食す。(室生村)

○摘み残れる老大葉を摘み又は刈り之を粗目の籠に入れ蒸し揚げ筵等の上に広げ冷却せしめ日光に乾燥してこれを揉み木枝を除く。(下市町)

○自家用のものとして新芽と共に去年の古葉を交せて摘み取り蒸して乾かし貯へおきて用ふ。(川上村)

○茶を摘み蒸して乾しりて用ゆ。(野迫川村)

一番茶(新芽)を摘んだ後などの古葉が用いられ、いわゆる「茶揉み」工程はなく、揉むとはいっても、乾燥した後、枝と葉を分離し、また茶葉を砕くため行われるものである。基本的には、長けた茶葉をそのまま天日で乾燥するだけなので、茶の成分が湯に浸出しにくい。そのため、これを煮出すには時間がかかり、その分燃料も必要である。茶葉を細かく砕くことによってその煮出し時間を短縮することができる。ただし、このような用途のため、わざわざ専用器具として茶臼を新調する必要があるかどうか、つまり茶臼の元来の使い方とするには疑問の残るところがある。

ただ、茶粥を作る際の粉茶については、少し違ったニュアンスの報告例があるので次に挙げてみる。

イ. 葉を粉になして粥中に入れて煮るものあり(百済村・瀬南村・馬見村・箸尾村・河合村)¹⁵。

ロ. 忙しいときなど茶を炊き出すのが面倒だからと、茶を焙じて粉にしたのをさじ一杯ずつ振りかけることもあった(香芝町)¹⁶。

ハ. (茶粥を作るのに)茶の粉を入れることがある。茶の粉は唐臼でつぶして、チャブルイで通したり、薬研でつぶしたりした。パンチャよりも粉の方が上等であった(當麻町)¹⁷。

上記は何れも北葛城郡地域の例であるが、今日私達が当たり前のように思っている、茶袋に入れて煎じるような仕方ではなく、茶を粉末にして直接湯に投じ、茶葉ごと喫することがあったということを知ることができる。特にハでは、パンチャ(番茶)とは区別されていること、茶を粉末にするためにかなりの手間がかけられていることがわかる。

中曾司町のヒキチャ

奈良盆地地域から収集された資料、No.6も茶をひくために用いられたものである。さらに、これは今回紹介する資料のうち最もその用途を明確に知ることのできるもので、県下で知られる唯一の振茶習俗ふりぢやの事例でもあるので少しくわしく述べる。

自家製茶(ときに代用茶)を煮出したり、粉にひいて湯を加えたりしたものを茶筥で泡立てていただく喫茶法は「振茶」と総称されている。現在、沖縄や本州の日本海側などに僅かに伝承されているが、かつては、北は青森県から南は沖縄県まで、広い範囲に分布がみられたという¹⁸。

当資料の旧所在地である橿原市中曾司町なかつがしには、この振茶の一類型とみられる「ヒキチャ(キリコ茶、単にオチャともいう)」という喫茶の風習が伝えられている。このことは、既に漆間元三氏によって詳しく報告されているのをはじめ、多くの研究者が当地を訪れている¹⁹。近年では寺田孝重氏らの研究グループが使用される用具も含めた詳細な調査を行い、筆者も2004年1月、調査に同行の機会を与えていただいた²⁰。

中曾司町は、曾我川西岸に位置する奈良盆地南部の農村である。交通の要衝として栄えた八木町や寺内町として知られる今井町、高田町にもほど近く、近年は、村のすぐ脇をバイパス道路が横断するなど、激しい都市化の波に洗われつつあるものの、環濠集落の名残を今も感じさせる。

現在、「中曾司のお茶会」保存会によって保存・継承されているこのお茶会は、昔は町内60歳以上の女性達で構成される正福寺(浄土真宗西本願寺派)の尼(女)講ほか寺での寄合のとき行われたほか、春と秋にはどこかの家が随時「大茶」とよばれる村中の人々を招いての茶会が催された。また、冠婚葬祭など何かことあるごとに近所や懇意な人を招いてお茶を飲んだ。

以下がその概要であるが、特色は、茶を茶臼で粉にひいて用いることである。

①「ヒキチャ」に使用されるのは自家製茶で、4月末頃の早朝から1番茶の新芽を摘み、これを蒸して筵

で揉み、天日干しして再び揉むことを2～3回繰り返したものである。この点、揉まずに作られる碾茶とは異なる。出来た茶は保管しておき、茶をひく前にその都度ホウラクで焙じて手で細かく潰す。これを茶臼でひいてさらにトオシ（篩）にとおす（ただし、現在は市販の抹茶を用いる）。

②このひき茶を茶碗に入れ、白湯を差して茶筌で泡立てるが、このとき少量の塩を加えるのも特徴である。炒った自家製茶の粉でたてたお茶は、市販の抹茶のように緑色ではなく茶色っぽかったという。

③よく点ったらさらに湯を足し、最後にキリコ（カキモチの端などを糞子状に切り、炒ったもの）を加え、「チャノコ」とよばれる野菜の煮物とともに供する（写真3）。

ひき茶を用いてお茶を点てるといっても、製茶方法や塩やキリコを加える喫茶方法など現在の薄茶とは、味覚の点でも大きく違うことが想像できると思う。

当地域では、茶臼は社会生活を営む上で必須の用具であり、このためかつては本家、準本家筋にあたる各

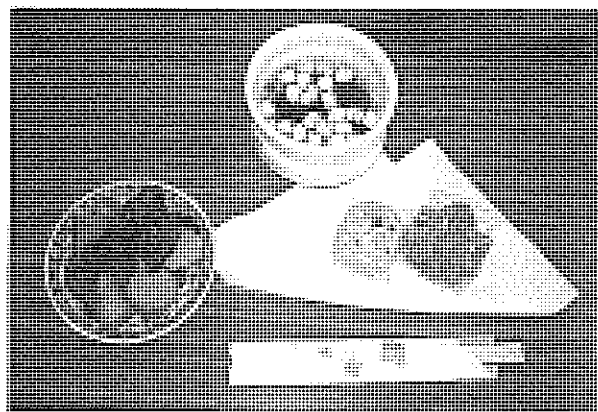


写真3 中曾司町のヒキチャ（中央上）とチャノコ（左の皿）



写真4 ヒキチャに用いられた茶碗と茶筌（当館蔵）

家々に茶臼が蔵されていたといい、現在も地元で14点の茶臼の存在が確認されている。このことについては既に、吉永清志、伊藤明子両氏が報告されているので、今これによると、輝緑岩製以外に、砂岩系、安山岩系、花崗岩系と、石材が多様であること、ひき手受け口の装飾彫刻はほぼ菱形であるものの、二重菱、三重菱、反り菱など一様、定型的ではないことなどが指摘できる²¹。民間が所持する什器、特に高額なものについては、必ず新調するとは限らず、古物商や家の移転などに際しての売り立てを通じて入手する例も多い。中曾司の茶臼もそうしたものの集積の結果と想像するが、産地や制作者（あるいは職人の系統）、製作年代の異なると思われる様々な臼が、一集落にこれだけ大量に蔵されている様子に驚かされる。

臼の条線も周縁まで達しているものと平滑なもの両方があり、副溝の切り方も精粗様々で、中には当館のNO.6と同様摩耗するにまかせ、条線がごく薄くなっているものや全くない状態となっているものがある。しかし、実際に自家製茶と形状の似ている「青柳」（番茶）を使って茶をひいてみたところ、抹茶に比べやや粒子は粗いものの、「ひき茶」で使用するには、全く問題がない粉末となることが確認されている²²。

茶筌、茶碗は、現在では市販の茶道具が用いられているが、本来、茶筌は地元の古老などの手作りのもの、茶碗は磁器製で、染付の飯茶碗様のものであった。当館には、かつて使用された茶臼、茶筌、茶碗一式が寄贈されている（写真4）。

当地の風習については、19世紀前期（1810年代頃と推定される）の『高取藩風俗問状答』に「（前略）中曾司村一村にかぎり昔より法事佛事をせず、村内に茶園あり茶を摘製し家毎に茶を點ず、年回其外志ある日は朝茶を點ず、其節は家の外に筵を敷置候得ば、野え行もの不残休ふ茶を點じて振舞ふ、又村人も昔より至て質朴也といふ。」との記述があることが知られている。なお、この一文は、正月16日、西大寺法会（修正会）の結願に際して行われる施茶、即ち鎮守である八幡社に茶を献じ、その余服を僧侶達が喫するとともに民衆に施茶がおこなわれるという記事に併記されている。この行事は現在同寺で4月、10月を中心に執り行われる「大茶盛」の元となったとされる²³。当時の西大寺の施茶は、一升二升三升まで入る樹鉢のような器で点茶が行われ、遠近から集まった無縁の僧俗にも茶を分け振る舞われるが、その際彼らは自ら「茶子」を用意して皆「腹をふくらし歸る」というものであった。現在、茶の湯的な礼法に則り行われている大茶盛であるが、当時は民間の振茶に近いものであったことがうかがえる。

ひき茶を用いて振茶を行う例は、少ないものの、県外の事例としては、中村羊一郎氏が、福島県の会津地方

の風俗を記録した「貞享二年会津風俗帳」中、伊南古町に関して「茶ハ関東より商人参候、一升二付代十五文、拾文位之茶ニて御座候、所習ニて石うす之ことくニ茶うすを家毎に用意仕度ミナひきちヤニ仕候而給申候」の記述があることを紹介し、「ここでは茶筥で振るとは書いていないが、おそらく、煎茶（番茶）を挽いてから振って飲んだものではなかろうか。」とされている。また、駿河国旧安倍郡玉川村（現静岡市）に関する昭和初期の記録である『玉川村誌』に「昔は茶を炊り茶臼にかけて粉となし、其粉を桶（三升桶位）に入れ鍋にて湯を沸し、其沸したる湯を桶の中に入れて振り出して後、茶碗にて飲みたるものなり」とあることも紹介されている²⁴。これらは茶を臼でひいて用いる振茶の例といえ、かつては一定の広がりがあったとも考えられる。

県内では、現在までのところ、煎茶、ひき茶を問わず、振茶の例は、中曽司町以外には知られていないが、過去の民俗調査等の記録の中に、管見による限り1例、吉野郡十津川村旭字榎ノ本で「昔は抹茶が大分流行ったものらしく小さな碾臼がどの家にもある（中砂菊次 明治23生）」との林宏氏による聞き取りがある²⁵。勿論これだけでは、直ちに榎ノ本に類似する習俗があったとはいえないが、専門職人の手で作られ、それほど安価に入手できるものとも思われぬ茶をひく専用器具を、村中が所持していたという状況は注目される。

むすびにかえて

13世紀中葉以前にも遡るという茶臼伝来以降の長い歴史の中で²⁶、考古資料、伝世資料をあわせ、茶臼とされている実物資料全体についてその材質をみると、輝緑岩、閃緑岩、斑糲岩など硬質な火成岩系よりも砂岩が時代的にも地域的にも、あるいは階層的にも広がりを持ち、圧倒的に多い²⁷。その中には「一見セメントと見間違える」ような²⁸軟質脆粗で、今日の感覚からすると、あまり茶臼には適さないとされるものもある。その他安山岩、凝灰岩等も多く、材質は多様である。また、臼目もまちまちで、本来の抹茶臼と比較すると太く粗いものや、細かすぎるものもある。こうした点について、三輪氏は、形態上からは茶臼とよぶが、例えば火薬製造など、茶をひく以外の目的に使われたものが含まれている可能性を示唆している²⁹。一方、桐山氏は、形態上一定の条件をみたま茶臼をひとまず茶の湯と結びつけて考える立場を取りつつ、臼目の不備は再刻、再々刻されたもので、米や麦など穀物をひくのに用いるなどの転用されたものか、また石工が茶臼の目立て技術をもっていなかったものと推定している³⁰。

桐山氏は、発掘資料の材質や形態からの詳細な分類、出土地域や年代、遺跡の性格との関連などについての分析から、その歴史の変遷について考察している。それによれば、茶臼の歴史は、大きく三期に分けられるという。

第一期：13世紀中葉から15世紀前半茶臼の分布が禅宗、律宗寺院に偏る時期。そして、中国産と考えられる茶臼は禅宗系寺院に集中し、国産と考えられる砂岩製茶臼は律宗系寺院に集中する。15世紀前半、東北北部、北陸、北部九州では居館跡より出土するようになる。特に東北北部については、本州経由ではなく、独自のルートで伝来した可能性もある。

第二期：15世紀後半～17世紀前半。茶臼が全国的に、そして主に城や館、集落で出土するようになる時期。桐山氏の見解では、それは火薬製造などのためではなく、天目茶碗の量産などと相まっていわゆる「茶の湯」の普及と考えるほうが自然としている。この時期、茶臼の生産は全国的に広がるが、その一方では茶臼が上流の階層のものとして一般庶民のものに分化することも指摘できる。

第三期：17世紀後半以降。茶臼の分布がまた都市遺跡、特に寺院や武家屋敷などに限られていく時期。これは「茶の湯」が高尚な趣味となり、一部の階層のものとなると同時に「茶の湯」自身が一般の生活とはかけ離れた次元のものとなっていくことを示しているという³¹。

なお、当館の所蔵品にもみられるひき手受口の方形の装飾彫刻のものは、時期的には15世紀以降に出現し、南関東と中国・四国に分布するが、17世紀には途絶えてしまうともされる³²。

民俗資料の場合、製作年代の特定が難しいが、桐山氏が当館に来館された折実見いただき、御教示いただいたところによると、考古資料の例から推して、当館の吉野地域の砂岩系茶臼NO.6、8～14は、和泉砂岩と思われ、何れも江戸期のもので、前～中期にまで遡りうる可能性のあること、特にNO.12は17世紀初期以前にも遡りうるのではないかという。上記の桐山氏の見解に照らせば第二期～三期にさしかかる時期にあたる。

貝原益軒はその著『大和本草』巻十（宝永6＝1709刊行）の中で「點茶は、臼にて引たるを碗に點ずる也。

日本に、昔は賤民も、點茶を用ひて、煎茶はまれなり。近年は、民間點茶はまれにして、多くは煎茶をのむ。」と記している³³。また、これとほぼ同時代、元禄期に記された『河内屋可正旧記』巻6（当記述は元禄6年以前と思われる）にも「煎茶の事」として

「今時まちも里も家々寺々に、昼夜のわかちもなくもてはやす、せんじ茶と云事は、寛永の末正保の比迄は、かつて以てなかりし也。引茶を常に用ひけり。扱も他国には茶をせんじて呑ける由、めづらしきなんめり、なんど、余所事に、皆々いひたりしを慥かに覚しか。」とある³⁴。

同記録は河内国石川郡大ヶ塚村（現大阪府南河内郡河南町）の河内屋五兵衛可正が同村の諸家の様子や事件を国名に記したもので、同郡は金剛・葛城の峰を挟んで大和とも隣接している地域である。これによれば17世紀中葉～17世紀末にひき茶から煎じ茶へと喫茶法が移り変わったという。

当館の資料のうち、製作年代が古い吉野地域の砂岩系の茶臼が、この時期にも廻りうるものとすれば、こうした民間の喫茶習俗の変化の中で、あるものは粉ひき臼として、またあるものは全く別の用途に転用され、あるいはうち捨てられ、本来の使用目的が忘れられたものとも考えられる。

寺田孝重氏は『奈良県における茶業の発達過程の研究』³⁵で、本県における古代から現代に至る茶業の発達の経緯を文献資料に基づき丹念に考察されているが、それによると近世における大和茶の大半は、吉野郡内の山村で生産され、特に寛文～延宝期には茶園の驚異的な増大が認められ、大坂など大都市の市場でも「下市茶」の名で知られていた。中世以前の直接の記録は乏しいものの、その茶生産は文禄検地以前に遡る可能性があり、「中世以前の茶業の伝統が、この近世の入口において急速な展開をしその勢いが江戸中期まで継続した」と述べられている。こうした地域であれば、庶民が製茶法、喫茶法も含めて茶をめぐる技術や文化と接する機会もはやくからあった可能性は高い。上層文化の影響を受けつつ茶を享受し、地域の環境に即した独自の喫茶文化を醸成する基盤は十分にあったと思われる。

ところで、前に挙げた中曾司町には、次のような伝説が伝えられている。

そもそも、中曾司のお茶は神武天皇の治世にこの地の人々の功が大であったことの報償として不老不病の木の実として茶の種をいただいたことに始まるという。その後、いつしか村中が寄合い、茶をいただく風習が承継されるようになったが、そんなある年のこと、茶寄合は分不相応として禁止され、村中の茶臼も打ち割るように、との触れが届いた。村人たちは茶臼を破碎するにしのびず、地中に埋めたという。その後、村に恐ろしい熱病が流行し、困った村人が、神武天皇をおまつりする磐余神社に集まって病気の平癒を祈願したところ、茶会を行わなくなったためのお告げがあった。そこで、村人はお上に嘆願し、ことの次第を述べて、ひき茶の風習を続けられるよう許しを得た。埋めてあった臼も再び掘り起こしたが、そのときの名残で、どれも少し欠けたところがあるという³⁶。

このような伝説の中には、今日まで伝統を守ってきた中曾司にも、風習の存続には紆余曲折があったこと、そして、土地に縁の深い神武天皇という権威によせてその正当性を主張し、これを守り伝えようとする人々の積極的な意志を窺うことができる。この一事をもって、例えば17世紀中葉の有名な農民統制令である慶安の御触書などと結びつけるのは短絡にすぎるが、大和における振茶の風俗は、本来、この地域だけの孤立したものでなく、幾度となく訪れた歴史の風雪に耐えられず、その社会的機能を失い消えていった例が、一つならずあったことを推定させる。

吉野地域にフィールドワークなどで訪れたとき、漬物や柿の葉齧を作るときの重石として、また庭の踏石として茶臼の上臼が使われているのを見かけたことがあった。今振り返ると同地域には、かつて、かなりの数の茶臼が残存していたように思われるのである。また、本県だけでなく各地で民間や民俗資料館等に茶臼が蔵されている例があることは、既に大西、三輪両氏により紹介されているが、近年も例えば宮崎県総合博物館保管の重要有形民俗文化財『日向の山村生産用具』製茶用具の中には、凝灰岩系かと思われる（報告書中では「灰岩」と記載）、当館の砂岩系の茶臼とよく似た伝世品の茶臼4点が報告されており³⁷、うち3点が同じ地区（西臼杵郡日影町岩井川）より収集されている点など大変興味深く思われる。

こうしたことも合わせ考えると、茶臼を特殊なものとして看過せず、庶民生活史の文脈で見直してみる必要を改めて痛感する。

当館の茶臼は、現在の伝承世界より一つ古層に属するものとなってしまっており、物だけが存在し、残念な

がらそれらが何時、どういう目的、用途で庶民生活の中で所持され、その後どのような変遷を経て今日まで受け伝えられてきたのか、これだけでは明らかにすることは難しいが、庶民の暮らしの中に確かに存在していた茶臼という道具の存在意義を今少し掘り下げてみることによって、私達が知る歴史の下に秘められたもう一つの茶の世界をみる事ができる可能性もあるのではないだろうか。

〈謝辞〉当館の茶臼については、2度にわたり桐山秀穂氏にご来館いただき、直接様々なご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、このこととあわせて、中曽司町の調査にお誘いいただいたご縁により喫茶文化史研究会例会が当館で開催され、当館の所蔵資料について貴重なご意見をいただく機会を得ることができました。仲介の労をとっていただいた寺田孝重氏をはじめ、会員の皆様にも深く感謝申し上げます。

註

- 1 大西市造「石臼再発見」(『粉体と工業』第6巻6号～第7巻4号 粉体と工業社所収) 1974～1975年。
三輪茂雄『ものと人間の文化史 25 臼』法政大学出版局 1978年、同『石臼探訪』クオリ 1978年、同『粉体工学からみた日本文化』(『民具からみた日本文化』所収) 1988年、同『増補 石臼の謎』クオリ 1994年。
- 2 桐山秀穂「日本における茶臼の研究」(『古代学研究所研究紀要』第6輯 古代学研究所所収) 1996年。
- 3 粉ひき臼であっても臼の直径が1尺以下の場合には、受鉢をつくりつけにして重みをつける。糊臼、豆腐臼、味噌臼などとくに湿ったものをひく場合に多いという(三輪前掲『ものと人間の文化史 25 臼』)。
- 4 桐山氏は、これを「台座文様」とよんでいる。本稿では、「ひき手受け口の意匠」、また表中で略して「意匠」とよんでいるが、以下同じ部位を指す。
- 5 薬や糲薬をひくのに使用されていた他、城郭跡から大量に出土することから鉄砲の加薬作りに利用されたという説もある(三輪、桐山前掲書)。
- 6 周縁平滑型は近世以降、遅くとも18世紀には出現している。三輪茂雄前掲『ものと人間の文化史 25 臼』および桐山前掲書。
- 7 三輪前掲『ものと人間の文化史 25 臼』242頁。
- 8 他にも奈良県農業史編さん審議会編『奈良県農業史 通史編』奈良県農業連合会 1991年、口絵、本文48頁などに例がある。
- 9 NO.8は話者が調査当時(1970年代)79才、NO.11は72才で、使用者は話者の母と記録されており、実際に使用されているのをみた可能性もある。
- 10 例えば、谷阪智佳子『自家用茶の民俗』大河書房 2004年、138～139頁。
- 11 谷阪前掲書 67頁。
- 12 奥野義雄「製茶法とその用具」(『奈良県立民俗博物館だより』通巻第12号所収 1977年)。
- 13 『奈良県風俗志』1915年、奈良県が市町村に依頼し作成された調査書。奈良県立図書館情報館所蔵。
- 14 ただし、今日見聞する吉野地域の自家製茶では、茶葉を蒸すか炒った後、筵の上で手揉みし、天日乾燥する製茶法が多い。また、殺青法としては、十津川村谷瀬では、現在は炒るのが一般的というが、かつて、茶葉を籠に入れたものを湯通しする人もあった。ただし、この方法では、揉むとき水が多く出るので、筵を重ねるなどしなければならず、揉む時間もかかったという(1996年調査)。「奈良県風俗誌」でも、吉野地域で簡易な揉みの製法を伴う例が挙げられている。
○摘み取りたる葉を蒸し筵の上にて揉み日光に曝して乾かす。乾かしたる茶をタル箕にて葉と茎とを揶し葉の方をタテに貯ふ。
茎は槌かきいば切りにて細かく切りて前同様袋に入れて貯蔵す。(宇智村)
○普通簡單ニ製スルトキハ茶ヲ蒸シテ(セイロ)ムシロニアケ足ニテ踏后手ニテモミ日ニ乾ス之ヲイリテ使用ス。(賀名生村)
○自家用ノモノトシテ六月吹葉ノ生育十分ナル時旧葉新葉ノ別ナク之ヲ摘取シ筵ニテイリ揉ミテ乾カシ用フ。(大塔村)
○六、七月頃茶ノ葉ヲ摘ミテ「コシキ」又ハ「セイロ」ニ入レテ蒸シ「ムシロ」ニ出シテ揉ミ桶ニ入レテ一兩日間子カシ後取出シ「ムシロ」ニ扱ケテ日ニ干シ能ク乾キタルモノヲ茶篩ニ入レテ貯蔵ス。入用ノ時取出シ鍋ホウラクニテ煎リタルモノヲ茶袋(布製)ニ入レ茶釜ニテ煮ルトキハ茶汁トナル。(丹生村)
○新芽ヲ摘ミ取りタル後一ヶ月位ノ時摘ミ残りノ新芽ヲ旧葉ト共ニスゴキ取り蒸シテ熱ノヒエダル中ニ十分ニ手ニテ又ハ足ニテ乾カシタテニ入レテ貯蔵ス。之ヲパン茶ト曰フ。(中庄村)
○茶ハ自家用ノ外製スルモノナク其製法ハ初夏ノ候摘葉シ之ヲ蒸シ筵ナドノ上ニテヨクモミ之ヲ乾シテスルモノナリ。(国栖村)
○初夏ノ候摘葉ヲ蒸シテ筵ノ上ニテヨクモミコレヲ乾燥シ置クモノナリ(四郷村)。
○茶摘ミ取りタル若芽ヲ浅鍋ニテ煎り取り出シテ筵ノ上ニテヨク揉ミ日光ニテカワカスナリ。(上北山村)
- 15 前掲『奈良県風俗志』。
- 16 岩井宏実「奈良県の衣と食」(『近畿の衣と食』明玄書房1974年所収)。「二上村史」二上村教育委員会 1956年にも類似の記述がある。
- 17 『當麻町史』當麻町教育委員会 1976年。
- 18 漆間元三『民俗資料選集 12 振茶の習俗』国土地理協会 1982年。
中村羊一郎『茶の民俗学』名著出版 1992年。
- 19 カメラルボ「茶の風俗中曽司の碾き茶」(『淡交』374号 淡交社 1977年所収)。龍谷真智子「茶の湯古寺巡礼(和) 大和の茶—西大寺・称名寺・正福寺など」(『淡交』32巻5月号 淡交社 1978年所収)、漆間前掲書、中村前掲書など。
- 20 奈良新聞「なら民俗通信」123(2004年10月1日付)、同124(同年10月5日付)。
吉永清志・伊藤明子「中曽司の振茶について」(『茶の世界』vol.8 お茶料理研究会 2005年所収)。
- 21 吉永・伊藤前掲書。

- 22 吉永・伊藤前掲書。
- 23 永島福太郎「西大寺大茶盛」(『茶道文化論集 上巻』1982年所収)。「高取藩風俗問状答」は大和国史会編『大和志』第5巻第1号 1938年(1983年復刻版 吉川弘文館発行)による。
- 24 中村前掲書。
- 25 林宏『十津川探訪録 民俗2』十津川村教育委員会 1993年。
- 26 茶臼は、僧侶によって、喫茶の風習、特に12世紀末の抹茶法の伝来以降もたらされたといわれている。実物資料としては13世紀中葉(鎌倉時代後半)の大阪府西ノ辻遺跡出土の資料が現在までのところ最古であり、また14世紀に成立した『葛城絵詞』に描かれているのが史料上みる茶臼の初見、また伝世資料としては、貞和5年(1349)銘のある高知県吸江寺蔵の茶臼がある(三輪、桐山前掲書)。
- 27 三輪、桐山前掲書。
- 28 三輪前掲『ものと人間の文化史 25 臼』250頁。
- 29 同上。
- 30 桐山前掲書。
- 31 桐山前掲書。
- 32 桐山前掲書。
- 33 『益軒全集』巻六 益軒会編纂 明治44年発行による。
- 34 『河内屋可正旧記』清文堂出版 1955年発行による。
- 35 寺田孝重『奈良県における茶業の発達過程の研究』(奈良県農業試験場研究報告 特別報告)1995年。
- 36 籠谷真智子「茶の湯古寺巡礼(大和の茶—西大寺・称名寺・正福寺など)」(『淡交』32巻5月号 淡交社所収)によった。
- 37 『日向の山村生産用具 資料編2』宮崎県総合博物館 1992年。

【補】表1凡例

- 1 計測の部位は、図2による。ただし、芯木径については軸孔径と差のある場合のみ記載している。
- 2 「意匠」とは、ひき手受口の意匠を指す。分類については、註2の桐山論文による(図4)。
- 3 桐山論文では石材についてA:輝緑岩、閃緑岩、斑れい岩など硬質緻密な火成岩系のもの、B:砂岩系、C:その他の石材とし、「台座文様」(ここで「意匠」としたものとあわせて分類表記されている。本表「参考」欄はこれに従い記載したものである)。
- 4 白面の形態(条線、本文中では「白の目」とも表記)の分類は註1三輪論文をもとにしているが、寄託品も含め当館が所蔵するNo.1~15の臼のうち、確認可能なものはいずれも主溝が八分画であるため表中の記載は図3による。
- 5 「挟り」は底部の加工を指す。寄託品も含め、当館所蔵の「茶臼」はa:鑿痕も整い、丹念に深く挟られているもの、b:浅く粗く挟り取られているもの、c:1.0~1.5cm程度で浅く、均等に挟りきれいに仕上げが施されているもの、に大別される(図5)。

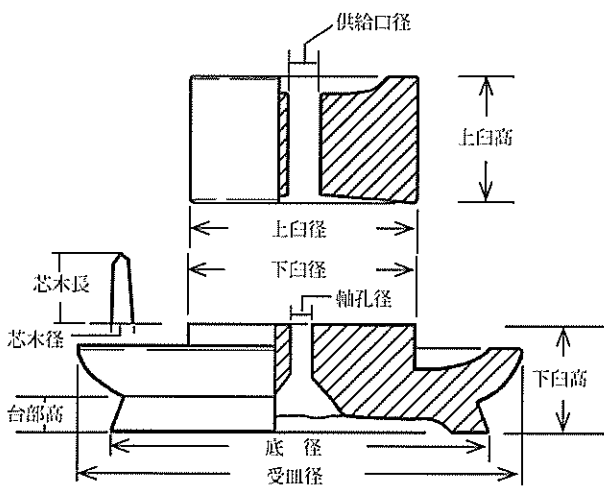


図2 茶臼の計測部位

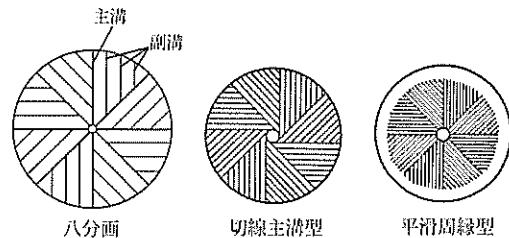


図3 白面形態の分類名称(註1 三輪論文より抜粋)

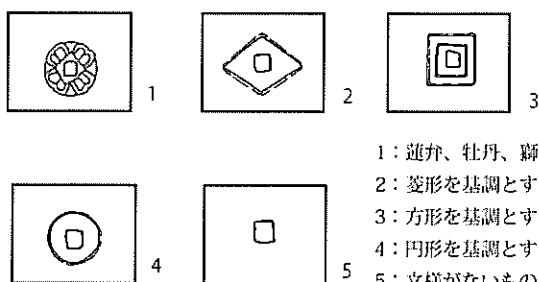


図4 ひき手受口意匠の分類概念(註2 桐山論文による)

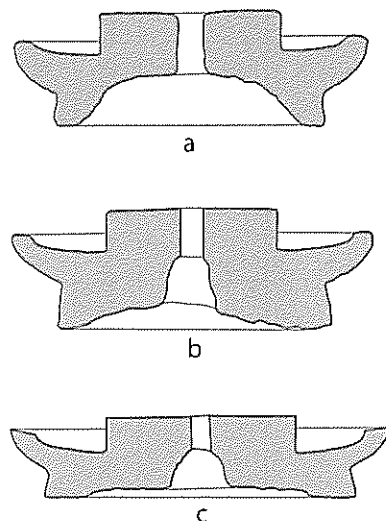


図5 下白底面の挟りの分類概念図

表1 当館「茶臼」一覧票 - (1)
※市町村名は、収集時(1970年代)による

NO.	収蔵番号	収集地	材質	意匠	分類	白面形態	上 白 (mm)				下 白 (mm)							重 量 (kg)			
							上白径	副溝	高さ	中心孔径	下白径	副溝	受皿径	下白高	台部高	軸孔径	軸長	底径	挟り	上白	下白
1	西-記-16	奈良市西大寺	火成岩	子持菱	A2	8分角 周縁平滑	204	11		25	204	11	390	90	35	22	78	334	c	10.6	15.8
2	0400005	天理市三島町	火成岩	子持菱	A2	8分角 周縁平滑	210	9~10	120	26	210	10~11	412	102	22	20	83 軸径19	337	c	11.1	19.3
3	1300067	平群町檜原	火成岩	子持菱	A2	8分割 周縁平滑	197	9	98	26	197	9	367	67	30	22	50	302	c	7.9	13.8
4	2900036	當麻町新在家	火成岩	子持菱	A2	8分割 周縁平滑	202	10~11	115	25	202	10~12	398	69	26	20	85	332	c	10	16.4
5	3500165	吉野町上市	火成岩	子持菱	A2	8分割 周縁平滑	205	10~11	102	24	205	9~10	374	64	28	22	80	309	c	8.8	14.2
6	0500024	橿原市中曾司町	砂岩	子持菱	B2	摩滅 周縁平滑?	203	摩滅	126	上25 下28	203		398	100	42	24	27 軸径16	324	b	9.6	19.6
7	1300051	平群町當貴畑	砂岩	子持菱	B2	8分割	152	7~9	102	21	153	7~9	263	67	25	15	摩滅 軸径12	208	c	4.65	5.6
8	4000005	天川村塩野	砂岩	方形	B3	8分角 切線主溝	187	8~9	115	28	190	6~8	371	101	23	28	欠	285	a	8.2	13.2
9	9915274-1 (上白)	大塔村篠原	砂岩	子持菱	B2	8分角	191	8	123	23	/	/	/	/	/	/	/	/	/	8.6	/
10	9915274-2 (下白)	大塔村篠原	砂岩	/	B	摩滅	/	摩滅	/	/	188	摩滅	398	135	57	19	欠	299	a	/	20.6
11	4400006	下北山村寺垣内	砂岩	方形	B3	8分角	186	4~5	137	28	186	5	383	124	47	22 (方形)	鉄芯 27 軸径11	293	b	8.1	17.85
12	44-池峯	下北山村池峯	砂岩	子持菱	B2	摩滅	176	摩滅	116	26	188	摩滅	390	112	39	21	欠	294	b	6.7	16.8
13	9900746 (上白)	上北山村西原	砂岩	子持菱	B2	摩滅	200	摩滅	114	27	/	/	/	/	/	/	/	/	/	8.0	/
14	未(下白)	吉野郡か?	砂岩	/	B	8分角	/	4~5	/	/	183	/	377	114	38	19 (方形)	欠	303	b	/	16.5
15	2400091	曾爾村今井	砂岩	なし	A5	8分角	230	3	128	22 供給口33	214	3	404 (473)	100	/	26	鉄芯 摩滅	335	b	11.6	21.6

表 2 当館「茶臼」一覧表 - (2)

NO.	収蔵番号	呼称	元所在地	伝承等	使用年代
1	西・託・16 ※寄託品	ヒキウス	奈良市芝町 西大寺	豊心丹製造用具のうち 薬種を粉碎するのに使用	
2	0400005	イシウス (石臼)	天理市三島町	薬草などを粉末にするため、寄贈者の父が使用 (調査報告票)	明治初～ 大正未頃
3	1300067	チャウス (茶臼)	生駒郡平群町藤原		
4	2900036	チャウス (茶臼)	北葛城郡葛城町新在家	飲食用具 穀物を口から少しづついれて粉末にする (調査報告票)	
5	3500165	ヒキウス (挽臼)	吉野郡吉野町上市	話者は、現在 79 才であるが、この臼が使用されているのを みたことはなく、実際に何に使われたかは分からない。 (補足調査)	
6	0500024	チャウス (茶臼)	橿原市中曾司町	お茶ひき (調査報告票) ・詳細は本文参照	
7	1300051	チャウス (茶臼)	生駒郡平群町福貴畑	先祖が出入りしていた郡山藩から拝領したのか (補足調査)	
8	4000005	チャウス (茶臼)	吉野郡天川村塩野	番茶を粉にするとき使う。茶を入れて手でひきまわす (調査報告票)	明治以前～ 大正未頃
9	9915274-1	チャウス (茶臼)	吉野郡大塔村藤原		
10	9915274-2	チャウス (茶臼)	吉野郡大塔村藤原	糸枠に糸を巻き取る用具 (かせくり) の台として使用 (昭和 1985 年調査)	
11	4400006	チャヒキウス (茶挽臼)	吉野郡下北山村 寺垣内 (松葉垣内)	踏み上げた茶を茶粥用の粉茶にするために用いた挽臼 (補足調査)	大正以前
12	未登録	チャヒキウス (茶挽臼)	吉野郡下北山村池峯		
13	9900746	カシタタキダイ	吉野郡上北山村西原	カシの実のカラを取るのに使用する。 カシタタキ台をオケの中へすえて、その上にカシの実をのせ、ツチで 叩いてカラをはずす。 カシの実は粉にしてアクを抜き、カシメシにして食べる。 (1975 年調査)	?～ 昭和 40 年代
14	未登録		不詳 (吉野郡内か)		
15	2400091	チャウス (茶臼)	宇陀郡曾爾村今井	茶の葉を粉にする道具 (調査報告票)	明治

※ 市町村名は、収集時 (1970 年代) による

※※ 「調査報告表」1972～1974 年の調査、「補足調査」は 2006 年の聞き取りによる



図6 当館「茶臼」の収集地

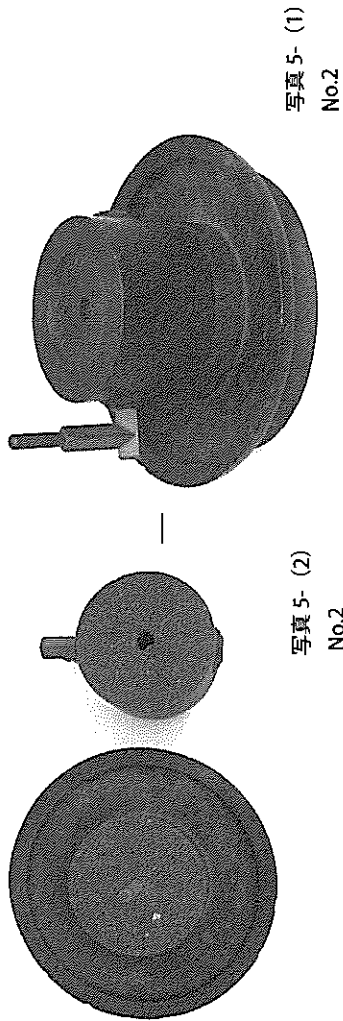


写真5-(1)
No.2

写真5-(2)
No.2

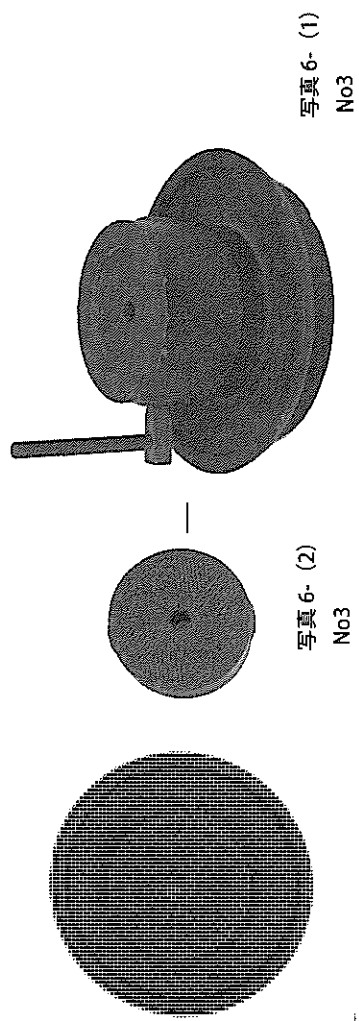


写真6-(1)
No.3

写真6-(2)
No.3

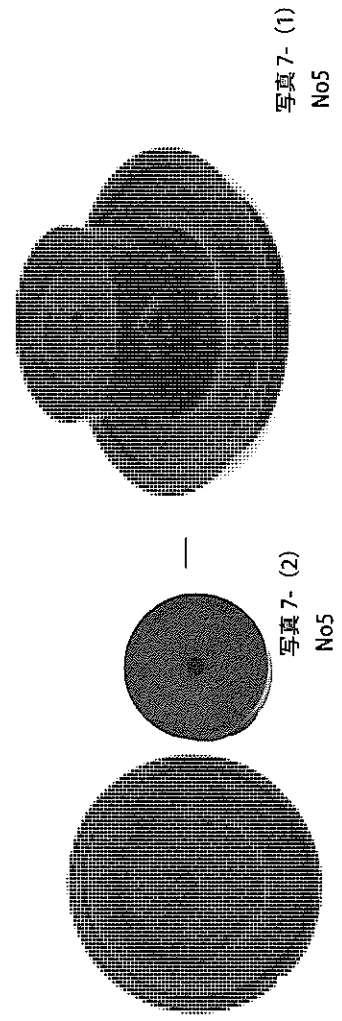
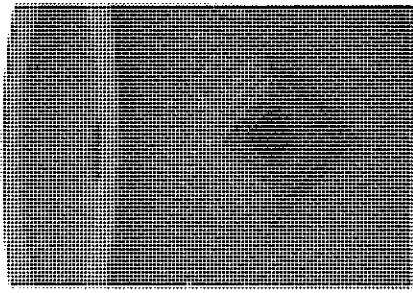
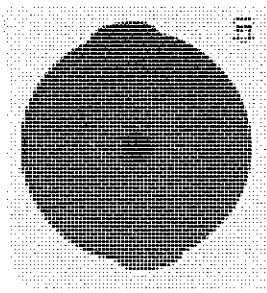


写真7-(1)
No.5

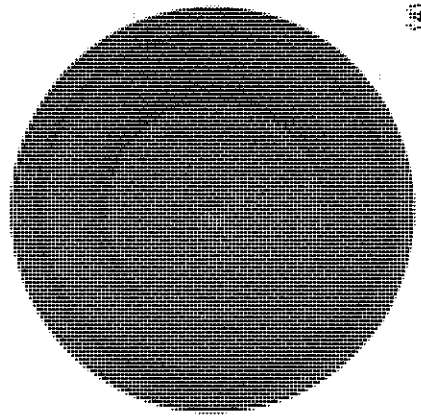
写真7-(2)
No.5



(2)



(3)



(4)

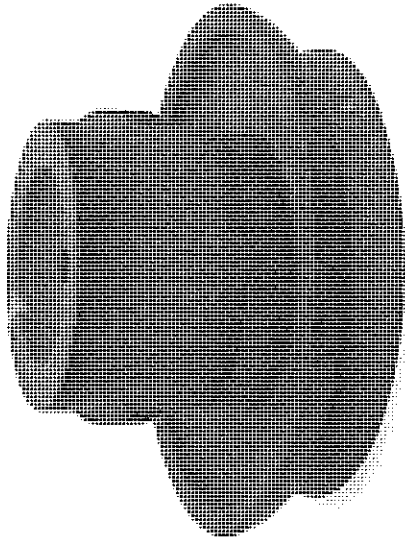
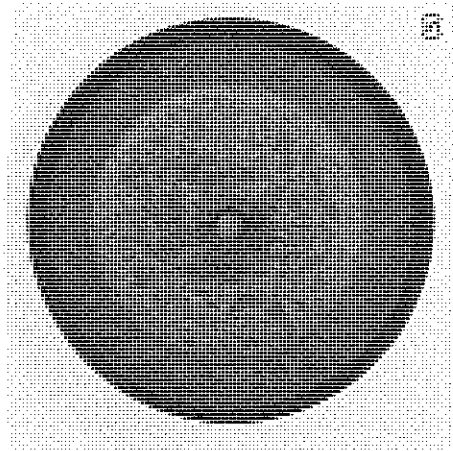


写真 8- (1)
No1



(5)

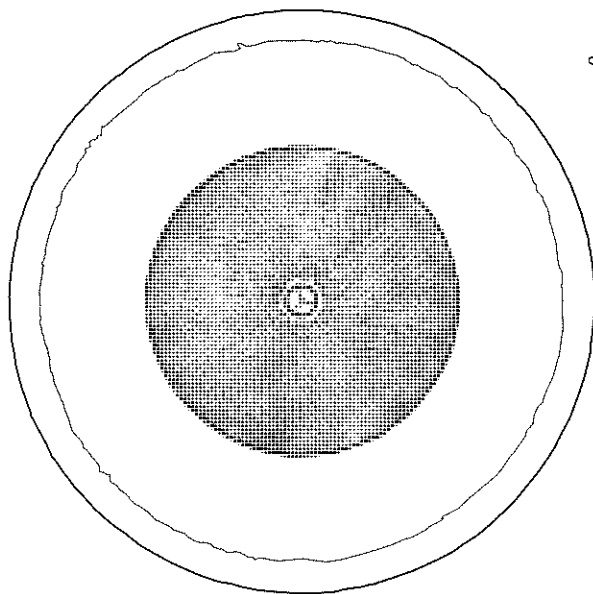
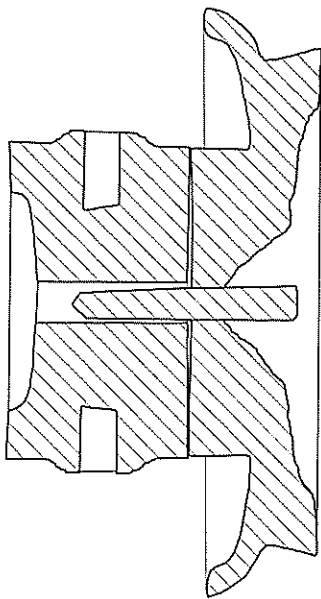


図 7 No 1 実測図 (1/5)

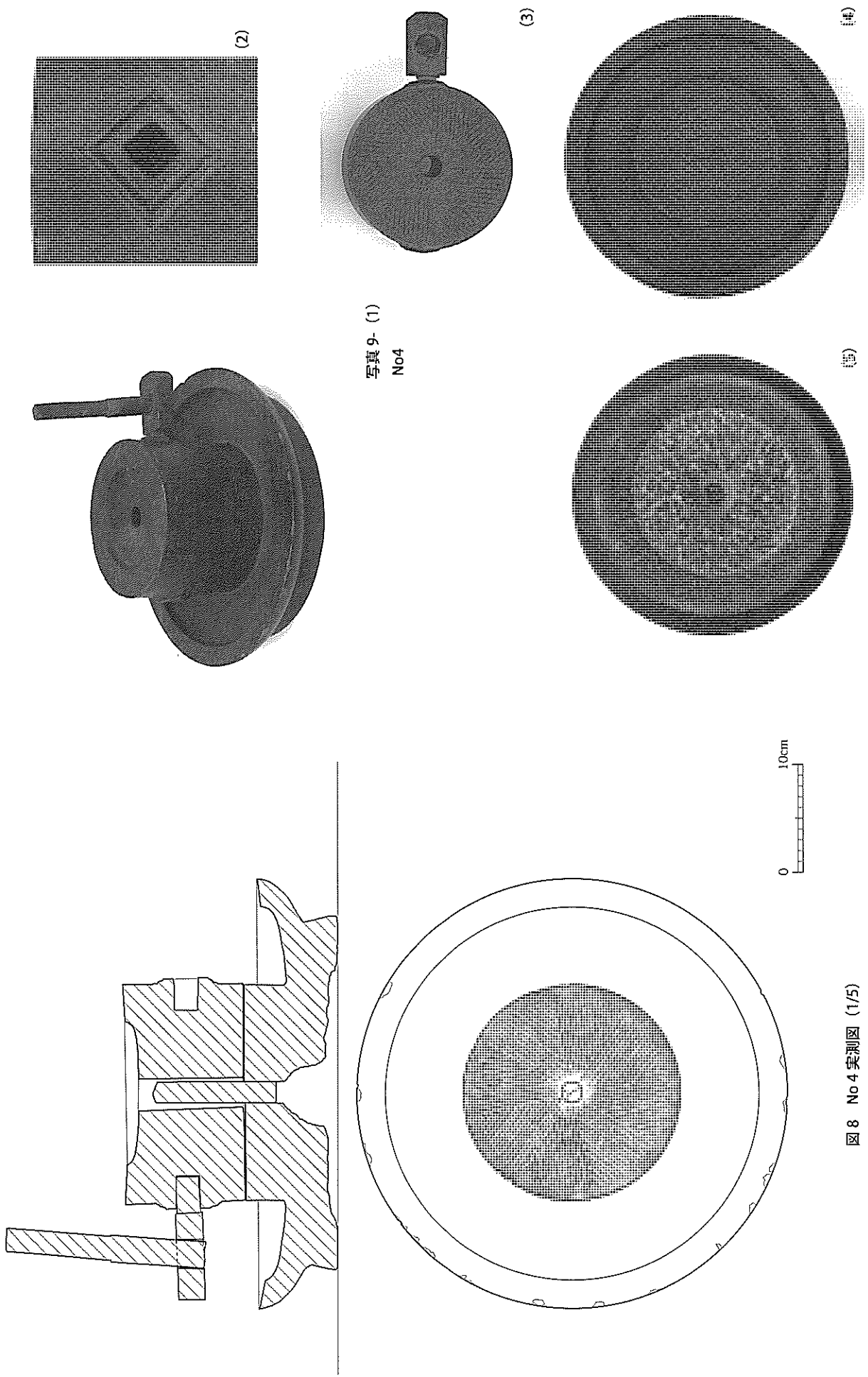


写真 9- (1)

No.4

図 8 No.4 実測図 (1/5)

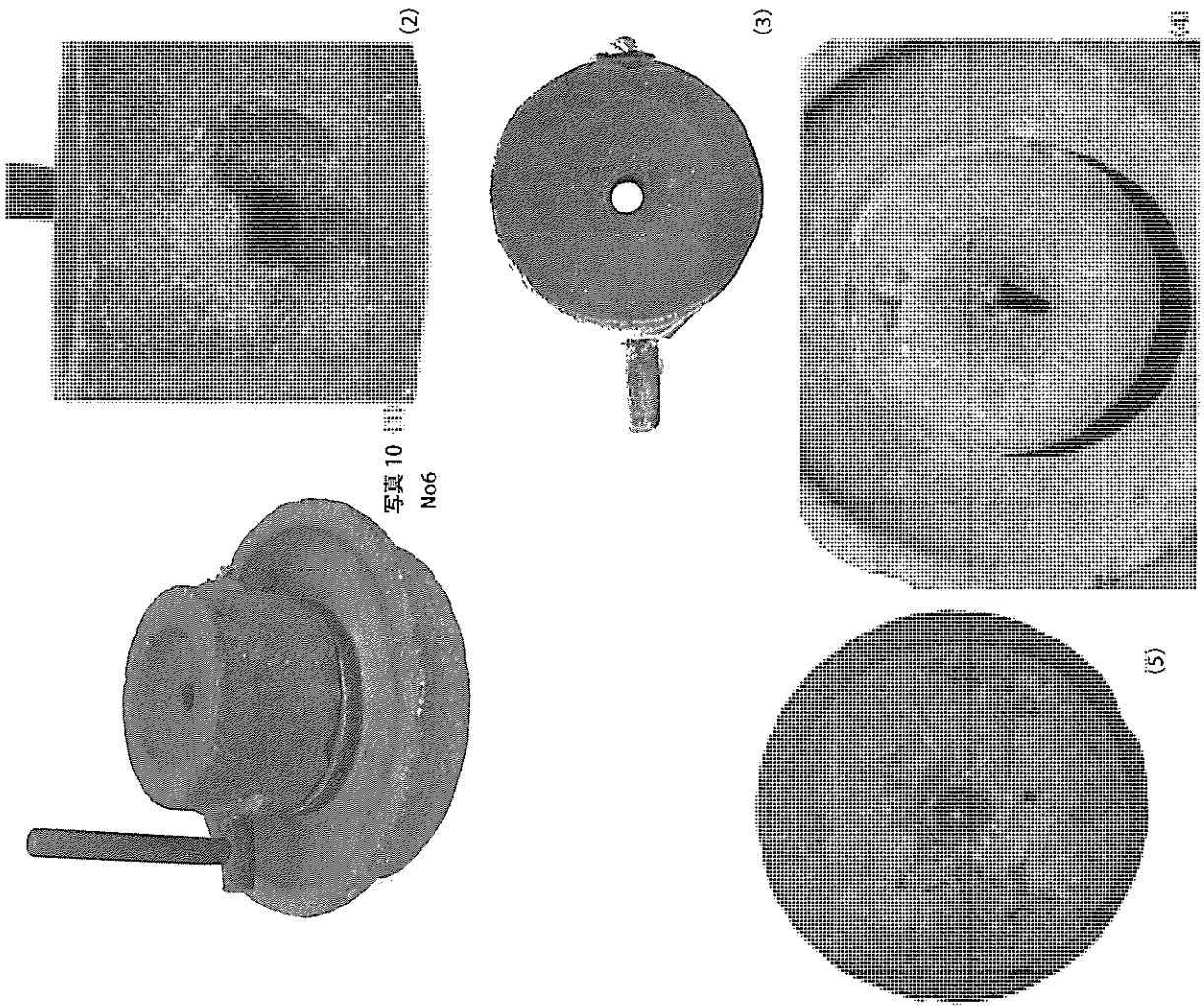
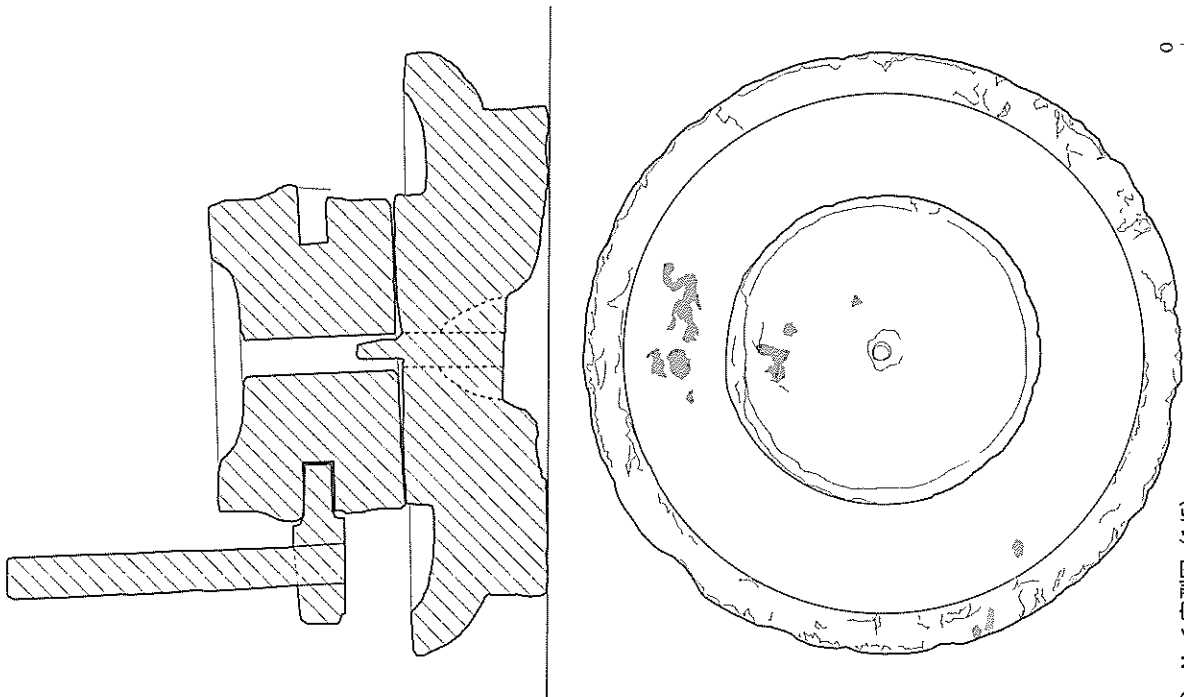
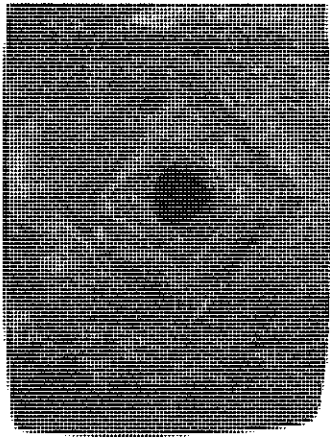
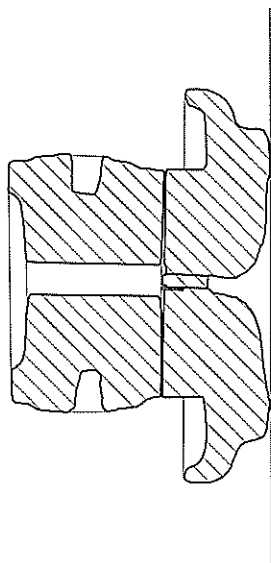


写真 10
No.6



0 10cm

図 9 No.6 実測図 (1/5)



(2)

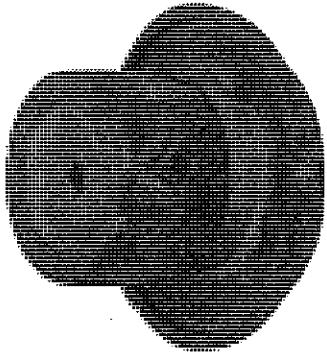
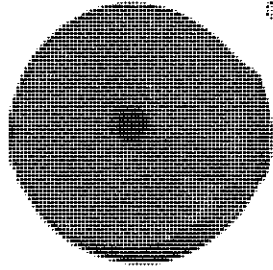
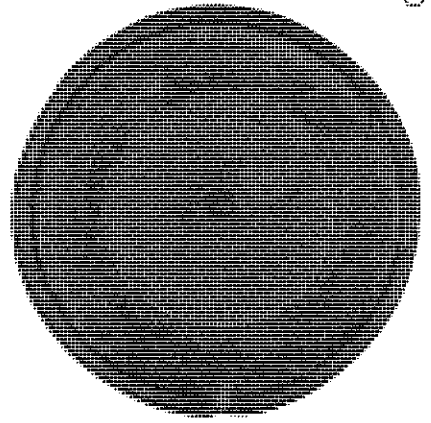


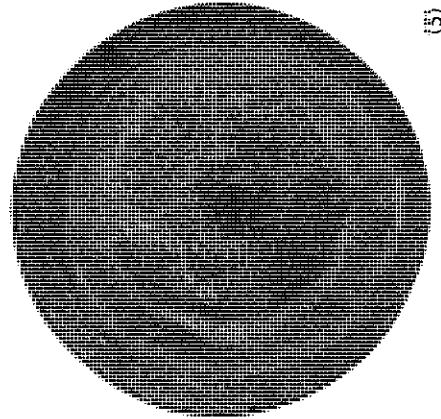
写真 11 (1)
No7



(3)



(4)



(5)

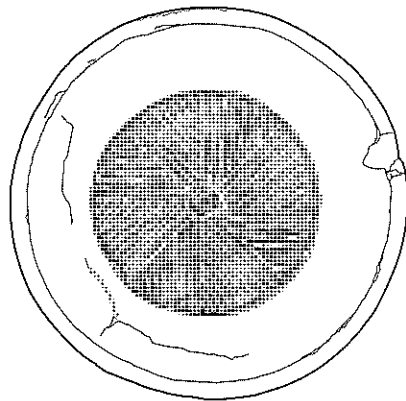
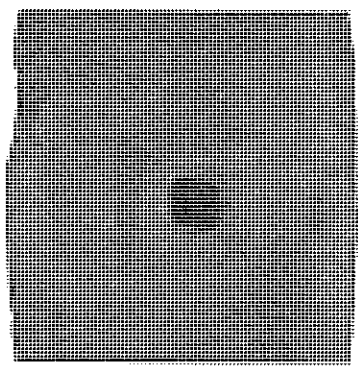
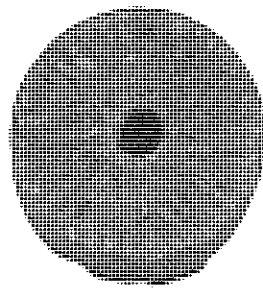


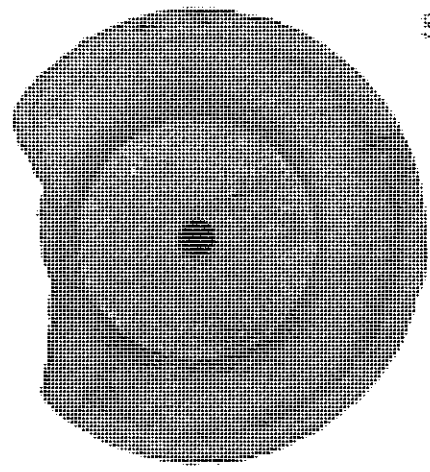
図 10 No7 実測図 (1/5)



(2)



(3)



(4)

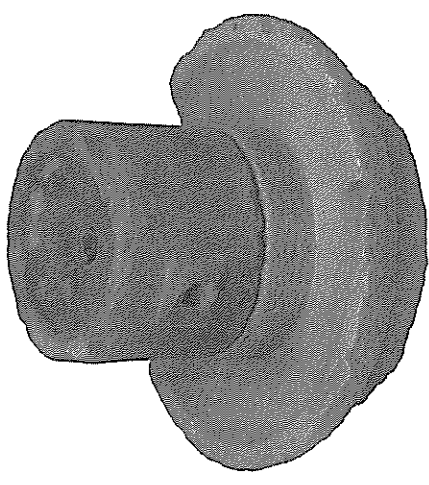
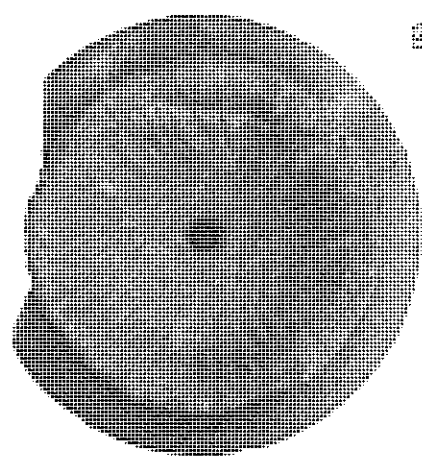
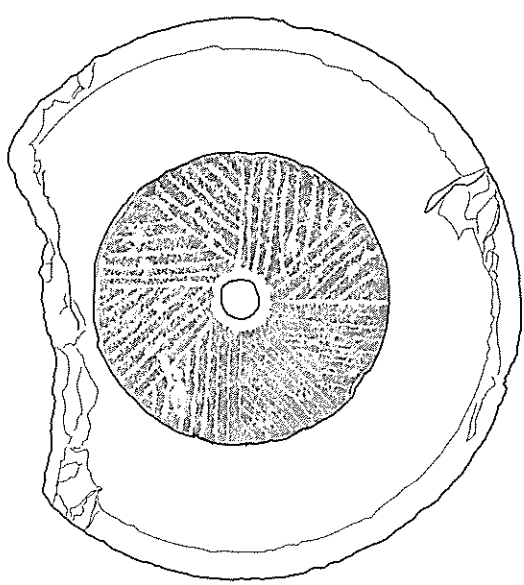
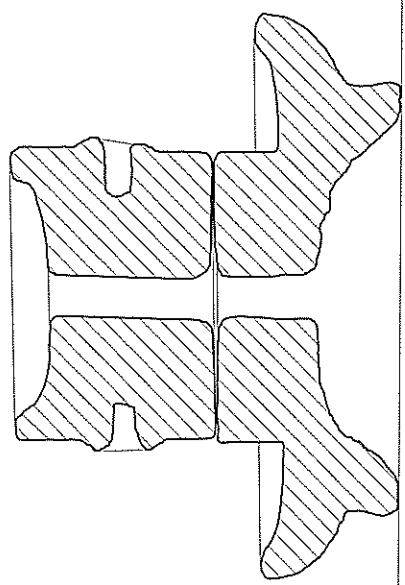


写真 12 (1)
No8



(5)



0 10cm

图 11 No 8 实测图 (1/5)

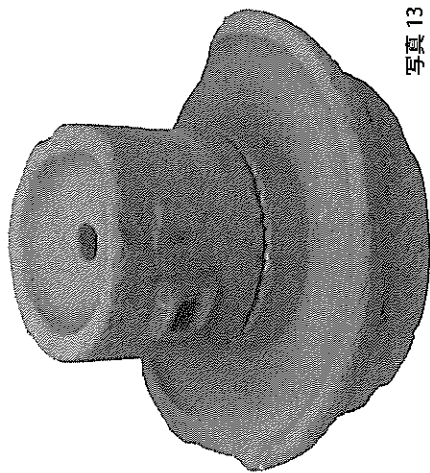
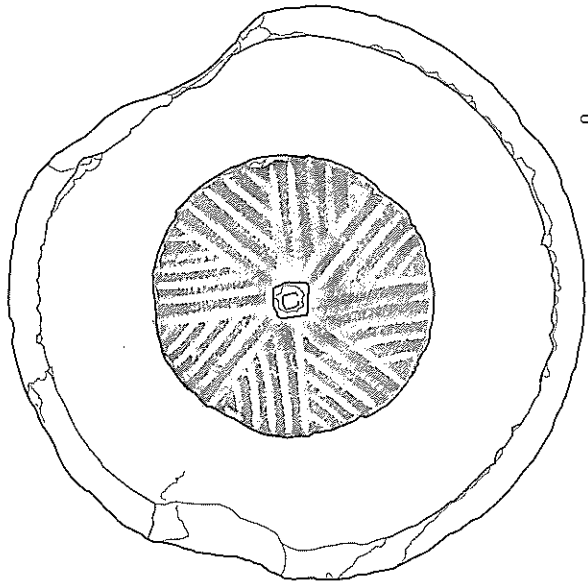
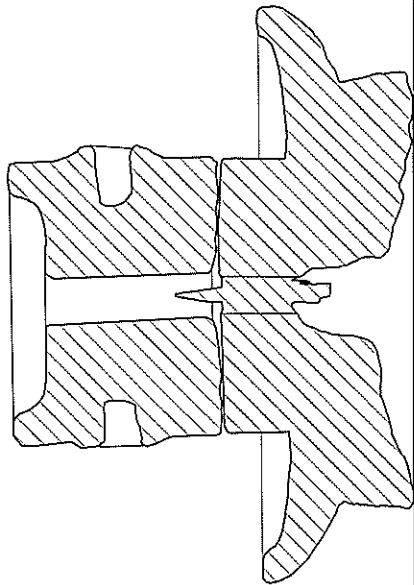
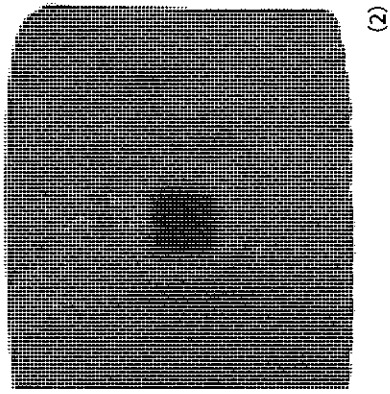
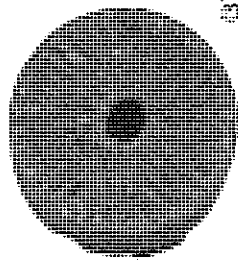


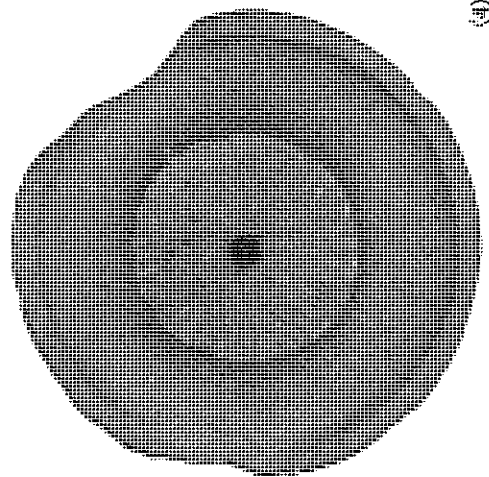
写真 13 (1)
No11



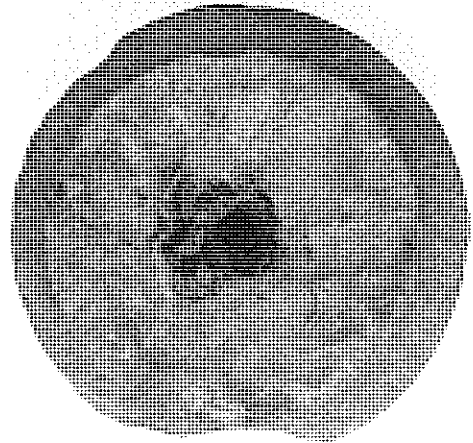
(2)



(3)

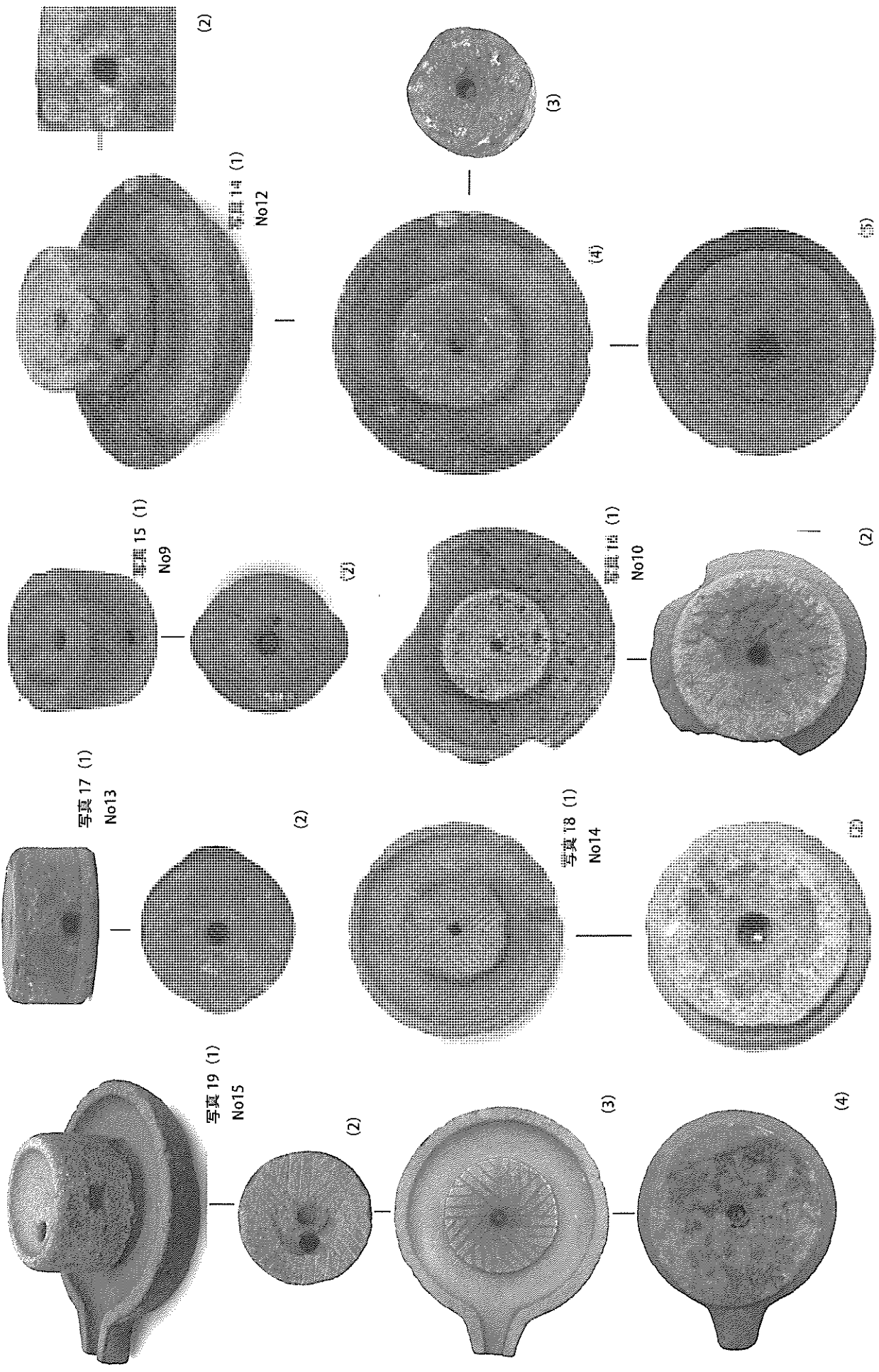


(4)



(5)

图 12 No11 実測図 (1/5)



奈良県立民俗博物館研究紀要 第 22 号

発行日 平成 18 年 3 月 31 日

発行所 奈良県立民俗博物館

〒 639-1058 大和郡山市矢田町 545

(大和民俗公園内)

TEL.0743-53-3171 / FAX.0743-53-3173

印刷所 株式会社 明 新 社

〒 630-8141 奈良市南京終町 3-464

TEL.0742-63-0661 / FAX.0742-63-0660